HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	西興部村調査報告書1 : 西興部村の未来と「若き担い手」 : 中学3年生は何を考えていたか
Author(s)	浅川, 和幸
Issue Date	2017-12-18
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/90713
Type	report
Note	平成28-30年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究（C）（研究課題番号16K04521）「人口減少時代におけるノンエリート青年の社会的自立と中等教育の改善に関する研究」研究成果報告書2
File Information	05_asakawa_kaken_nishiokoppe.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

平成 28～30 年度日本学術振興会科学研究費補助金
基盤研究（C）（研究課題番号　16K04521）「人口減少時代におけるノンエリート青年の社会的自立と中等教育の改善に関する研究」研究成果報告書２

西興部村調査報告書１
西興部村の未来と「若き担い手」
――中学３年生は何を考えていたか――

平成２９年１２月

研究代表者　浅　川　和　幸
（北海道大学大学院教育学研究院教授）

平成 28～30 年度日本学術振興会科学研究費補助金
基盤研究（C）（研究課題番号　16K04521）「人口減少時代におけるノンエリート青年の社会的自立と中等教育の改善に関する研究」研究成果報告書２

西興部村調査報告書１
西興部村の未来と「若き担い手」
――中学３年生は何を考えていたか――

平成２９年１２月

研究代表者　　浅　川　和　幸
（北海道大学大学院教育学研究院教授）

目次

1．研究の課題 ---------- 1
（1）中学生を「若き担い手」としてとらえることの現代的意味 ---------- 1
（2）「地域づくり」研究に「若き担い手」を積極的に位置付けることの意味 ---------- 6
（3）中学生分析の焦点 ---------- 7
（4）「地域アイデンティティ」研究を中学生に拡張する ---------- 8

2．お話しをうかがった中学３年生の特徴と「村コミットメント」---------- 13
（1）中学３年生と家族 ---------- 13
（2）中学３年生の学校生活 ---------- 16
（3）中学３年生の「家族以外の村の人との会話」 ---------- 20
（4）小括――中学３年生の「村コミットメント」 ---------- 22

3．中学３年生の「村アイデンティティ」---------- 24
（1）中学３年生の「村評価」 ---------- 24
（2）保護者の就業類型は中学３年生の「村評価」にどのように関わっているか ---------- 26
（3）中学３年生は村の「良いところ」をどのように考えているか ---------- 28
（4）中学３年生は村の「良くないところ」をどのように考えているか ---------- 34
（5）中学３年生の「村評価」の構造 ---------- 38
――「良いところ」と「良くないところ」をどのような枠組みで対比しているか
（6）小括――中学３年生の「村アイデンティティ」 ---------- 44

4．中学３年生の進路志向と「将来イメージ」 ---------- 50
（1）村の中学生の進路の特徴――制約のある進路決定 ---------- 50
（2）卒業後の進路と「村評価」の関係 ---------- 54
（3）「将来の居住地志向」と「村評価」の関係 ---------- 56
（4）「将来の居住地志向」と職業志向の関係 ---------- 61
（5）「将来生活志向」の構造と特徴 ---------- 64
（6）将来の「夢」の構造と特徴 ---------- 70
（7）小括――中学３年生の将来志向と「将来イメージ」 ---------- 72

5．まとめ――「冬囲い」の時代の「村アイデンティティ」のゆくえ ---------- 77
（1）「村コミットメント」への示唆 ---------- 78
（2）「村アイデンティティ」への示唆 ---------- 79
（3）「冬囲い」の時代に「夢」を拓くこと ---------- 84

補論　OB・OGの「村評価」と「将来の居住地志向」の変化 ---------- 85

謝辞

追記

この論文の元になった調査は、平成28～30年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）（研究課題番号　16K04521）「人口減少時代におけるノンエリート青年の社会的自立と中等教育の改善に関する研究」）を用いて行った。

１．研究の課題

（１）中学生を「若き担い手」としてとらえることの現代的な意味

本報告書における研究の課題は、「西興部村の未来と『若き担い手』」について、実態調査を元にして考えることである。副題としては、「中学３年生は何を考えていたか」をもっている。この研究の課題の名前には、二つのことを結びつけて考えるという研究の骨格が示されている。ひとつは「西興部村」の未来を考えることである。そしてもうひとつは「若き担い手」を考えることである。この両者は、「若き担い手」を通して、「西興部村」の未来を考えてみるということで結びついている。ところで筆者は西興部村に行う報告（書）を第１部と第２部の二部構成で行う予定でいる。本報告書は第１部として「若き担い手」として「中学３年生」をとりあげ、「何を考えていたか」についての実態調査の結果を示し、それ基礎に西興部村の未来についてどのようなことを提言できるのかという点について報告するものである。この後作成される予定の第２部は、「若き担い手」として西興部村で働く若い方を取り上げる。

まず、西興部村の「若き担い手」に、中学生を位置づけて西興部村の未来を考えるという研究課題の設定の仕方について説明しなければならない。なぜなら、中学生を地域の「担い手」としてとらえるという考え方は、あまり一般的なものではないからだ。まずもって、中学生は「保護の対象」であり、「教育の対象」であるという考え方は根強い。中学生を学校と家庭の両方の閉じられた（守られた）環境を往復する振り子のような存在として理解するわけである。

しかし現在、中学生の生活する環境に変化が生じている。たとえば、学習指導要領においても地域という場（生活環境）の扱い方にもそれがうかがえる。学習に地域を生かすことが積極的に打ち出されただけではなく、「地域社会の形成に参画」することさえもうたわれた。制度的にも「コミュニティ・スクール」の取り組みが進められようとしている[1]。こ

---

[1] 現行学習指導要領（平成 20 年 3 月公示。平成 27 年 3 月一部改正）において、地域は「生きる力」と関連させる形で中学校社会の地理的分野において、以下のように取り上げられている。「身近な地域における諸事象を取り上げ，観察や調査などの活動を行い，生徒が生活している土地に対する理解と関心を深めて地域の課題を見いだし，地域社会の形成に参画しその発展に努力しようとする態度を養うとともに，市町村規模の地域の調査を行う際の視点や方法，地理的なまとめ方や発表の方法の基礎を身に付けさせる」である（「第２　各分野の目標及び内容」の「（地理分野）の「２　内容」の「⑵日本の様々な地域」の「エ」。下線は筆者。以下同様）。その観点は、次期学習指導要領においてはより強められている。また、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協同の在り方と今後の推進方策」（平成 27 年 12 月 21 日中央教育審議会答申）においては、「新たに地域コミュニティを創り出すという視点に立って、学校と地域住民や保護者等が力を合わせて子供たちの学びや育ちを支援する地域基盤を再構築していくこと」（3 頁）、学校と地域の「連携・協働の必要性」という観点が全面に打ち出されている。制度としては「コミュニティ・スクール」の推進である。これらが、ただでさえ多忙を極める学校現場にどのような負担を押しつけることになるのか不安を禁じ得ないが、「地方創生」のひとつの焦点として学校が位置付き、そこでの児童・生徒の地域との関わりが強められる方向にあることは間違いない。

れらが推進された背景には、日本社会が歴史的に大きな転換点を越えた事実がある。政府も教育面でさえ、「人口減少」を意識し、「地域創生」を打ち出すしかなくなったとも言える。

本研究では、中学生を西興部村の「若き担い手」として、より積極的に位置づけたいと考えている。これからの「地域づくり」（筆者は拙稿においてそれを「冬囲い」という比喩で表現した[2]）を考える上で、中等教育段階（中学校・高等学校）の生徒は非常に重要な位置を占めていると考えているからである。とは言っても、「地方創生」の「手段」として生徒を利用しようという考えをもっているわけではない。ボランティア活動等に動員する人数を増やすための言い訳として、「担い手」という言葉遣いをしたいわけでもない。もう少し広い視野から、また大きく長期間に渡る日本の変化の中に、「若き担い手」を意味付けたいと考えている。現在、日本社会が直面している変化（「人口減少」）は、構造的で、（100年程度の）長期間にわたるものと予想されている。そのことが、これまでの学校や生徒という存在やその在り方も徹底的な再考を迫っていると考えているからである。

ところで、これまでの学校は、地域とは別の、国家によって一律に組織された閉鎖環境であった。前述したように、そこは変化が生じている。多忙を極める学校現場にさらなる無理を強いる形で、学校からの地域社会への「出前」（アウトリーチ）とでも言える実践を試みさせようとしている。しかし戦後の学校史をひもとき、地域と学校の関係という一歩引いた地点からみれば、現在の事態を「反転」と受け取ることも可能である。

戦後改革における教育行政の民主化の下で、学校は地域住民の生活や混乱も含めた時代と陸続きであった。幾つかの地域では、その名前を冠した独自の教育計画（「川口プラン」や「本郷プラン」が著名である）が作成されていた[3]。教育内容の点でも実生活と関係の深い「生活綴方」や「生活単元学習」が主導していた。しかし高度成長期以降に、学校が経済発展を担う人材養成の場、あるいは保護者や生徒にとっては社会的成功（「学歴」）を獲得するための競争の場となることで、閉鎖されていった。地域独自の教育計画も国家の教育計画に一元化された。教育内容の点でも、「生活綴方」が「作文教育」に、「生活単元学習」が「系統学習」に換わり、生活臭は脱臭された。地域は、実生活と共に学校から追い出されたのである。

すなわち先の「反転」とは、学校が地域と実生活と陸続きの関係であったところから、高度成長期以降に切り離され閉鎖されたが、それを現在に至って、再び陸続きにしようとしている。このように理解することができる。

同時に、この「反転」が学校における生徒の政治的な位置づけの転換と連動していることに注目することは、とても大事である。日本におけるシティズンシップ教育の第一人者

---

[2] これについては、拙稿「『地方消滅論』と小規模自治体の活性化のあり方を考える：西興部村の若き担い手の調査をとおして」（『北海道大学教職課程年報』、5、2015年。11～36頁）を参照していただけると幸いである。

[3] 木村元『学校の戦後史』（岩波書店、2015年。57～90頁）を参照。

である小玉重夫は、戦後改革期に教育の場において成立した「政治的子ども・青年把握」が、1950年代後半に「教育学的子ども・青年把握」へ転換したと主張している。小玉は、戦後改革期の「政治的子ども・青年把握」は、五十嵐顕の「『生徒たちの生活的視野に入ってくる社会情勢の変化』という、現実の政治的な変動の局面に子どもや青年をさらしていくことが、『教師の指導』として正当性をもち」えていたという主張に典型例が示されている、と主張する。現在当たり前のものと考えられている「教育学的子ども・青年把握」、すなわち保護される存在としての「子ども・青年」像は、高度成長期以降に成立した歴史的なものにすぎない[4]。そして周知のように、現在ここに大きな変更が加えられた。

それは、1969年10月の「高等学校における政治的教養と政治的活動について」という高校生の政治活動をほぼ全面的に制限し、また「学校の脱政治化」を決定づけた文部省初等中等教育局長通達が、18歳選挙権の成立・施行（2016年）に合わせて、2015年10月に文部科学省初等中等教育局長の「高等学校等における政治的教養の教育と高等学校等の生徒による政治的活動等について（通知）」に変更されたことである。2015年10月の通知では、「今後は、高等学校等の生徒が、国家・社会の形成に主体的に参加していくことがより一層期待される」と述べられるに至った[5]。

すなわち、「反転」という時代理解から全体を並べ直してみるなら、まず戦後改革期に「政治的子ども・青年把握」であったものが、高度成長期以降に「教育学的子ども・青年把握」（保護される存在としての「子ども・青年」像）に転換（「脱政治化」）され、再度「政治的子ども・青年把握」に転換（＝「反転」）、すなわち「再政治化」されたのである。

これらの教育制度と関わる現在の「反転」の意味を、さらに「子ども・青年」が育つ生活環境の質的変化と結びつけて理解することは、とても重要であると考える。

先に述べたように、これまで中学生は、学校と家庭という二つの閉じられた（守られた）環境を往復する「振り子」のような存在（「振り子」型）として理解されてきた。これは「教育学的子ども・青年把握」、すなわち「保護される存在としての『子ども・青年』像」と非常に良く符合している。ところが現在の「子ども・青年」研究は、この二つの環境にさらに新たな環境（「消費社会」）を加えなければならないと指摘する[6]。すなわち「子ども・青

---

[4] 小玉重夫『教育政治学を拓く　18歳選挙権の時代を見すえて』（勁草書房、2016年。3～25頁）参照。

[5] 先の学習指導要領の変化は、この「通知」の指摘と完全に軌を一にしている。「通知」では高校生について書かれている。しかし発想は、生徒の発達段階への考慮という留保はあったとしても、一貫している。

[6] 日本の「子ども・青年」（以下では、青少年）の生活における消費社会・消費文化の浸透力は、先進国でも群を抜く。これは家族も含めたコミュニティの弱体化と表裏一体である。そのため、青少年は社会への「構え」さえもその大部分を消費社会・消費文化を通じて形成する。このことが、消費へのアクセスの有利・不利への鋭い感覚を育てる。消費へのアクセスにおいて現存する地域格差は、生活している地域のランク付けにさえつながる。しかしながらこのランク付けは、高度成長期からバブル期にあったような東京を頂点とした直線的なものではない。日本中に普及した「郊外型の消費環境セット」（たとえば「イオン」、「カラオケ」、「ラウンドワン」等。この末端に「コンビニがある」がくる）を重視するものへと変化していると考えられる。この「郊外型の消費環境セット」は日本中に普及したために、これが標準の意味をもつ。そのため、それにアクセスできないことは不当であり、「疎外」されているという意識をもち、生活している地域を「劣っている」と考えることにつながっている。消費社会へのアクセスの地域格差が、ヒエ

年」は、学校、家庭そして消費社会の三つの環境を自由に行き来する存在（「トライアングル型)）として理解しなければならないというものだ。学校や家庭（地域コミュニティも含めて）が「子ども・青年」の精神に大きな影響を与えていないことは、子どもに関わる全ての人にとって、もはや周知の事実ではないだろうか。そして、学校の影響力が低下したからこそ、地域を動員することで補強するのが「反転」のねらいであろう。そして新たな環境（消費社会）は、「子ども・青年」の生活を強く規定し、彼ら／彼女らはその下で自己形成している。極端な言い方が許されるなら、影響力の点からみて、消費社会こそが「子ども・青年」を陶冶（とうや）していると言っても過言ではない。そして消費社会によって陶冶された子どもは、それ以外の社会に対しても「消費者」（強い言い方をするなら「お客様」）として関わることを身に付けている[7]。すなわち二つの生活環境に生きる時代（「振り子」型）の「保護される存在としての『子ども・青年』」像は、三つの生活環境に生きる時代（「トライアングル型」）の消費社会に陶冶される「子ども・青年」像へ、ある種の「消費者」に、なし崩し的に変化しつつある言うことができるだろう。

先の小玉の教育の「脱政治化」の議論に引きつけて表現するなら、「政治的子ども・青年把握」が、1950年代後半に（学校こそが陶冶する）「教育学的子ども・青年把握」へ転換し、近年の「ゆとり教育」（教育市場の規制緩和）の時代を経て、実質的には「消費者的（消費者としての）子ども・青年把握」になったとでも言うことができるだろう。「青年」は当たり前として「子ども」でさえも、お金さえあれば一人前の「消費者」として扱われる今日の日本の社会的風潮の下で、その影響を強く受け自己形成するのは当然であろう。

このような理解に立つなら、日本社会の転換点にあたって、すなわち「人口減少」と経済成長がもはや前提とならない時代において、閉鎖された環境という学校像と「保護される存在としての『子ども・青年』」像は、共に変革を迫られていると考えなければならない。従来の学校像や生徒像を微修正し、学校と地域との関係を学校の「出前」（アウトリーチ）することで改善を試みるような彌縫策では、早晩行き詰まることは明らかである。転換点を越えた先にあるはずの地域社会と学校の、地域住民と生徒の新たな関係の創出という枠組みで発想することが切実に求められている。中学３年生を「若き担い手」としてとらえる理由は、ここにある。

ところで、（中学生も含めた）生徒の社会参加の取り組みに注目する研究は、近年多くなってきた[8]。そのほとんどは、先進的な学校と地域の取り組みを紹介し、取り組みの核心を

ラルヒーにおいて特定の位置を占める意味をもってしまうことについて、また家族－学校－消費社会という青少年の成長／社会化過程を規制する「トライアングル型」の生活環境の問題性については、中西新太郎『「問題」としての青少年　現代日本の＜文化－社会＞構造』（大月書店、2012年）を参照した。「疎外」意識については、秋田県における県内地域ヒエラルヒーを描いた、豊島ミホ『底辺女子高生』（幻冬舎文庫、2006年）が参考になる。また「郊外型の消費環境セット」については、三浦展『ファスト風土化する日本郊外化とその病理』（洋泉社、2004年）年を参照した。「郊外型の消費環境セット」がないことへの「疎外」意識については、第３章の「村アイデンティティ」の分析において詳述する。

7 この点に関しては、内田樹の『下流志向〈学ばない子どもたち 働かない若者たち〉』（講談社文庫、2009年）が印象に残る説明の仕方をしている。

8 中学生の社会参加について書籍となったものは管見の限りではみつけられなかった。論文では次の三つ

他の学校改革・地域改革の模範（モデル）とするという考え方に導かれている[9]。

しかしながら筆者は、これらの研究とは異なるアプローチを採りたい。すなわち西興部村と学校との連携や児童・生徒の社会参加にある種の典型例を求め、それ分析することはしない[10]。逆に西興部村が他の市町村と大差ない点にこそ、本研究が採りたいアプローチの特徴はある。すなわち、これからの「冬囲い」を考える上での困難（「若き担い手」の萌芽がどこにあるか、あるいは「若き担い手」へのなり難さ）を深いところで理解するためにこそ、西興部村に学ぶ必要があると考えている。

学校における地域に関する学習についてもう少し補足をしたい。小学生の現行の学習指導要領では、「発達段階」を考慮して３・４年生の時に、身近な地域社会を知ることを通じて「地域社会の一員としての自覚」や「地域社会に対する誇りと愛情を育てる」ことを目標としている[11]。西興部村で作成されている社会科副読本も、ここに位置付いている[12]。その後５・６年生の時に、「我が国の歴史、政治及び国際理解」を学ぶことになっている。これが小学校社会科の目的である。すなわち、国家の認識こそが到達すべきもの（ゴール＝

を挙げておく。近江正隆「地域に貢献したい子どもが育つ「うらほろスタイル」」（『授業づくりネットワーク（地域づくりと授業）』所収。2016年、22、18～21頁）、宮前耕史の「現代「地域教育計画」としての「うらほろスタイルふるさとづくり計画」」（『へき地教育研究（北海道教育大学学校・地域教育研究支援センターへき地教育研究支援部門）』、2014年、69、61～71頁）、吉田達也の「中学生の社会参加を推進する栃木県壬生町の取組－学校と公民館・生涯学習センターとの連携に関する調査から考える－」（『宇都宮大学地域連携教育研究センター研究報告』、2014年、22、35～43頁）、である。

9 たとえば、宮下与兵衛編『地域を変える高校生たち 市民とのフォーラムからボランティア、まちづくりへ』（かもがわ出版、2014年）を挙げることができる。取り上げられた三つの高校のひとつは、北海道美瑛高等学校である。さらに北海道高等学校教育経営研究会編著『高校生を主権者に育てる　シティズンシップ教育を核とした主権者教育』（学事出版、2015年）では、「町と一体となったシティズンシップ教育の実践」として北海道浦河高等学校の事例が取り上げられている。このジャンルの研究は増加しつつある。

10 たとえば、西興部村に関する学習は、小学校３・４年時の社会科で地域社会を題材とした内容が取り扱われ、副読本も作成されている。しかし、これは道内の小規模自治体（町村）の小学校で普通に行われているものとさほど変わりはない。この点でも西興部村が典型例であるとは言えない。

11 「小学校学習指導要領　第２章　第２節　社会」の「第２　学年の目標及び内容」の「[第３学年及び第４学年]」の「１　目標」の(2)。

12 ５年生では３・４年生の地域社会を土台として「我が国の国土や産業」を理解することで、「国土の環境保全や自然災害の防止の重要性、我が国の産業の発展と社会の情報化の進展についての関心と国土に対する愛情」を育てることが記述されている。６年生では、それらを土台として「我が国の歴史、政治及び国際理解」を知ることで、「我が国の歴史や政治の働き、我が国と関係の深い国の生活や国際社会における我が国の役割について理解できるようにするとともに、我が国の歴史や伝統を大切にし国を愛する心情や、平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きていこうとする自覚を育てるようにする」（文部科学省、2008年、『小学校学習指導要領解説　社会編』、16・17頁）ことが記述されている。このように、地域社会を知るのは、「我が国」を知る前段として配置されている。児童に身近で、引きつけやすいからである。すなわち、同心円上に並んだ＜近－遠＞の関係として、地域－市町村－都道府県－日本国－世界が配置されている。このような「発達段階に応じ」た配置の結果として、地域は最も幼い時期に、全体の入り口として扱われるだけになってしまう。一番慣れ親しんだ地域社会は、日本国への「愛する心情」を育むための前提、あるいは手段の位置づけとなっている。小学校以降の教育課程では、中学校の地理的分野の「２　内容」、「（２）日本の様々な地域」、「エ　身近な地域の調査」に位置付くにすぎない。子どもにとっては分別もつかない頃に、「入り口的な意味」で地域にふれ、そして忘れる。このようなことから児童・生徒が地域のことを表面的にしか知らないのは無理もない。社会科はあくまでも、日本国の「国民」教育の目的のために構成されている。地域の「担い手」を育てることには関心がないのである。これからの地域の「若き担い手」を育てるためには、社会科に地域という軸を一本立てるという課題があると考えている。

目的）として強調され、地域社会は、小学生が身近な地域社会へもつ愛情を国家へつなぐ役割としての位置付けられているにすぎない[13]。「子ども・青年」が自分の立っている足もと、すなわち生まれ育つ地域を知ること、それ自身に固有の価値や重要性があるとは考えていないのである。関心がないと言っても良いかもしれない。そのため「子ども・青年」は、地域社会のことを小学生レベルでしか知ることはできない。一方で消費社会に陶冶されながら、他方で地域社会には陶冶されていない。そのため生まれ育つ地域社会は、消費社会の格差構造の中に位置付けて理解することになる。それも無理ないのである。しかしながら筆者は、西興部村をはじめとした小規模自治体における「冬囲い」の展開は、いずれ地域を知る深める教育の取り組みと固く結びついて進んでゆくだろうと考えている。

ここまで、中学３年生を「若き担い手」としてとらえることの現代的な意味について述べてきた。本報告書もこのような立場から、村の中学３年生を対象に、未来の取り組みの母体となるかもしれない苗床の「芽」を、より積極的に位置づけることで見出したいと考えている。「先進事例」に注目するのではなく、小規模自治体（西興部村）の小さな中学校の中学生の地域社会との関わり方と意識に、未来の「若き担い手」を見つけたいのである。

（２）「地域づくり」研究に「若き担い手」を積極的に位置づけることの意味

ところで本研究は、「西興部村の未来を考える」というもうひとつの面をもっている。これに近い問題意識をもった研究には、「地域づくり」研究と呼ばれる多くの研究がある。農山村研究の第一人者である小田切徳美は、地域を対象とした研究が 1980 年代後半に始められ現在まで続けられてきたことを、またこれらの研究では、「地域づくり」を掲げた研究だけでなく、それに類似するものとして「地域活性化」や「地域再生」を研究のキーワードとして掲げたものもあったことを指摘している。立ち位置の違う研究が混在しているのだ。そしてこの後者の二つのうち、「地域活性化」はこの期間（30 年間）の前半に位置し、「地域再生」は後半に位置している[14]。

小田切によると、「地域活性化」研究は、政府の政策（たとえば「リゾート開発」等の活性化政策）によって外部から地域に変革を迫るという構図を、その問題意識として共有するという特徴をもっていたという。他方で「地域再生」研究は、2000 年代中盤の小泉純一郎内閣による「聖域なき構造改革」やそれに類似する政策による「地域切り捨て」が進められた時代に重なる。「地方の疲弊」が進むに連れて「困難な局面からの地域振興」が求められ、「より強力な『地域づくり』が求められているという現実」から生まれたという。これに対して「地域づくり」研究は、「地域活性化」研究に対抗的な問題意識から始められた

---

13 小学校社会科以外で、西興部村に関わる取り組みを探すなら、中学校２年生の「インターンシップ」がそれにあたると考えられるだろう。しかしながら、これは「キャリア教育」（体験活動）に位置付くもので、村の置かれた状況や課題についての理解を深めるものではない。

14 小田切徳美『農山村は消滅しない』（岩波新書、2014 年。48～55 頁）を参照。

ことに注目し、「地域振興の『内発性』」、「総合性・多様性」、「革新性」が含まれていたことを指摘する。この三つは、「地域づくり」研究の発見であり、同時にさらなる研究の視角になった。本報告書で「地域」を考える視角とも共通している。

長くなったが、もう少し紹介を続けたい。「地域づくり」研究では、「自らの意志で地域住民が立ち上がるというプロセス」、すなわち「地域振興の『内発性』」に焦点がすえられたという。「地域づくり」の質としては、「単品型、画一的な地域活性化から、福祉や環境を含めた総合性、そして地域の実情を踏まえた多様性に富んだ地域づくりへの転換」、すなわち「総合性・多様性」が重視された。さらに「地域づくり」の方向性としては、「人口がより少ない状況を想定し、地域運営の仕組みを地域自らが再編し、新しいシステムを創造」すること、すなわち「革新性」が目指された。

前述したように本報告書は、ここで紹介した「地域づくり」研究と同じ視角をもっている。しかし、西興部村で展開された、あるいはされつつある「地域づくり」を扱うものではない。「地域づくり」実践やその関係者に注目するのではなく、それ以外の「一般人」（関係者や実践者を「特別な人」という言い方でくくることが許されるなら、それに対して「普通の人」という意味である）の日ごろの仕事も含めた生活と、地域へのコミットメント（関わり方と言っても良いのだが、もう少し多義的な意味を含んだ言葉である「コミットメント」を使用する）と地域への「アイデンティティ」に注目する。小田切の三つの研究の焦点に近づけた言い方をすると、「地域づくり」の苗床となる一般人の生活と意識の中の「内発性」、「総合性・多様性」、「革新性」に関心をもっていると言うことができる。

さらに、「地域づくり」研究における研究対象は実践や組織であっても、「大人」のそれが前提となっているが、「地域づくり」実践が未来への構想も含んだ時間性をもつものであるなら、その候補者である「後継ぎ」的な位置にある人々（「若者」）や「子ども」）も含むべきであると考えている。このような問題意識から、本研究では中学生も「若き担い手」の対象とした。

（３）中学生分析の焦点

中学生を将来の「若き担い手」として考えた場合、分析の焦点は三つあると考えている。

第１に、中学生は年少の生活者として、生活の中でどのように西興部村を「担っているか」である。もう少し広く考えておくと、地域コミットメント（「村コミットメント」）について分析する必要があるというものである。一般的な中学生研究には、地域間格差という観点がそもそもなく、具体的には都市に住む中学生を対象としている。人口 1000 人の村は、地域社会に密接な社会関係を展開し、家庭を介して、中学生に影響力を与えているのだろうか。

第２に、「地域アイデンティティ」である。前述したように中学生は、「家庭」－「学校」－「消費社会」という三つの生活環境の下で生活していると考えることができる（「トライ

アングル型」)。本研究の中学生の生活は、都市のそれと同じだろうか。村の具体的な姿はどのように意識されているのだろうか。村での生活の豊かさはどうか。そして消費への（都市とは異なる）アクセスは、中学生の意識にどのような影響をもたらすのであろうか。すなわち、地域の「良いところ」や「良くないところ」はどのように考えられ、それは一連の評価の構図（地図）として形作られているのだろうか。この構図の中に、「地域アイデンティティ」を位置付ける。

第３に、進路志向とその後の「将来イメージ」である。これは、西興部村の地理的条件や学区内の高校の構成・場所、さらには親族関係の居住、高校卒業後のさらなる進路動向とも関係している。北海道であれば、「人口減少」を背景とした高校統廃合政策とその帰結も影響してくる。この「将来イメージ」を形作る視野（パースペクティブ）は、中学生自身成績や友だち、周囲の大人（保護者や教員等)、さらには受験産業等の情報とのコミュニケーションによって構築されるが、この「将来イメージ」が再帰的に現在の生活の意味付けに影響を及ぼすものと考えられる。すなわち現在を土台に「将来イメージ」は構想されるが、この構想された「将来イメージ」は現在の生活に影響を及ぼすのである。この再帰的なサイクルに対する理解が重要である。そして、進路志向と「将来イメージ」は、「地域アイデンティティ」とどのように関係しているのか。これが明らかにされなければならない最も重要な点である。「地域アイデンティティ」が強いと地元の高校に進学するというような単純な関係は、あるのだろうか。それとも「村を離れるからこそ、村の美点に気がつく」、「村に残るからこそ、村の良くない点が意識されてしまう」という逆説的な関係はないのだろうか、具体的な関係性を見出す必要がある。

第１の焦点は、調査結果の分析において明らかにする。第２と第３の焦点については、少し遠回りになるが、もう少し研究史の補足と「地域アイデンティティ」や進路志向の背景となっている高校統廃合政策とその帰結について、補足してからとりかかりたい。

（４）「地域アイデンティティ」研究を中学生に拡張する

本研究で考察の対象とする「地域アイデンティティ」（西興部村を意識した場合は「村アイデンティティ」）とは、西興部村の中学３年生が村に対して抱いているイメージ・感情や態度の複合体のことであり、現実的な根拠と共に分析する方法をとる。このような方法をとった理由について説明しよう。

同じ中等教育の生徒でも、高校生に比べて中学生の「地域アイデンティティ」についての研究はすごく少ない[15]。この差は、これまでの日本における教育段階のもっていた意味の

---

[15] 中学生の「地域アイデンティティ」を考えるという問題意識は、第２次世界大戦後の一時期と 1960 年代にわずかにあった。中卒就職の時期、特に広域に移動したものとしては、「集団就職」の時代が知られている。しかしそれらを除くと研究の対象となっていない。この研究がある時代に限られたのは、日本社会における教育機会獲得と教育期間の延伸が急速であったこと、そのため地域格差が短い期間の露呈ですんだことによる。これからの日本社会において高校教育が全国一律に提供できなくなった時に、たとえば良

反映でもある。中学生にとっての学校生活は、高校に進学して継続される。しかし高校生は、学校生活の終点に高等教育等への進学、就職等という岐路が待っている。この人生の岐路と地域移動を結びつけて考える場合に、生徒の「地域アイデンティティ」に注目する必要性が生じた。そのため、「地域アイデンティティ」研究は高校生や大学生（若者）を対象としていた。しかし今日、あるいはこれからは違う。北海道においても同様に、これまで研究されてこなかった。しかし現在、あるいは今後は中学生の「地域アイデンティティ」は重要な研究対象になってゆく。その理由を以下で説明する。

前述したように、高校生の「地域アイデンティティ」についての研究は、人生において地域移動が集中する時期のひとつに高校卒業時が該当するために行われてきた。特に、都市と地方（かつては農村）との間の移動に関心が集まり、その背景や理由についての研究が蓄積されてきた。

たとえば、最近のものとして、石黒らの『青森県で生きる若者たち』[16]や、これと対になる『「東京」に出る若者たち――仕事・社会関係・地域間格差』[17]を挙げることができる。「青森県に住み続けること」を選んだ若者と「青森県から東京に出ること」を選んだ若者のそれぞれの理由や背景、あるいは「住み続ける」と「出る」の両者に行動を分かつものについての研究である。北海道を対象としたものには、梶井祥子らの『若者の「地域」志向とソーシャル・キャピタル』[18]を挙げることができるだろう。同書の帯紙には、研究の問題意識が端的に要約されている。「地元を離れるのか？　残るのか？　彼らの選択行為の背後にあるものは何か？」である。これらの研究は、2000 年代以降における若者の地域移動、端的には「地域に残る」、あるいは「離れる」を考察とした研究である。しかし、それ以前の同種の研究とは（研究の）前提が重要な点で異なっている。

それまでの研究が、若者が地方から都市に移動する（「東京へ行く」）ことに疑う余地がないこととして前提にされていたのだとすると、2000 年代の最初の 10 年代において特にその半ば以降は、地方から都市に移動することは十分疑う余地があることに変化した。もっと言うなら、地方から都市に出るという方向感がはっきり低下したという時代背景を背景にして行われている。この点が異なる。2010 年代に入ってからの研究の主要な潮流になってきたとまでは言い切れないが、無視できないものとなっている。

それは、日本社会が「生産年齢人口」（15～64 歳）という点からみても量的ピーク（1995 年）を越えただけではなく、全人口という点からみてもピーク（2008 年）を越えてしまい、とうとう「人口減少」が始まったことを背景にしている。もちろん、経済も「右肩上がり

好な学校経験を求めて高校進学時に地域を離れるしかない生徒が多くなった場合（地域に残された生徒は、もはや学校としては呼べない場所で「遠隔教育」を受けることになるかもしれない）、再度研究のテーマに浮上すると考えられる。

16 李永俊・石黒格『青森県で生きる若者たち』（2008 年、弘前大学出版会）を参照。

17 石黒格・李永俊・杉浦裕晃・山口恵子『「東京」に出る若者たち――仕事・社会関係・地域間格差』（ミネルヴァ書房、2012 年）を参照。

18 梶井祥子編著『若者の「地域」思考とソーシャル・キャピタル　[道内高校生 1,755 人の意識調査から]』（中西出版、2016 年）を参照。

の成長」から遠ざかって、既に四半世紀を数えている。その結果、高校生の人生の延長に位置する若者において、もはや都市に出ないで「地方で暮らす」ことのリアリティ（真実性）を追求する研究も増えてきている[19]。若者と都市への移動を疑問の余地なく直結させる議論は、難しくなっているのだ。

しかし、このような時代理解に基づいた研究でさえも、中学生を対象とするわけではない。当然とも言える理由が二つある。ひとつは必要性がない（あるいは低い）からである。もうひとつは、中学生が将来を見据えて「地方で暮らす」という人生の判断を行うには、幼すぎるし（「もっと勉強、人生経験してから考えるべき」）、あまりにも消極的だ（「夢がない」）とする一般的な考え方が、まだまだ強固だからである。中学生が「保護される存在」であることが自明視されているのである。しかし現在の北海道においては、少なくとも前者（「必要がない」）は自明視できない。北海道で一般化しつつある固有の事情から、この理由が当てはまらないことを説明しよう。

中学校から高校の進学時に、中学生が居住地を変更する（実家から通えない高校に進学する）する可能性は、他の都府県では高校のない離島等を除いて「ない」、あるいは「低い」。しかし北海道には、道外とは異なる事情がある[20]。そして近年、中学生数の激減を背景とする高校統廃合政策によって、この事情は厳しさを増しつつある[21]。

ところで、北海道における高校統廃合は2000年6月の「公立高等学校配置の基本指針と見通し」（北海道教育委員会）の策定後に開始された[22]。本格的な着手は、2006年8月「新たな高校教育に関する指針」（北海道教育委員会）の策定による。そしてそれ以降、毎年度公表される「公立高等学校配置計画」に沿って実施された[23]。2006年3月の4校閉校を皮切りに、9年で道立高校が34校、市町村立高校が6校、私立高校3校の合計43校（全日制高校のみ）が閉校となった[24]。

そして、この高校統廃合の実施は、「平成の大合併」（2004～2009年）と合併によって吸収されたかつての町村のその後の疲弊（人口減少と生徒数減少）に重なっている。「平成の大合併」によって、北海道の212市町村（34市154町24村）は、179市町村（35市129町15村）に再編された。「大合併」以前には、「ゼロ地域」（高校のない地方自治体）は、45町村（21.2%。29町16村）であった。しかし「大合併」以降、2015年度までに「ゼロ

---

19 阿部真大『地方にこもる若者たち　都市と田舎の間に出現した新しい社会』（朝日新書、2103年）と轡田龍蔵『地方暮らしの幸福と若者』（勁草書房、2017年）を参照。

20 例外的に離島の中学生・高校生の島を「出る／出ない」の判断について対象とした研究はある。小林平造・山本清洋・舞田敏彦「高校生の学校生活と進路志望に関する調査――鹿児島の都市と離島の学校」（『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』、10、2000年。133-152頁）を参照。

21 北海道の中学校卒業者は1988年3月卒がピークで、約9万人であった。2015年3月の卒業者はその5割を切っている。高校数を機械的に減らすなら、半分で良いことになる。凄まじい減少である。これが学校統廃合の原因のひとつである。

22 http://www.asahi-net.or.jp/~sf4m-ari/kihonmitousi.pdf（2017年8月30日閲覧）

23 http://www.dokyoi.pref.hokkaido.lg.jp/hk/akd/grp/soan.pdf（2017年8月30日閲覧）

24 筆者の学会発表（「北海道における『地域キャンパス校』の現状と課題」。北海道教育学会第60回研究発表大会。2016年3月6日、北海道教育大学札幌校で実施）での分析結果の数字を借りるために、2015年度時点の数字をとっている。

地域」は、54 市町村（30.2%。2 市 39 町 13 村）に拡大した。ひとつの市町村でひとつの高校をもつ「ワン地域」（高校がひとつの地方自治体）は 89 市町村（49.7%。7 市 80 町 2 村）であり、二つ以上の高校をもっているのは 36 市町（20.1%。26 市 10 町）である。「平成の大合併」が、合併によって吸収されたかつての町村を著しく衰退させたことは、もはや常識となっている[25]。北海道においてそれは、教育面で「高校がなくなること」として現れた。

「ゼロ地域」の高校数はもちろん 0 校、「ワン地域」の高校数は 89 校である。これは北海道の全日制高校数 276 校の 32.2%にすぎない。残りの 67.8%は 36 市町に集中する。すなわち、北海道 179 市町村の 3 割を占める市町村には高校がない。5 割を占める市町村には、高校が 1 校のみある。ここに北海道の高校の約三分の一がある。そして 2 割を占める市町に高校の約三分の二が集中する。北海道では既に、高校の「選択と集中」（という言葉の地方高校の切り捨て）がかなりの程度進んでいる[26]。

このため北海道では、中学生から高校へ進学する時点でそれまで住んでいた地方自治体を離れる場合も多い。そして近年、それが強まっている。中学生の生活する市町村にもともと高校が存在しない場合（「ゼロ地域」）や、高校がなくなる（「ゼロ地域」化する）ことによって遠方の高校に通学を余儀なくされる場合は確実に増えた。そして、高校卒業後の進学（高校卒業後の高等教育機関等へのアクセス）を見通すことで、地域間の教育格差は一層際立つ。少なくない中学生に、中学卒業時点で生活していた故郷を離れるしかないという選択は強要されている[27]。確かに、（バス通学の時間が高校生活の質の低下を生みだすという事実を別にしても）遠距離通学でなんとかなる場合もある。しかし、親戚の家に寄宿する場合や、寮や下宿の場合だけではなく、子どもの進学を機に家族がそれまで住んでいた市町村を離れる場合さえ生じている[28]。

北海道においては中学校から高校への進学の時期は、地方において「地元を離れる」こと、あるいは少なくともそれを意識せざるを得ない時期にあたる。「地域アイデンティティ」研究の対象となり得るのである。

そしてご存じのように西興部村には高校がない。「ゼロ地域」である。そのため、中学3年生の進路選択は、高校卒業後の進学（高校卒業後の高等教育機関等へのアクセス）を見通さなければならず、ひいてはどこに住むのかの選択（地域移動）の意味さえも不可避にもってしまう。

---

25 今井照『「平成大合併」の政治学』（公人社、2008 年）と青木康容・田村雅夫編『闘う地域社会　平成の大合併と小規模自治体』（ナカニシヤ出版、2010 年）を参照。また、西興部村が合併に抗して独自路線を選んだことにも現れているが、北海道では合併があまり進まなかったことに、教育問題（学校の統廃合）も関わっている可能性がある。統廃合が進んだ地域と進まなかった地域の差が現れたのではないか。

26 「選択と集中」は、現在の日本国中央政府の進める「地方創生」のキャッチフレーズである。これが切り捨ての別名であることは、明らかである。

27 拙稿「大学進学にみる地域格差――北海道を事例に」（『教育学の研究と実践』（北海道教育学会）、9、2014 年。25～34 頁）を参照いただけるとありがたい。

28 残念ながら、この数字について公表されたデータはない。

ところで、本研究では西興部村を対象としたことによって「ゼロ地域」の中学生の「地域アイデンティティ」研究を行うことになるが、「ゼロ地域」の事例であることから派生する事情も研究に制約を加える。すなわち、比較可能な他の研究が求めがたいのである。この比較ができないという点は、特に数字の評価において、事の大小の評価が不適切になってしまう可能性にもつながる。さらに別の不適切さの可能性、すなわち地域的な背景にもある程度の共通性がないと中学生の評価の差ではなく、地域の特徴が過剰な一般性として強調されてしまう可能性もある。前者の「ゼロ地域」の比較は求めがたいが、後者の「地域的な背景の共通性」については、筆者自身の他の調査研究（興部中学校の中学３年生に対して行った調査）の結果に比較を求めることでカバーする。しかしながら、解釈が独善的であるとの誹りを受ける場合もあるかと思うが、このような事情ゆえのことだとご勘弁いただきたい。

さらに「地域アイデンティティ」を考えるといっても、高校生の研究のように地域を「出る／出ない」に焦点を当てた鋭角的なものというよりも、中学生が生活する場所（地域）にどのようなイメージや感情、態度をもっているのかについて、より広い意味で考えることにしたいと考えている。このような意味で、地域へ肩入れ（コミットメント）する気持ちも付加した「アイデンティティ」の元々の意味に、さらに根拠となるより中立的な意味合いの強い「イメージや感情、態度」も加えて理解する。このような広い意味で、ここでの検討の対象を中学生の「地域アイデンティティ」、西興部村に則して中学３年生の「村アイデンティティ」と表現しておきたい。

そして西興部中学校の二つの年度（2013 年度と 2015 年度）の中学３年生の調査結果と、筆者が興部町で 2016 年度に行った中学３年生調査（同じ問題意識に基づいたもの）の結果を活用することで、「村アイデンティティ」について考察する。最後に西興部村の中学校を卒業した元中学３年生たち（OB・OG）の追跡調査の一部から卒業後の変化を付け加える。

繰り返しになるが、筆者が比較を相対的な差を強調しすぎる形で（もっと多くの研究がなされれば大きな差ではないとみなされるようなものが、少ない研究であるために大げさに扱われる）分析している可能性は潜在的にある。その点は、お読みいただいて批判をいただきたいと思う。また、比較の結果はどちらかの年度の中学３年生が「良い」生徒かといった優劣をつけるための比較ではないことも言うまでもない。あくまで相対的な差であり、考えなければならないのは評価の理由である。

２．お話しをうかがった中学３年生の特徴と「村コミットメント」

この章から二つの年度の中学３年生の調査結果の分析に入って行く。2013 年度の中学３年生と 2015 年度の中学３年生である。この二つの学年は、ほとんどの中学生からお話しをうかがった。またこれ以降では煩雑さを避け、西興部村を単に村と記述することにする。

まず、中学３年生の基本的な特徴を確認する。そのために家族（類型）について、保護者の就業（類型）について、保護者が中学生にどのような人格期待をもっているのか、を明らかにする。その際、ざっくりとした区別で説明したい。調査報告という点で言えば詳細さに欠けるが、二つの年度の中学３年生のどこまでに大きな差がなく、どこから違いが生じるのかを明らかにするためには、それで十分である。

ところで、2013 年度の中学３年生は 10 人であった。そのうち男子が８人で女子が２人であった。女子が少ないという特徴がある。他方で 2015 年度の中学３年生は 12 人であった。しかし、このうち１人が調査時点で欠席であったため 11 人が調査の対象となった。男子が５人で女子が６人であった。

（１）中学３年生と家族

図表１は、二つの年度の中学３年生の所属する家族について、家族類型の観点からまとめたものである。

図表１　家族類型の比較

[2013年度]

家族類型	度数(人)	内訳(%)
三世代同居家族	1	10
核家族	7	70
父子・母子家族	1	10
その他家族	1	10
計	10	100

[2015年度]

家族類型	度数(人)	内訳(%)
三世代同居家族	2	18
核家族	7	64
父子・母子家族	1	9
その他家族	1	9
計	11	100

家族類型は、「三世代同居家族」、「核家族」、「父子・母子家族」、「その他家族」の四つに区別した。三世代同居は世代のみに注目し、祖父祖母のどちらかひとりの場合もここに分類している。核家族は両親と子どものみの家族類型である。

2013 年度の中学３年生は、それぞれが１人、７人、１人、１人であった。すなわち、「核家族」が中心である。一般的に農村地域であると「三世代同居家族」が多いと思われる。しかし村の少なくともこの年度の中学３年生の場合は、後に説明するように就業も農村的な色彩は薄い。それと対応した形で「核家族」が多くなったと考えられる。

2015 年度の中学３年生は、それぞれが２人、７人、１人、１人であった。このように 2013

年度とさほど変わらない。すなわち、家族類型の点で二つの年度には差がない。

さらに保護者の就業について比較してみる。まず、前提となるのは共稼ぎが一般化していることである。近年の労働力不足は村にも及んでいるため、母親も多様な形で就業していた。ここでは保護者の中で主要な稼ぎ手の就業のみを分類することにした。

注目したのは、村の就業構造との関係である。すなわち、「第一次産業」（酪農、林業）関係の職場と「福祉」関係の職場を大別する。細かい区別としては、自営業と雇用者の区別を補足的に加えた。

その結果、保護者の就業を「酪農家」（自営業と考えた）とそれに関わる「酪農関連職業」（酪農関連の職業、雇用者）、「林業関係職業」（自営業の場合もあるが、ここでは雇用者）、商店などの経営を含めた「地場的自営」、「福祉関係職業」そして「その他職業」（共に雇用者）に区別した。それが図表２である。「その他職業」は雑多な構成であるため補足する。

図表２　保護者の就業類型の比較

[2013年度]

就業類型	度数(人)	内訳(%)
酪農家	1	10
酪農関連職業	1	10
林業関係職業	0	0
地場的自営	1	10
福祉関係職業	5	50
その他職業	2	20
計	10	100

[2015年度]

就業類型	度数(人)	内訳(%)
酪農家	0	0
酪農関連職業	2	18
林業関係職業	2	18
地場的自営	1	9
福祉関係職業	1	9
その他職業	5	45
計	11	100

2013 年度の中学３年生の場合、「酪農家」、「酪農関連職業」、「林業関係職業」、「地場的自営」、「福祉関係職業」、「その他職業」がそれぞれ、１人、１人、０人、１人、５人、２人となった。「福祉関係職業」を保護者にもつ中学３年生が５割を占めている。ここに集中している。そして、「酪農家」と「酪農関連職業」が２割、「その他職業」が２割という結果となった。ところで、「その他職業」は建設関連と役場がここに加わっている。両者は村という存在や場所と結びついた職業であると考えられる。

他方で、2015 年度の中学３年生の場合、「酪農家」、「酪農関連職業」、「林業関係職業」、「地場的自営」、「福祉関係職業」、「その他職業」がそれぞれ、０人、２人、２人、１人、１人、５人となった。「その他職業」が４割を超えて最多となっている。また、「酪農関連職業」と「林業関係職業」を合わせて４割弱であり、ここにも特徴がある。2013 年度の中学３年生の保護者との対比で言えば、「福祉関係職業」が著しく少ない点も指摘できる。ところで、「その他職業」は、教員、医師、郵便局と役場の職員、建設関連の職業となる。

概括的に言うなら、2013 年度の中学３年生の保護者の構成に、広域での職業移動が見通せる職業類型が加わっていると考えることもできる。この「その他職業」の差は、中学３年生が所属する家族が村に居住する見通しの差につながるし、その家族自体の村社会にお

ける見え方の違いにもつながる。この両面に影響すると思われる。

前者（居住する見通しの差）は、村の雇用確保政策と結びついて創出された「福祉関係職業」の場合、職業資格を前提にした雇用であるから労働移動の可能性は否定できないが、自発的な移動に限定される。そのため、居住する見通しが短期間であるということは少ないと推理する。それに比較すると「郵便局」、「教員」、「医者」（微妙な点はあると考えるが）の場合は、在村する見通しが短期間であると推理できる。いわば、「転勤族」である。そのため、転勤続の保護者をもつ中学３年生は転居の経験も多くなり、同じ場所に居続けるとはあまり思っていないだろう。

後者（家族の村社会における見え方の違い）は、「福祉関係職業」の場合、施設内で労働し、また夜勤も伴うため村社会に「見えにくい」と考えられる。対比的に「郵便局」、「教員」、「医者」は対人的な職業でもある。そのため、「見えやすい」と考えられる。当然、中学３年生にとっても、保護者の職業ゆえに自分が村社会で「見られている」ことを意識しているだろう。

対比的に整理してみよう。2013 年度の中学３年生の保護者は、「福祉関係職業」が多い点に特徴がある。2015 年度の中学３年生の保護者は、第一次産業関連の職業と、「転勤族」、「見える職業」が相対的に多い。中学生の数が少ないため、この二つの年度でさえも、かなり異なる構成となっている。

続いて、中学３年生が保護者からどのような人格期待をされていると思っているのかを検討する。図表３は 2013 年度の中学３年生が保護者から、「どのような人になって欲しい」と言われている（と思っている）のかをまとめたものである。

図表３　保護者の人格期待（2013 年度中学３年生）

人格期待の内容(「あり」は7人、「なし」は3人)
・あんまりそんな話もしないです。まあ犯罪とかを犯すなよくらいは。
・優しい人になってほしい。あと、ちゃんと就職してほしいって。
・ちゃんと普通に過ごせるくらいには働けって。
・ちゃんと大学行って就職しろって。他は特に(言われない)。
・やっぱりしっかり働いて、礼儀とかしっかりした子になってほしいってよくいわれます。
・普通の生活できるぐらい働け。
・常識ある人。

注意しておきたいことが２点ある。まず、ここに挙げていることは、保護者が中学３年生に実際に言っているとは限らないということである。中学３年生が「言われていると思っている」ことである。次に、「どのような人になって欲しいか」を、筆者は「人格期待」として理解していた。しかし、少なくとも 2013 年度の中学３年生の理解は、それとはズレていると思われる。「どのような人になって欲しい」かは、具体的な特定の「人間性」や「人柄」（人格）への期待という意味ではあるのだが、2013 年度の中学３年生は保護者からの具体的な要望（「自立」）であると受け取っている。

図表の上段には、人格期待が「ある」、「なし」の実数を掲げた。その下段からは具体的な期待の内容、インタビュー結果をほぼそのまま載せたものである。「ほぼそのまま」と書いたのは、中学３年生が言いよどんだり、間が空いたり、話が飛んだりした場合に、多少の編集が加わっているからである。その際、意味の改変は行っていない。

人格期待「あり」が７人、「なし」が３人で、「あり」の方が多い。そして内容としては、「ちゃんと」がキーワードになっていると考えられる。たとえば、「ちゃんと」、「就職」、「普通に…働け」、「大学に行って就職しろ」である。他の場合もこれに類似したニュアンスが感じられる。「やっぱり…働いて」、「普通の生活…働け」である。一般的な意味で人格への期待と考えられるのは、「優しい」、「礼儀とかしっかりした」、「常識ある」の３人がそれにあたるだろう。2013 年度の中学３年生は、保護者に「ちゃんと」「〇〇しなさい」と「自立」を要望（要求）されていると思っているのである。

2015 年度の中学３年生の場合はどうだろうか。それをまとめたのが図表４である。

図表４　保護者の人格期待（2015 年度中学３年生）

人格期待の内容(「あり」は5人。「なし」は6人)
・他の人にやさしく、やさしい人になってほしいみたいな。なんとなく言われる。
・暴力を振るわない。
・他の人につくせるような人間になれって言われます。手伝ってあげたりとか、人助けしなさいと。
・自分がつまらないと思う生き方をするのはやめなさいと言われました。自分が楽しいと思えることを全力で出来ると思うことを全力でやりなさい、みたいな。
・一人で稼げる人間。

人格期待「あり」が５人、「なし」が６人で、「あり」の方が少ない。そして内容としては、2013 年度の中学３年生の場合のような、「ちやんと」「〇〇しなさい」的なものは少ない。「一人で稼げる人間」の１人が、それにあたるかもしれない。それ以外は、「やさしく」、「暴力を振るわない」、「他の人につくせるような人間」、「自分が楽しいと思えることを全力で」となっている。人格を期待されていると思っているのである。

すなわち、数的には二つの年度で大きな差はないと言って良い。しかし、2013 年度の中学３年生の多くの保護者は、「普通に」生きること（自立）を要望されていると考えているのに対して、2015 年度の中学３年生は、保護者からそのようなことは言われて「ない」と感じ、「ある」と思う場合は価値的な（励ましも含めた）期待（人格期待）が込められた言葉を聴いている（伝えられている）と思っていることが分かる。

（２）中学３年生の学校生活

中学３年生はどのような学校生活を送っているのだろうか。中学３年生の学校生活の一部を、学校生活のどこに「注力」（力を入れて生活したのか）したのかの観点から比較してみたい。

まず、学校生活での注力を領域（「勉強」、「部活」、「友人関係」、「趣味」の４領域）に区別して聞いた。次に、両方にまたがる答え方を中学３年生がした場合には「勉強と友人関係」をそのまま載せた。この二つの基準で回答を分類した。

また、調査が行われたのが９月であったため、部活は既に引退していた。そのために、「部活」を選択した者はいなかった。そのため回答は、「勉強」中心、「友人関係」中心、「勉強と友人関係」、そして「なし」等（「わからない」「N.A.」）の四つになった。「N.A.」はノーアンサー、答が無かった場合に付ける略号である。「なし」は、学校生活において中心におくようなものはないという中学３年生である。「わからない」や「N.A.」はこの質問に答が返ってこなかった場合である。これを「なし」等に入れた。図表５が二つの学年をまとめたものである。

図表５　学校生活類型の比較

[2013年度]

		勉強	友人関係	勉強と友人関係	なし、わからない、N.A.	計
男子	度数(人)	1	6	1	0	8
	内訳(%)	13	75	13	0	100
女子	度数(人)	1	1	0	0	2
	内訳(%)	50	50	0	0	100
計	度数(人)	2	7	1	0	10
	内訳(%)	20	70	10	0	100

[2015年度]

		勉強	友人関係	勉強と友人関係	なし、わからない、N.A.	計
男子	度数(人)	1	1	0	3	5
	内訳(%)	20	20	0	60	100
女子	度数(人)	1	3	2	0	6
	内訳(%)	17	50	33	0	100
計	度数(人)	2	4	2	3	11
	内訳(%)	18	36	18	27	100

2013 年度の中学３年生は、「勉強」、「友人関係」、「勉強と友人関係」、「なし」等が、それぞれ２人、７人、１人、０人となった。「友人関係」が、学校生活の中心にある。３年生の９月時点においては、少々勉強が少ないと言えそうだ。「勉強」に「勉強と友人関係」を加えても 3 人にすぎない。また数が少ないので何とも言えないが、男子において「友人関係」が多いかもしれない。2015 年度の中学３年生との比較で言えば、「なし」等が無い。

他方で 2015 年度の中学３年生は、「勉強」、「友人関係」、「勉強と友人関係」、「なし」等が、それぞれ２人、４人、２人、３人となった。2013 年度の中学３年生と同様に「友人関係」が学校生活の中心であるとは言えそうだが、数字は異なる。約半分に止まる。また、「なし」等の多さが気にかかる。これは男子に集中している。最後に、「勉強」に「勉強と友人関係」を加えても４人であり、勉強体制に本格的に移行してはいない点で 2013 年度の中学３年生

と同様である。

すなわち、2013 年度の中学３年生は「友人関係」中心に中学校生活を送っていたと言えそうだ。その対比で言えば、2015 年度の中学３年生は、「友人関係」中心に中学校生活を送っていたとは言えない。分散しているとも言えるのだが、男子には「なし」等が多く、性別でかなり学校生活の充実の在り方が異なっていたのではないかとも推測できる。

村の中学３年生の学校生活のイメージが思い浮かべることができるような質問として、「中学校時代にやりきったこととやり残したこと」を聴いた。図表６がそれである。

図表６　中学校時代にやりきったこととやり残したこと（2015 年度）

所属部活動	性別	やりきったこと	やりきったこととの関連	やり残したこと
野球部	男子	部活	なし	人間関係
	男子	部活	なし	なし
卓球部	男子	部活	なし	なし
	男子	部活。行事、人間関係、社会貢献	なし	人間関係
	女子	部活	反転	勉強
吹奏楽部	女子	部活	反転	ソロバン
	女子	部活。運動会。修学旅行が楽しかった	反転	勉強
	女子	そろばん	なし	その他
非該当	男子	N.A.	―	N.A.
	女子	そろばん	微妙	世評の改善
	女子	運動会	なし	科学甲子園

[やりきったことの感想]感想のないものとN.A.は省略した。

・すごく達成感があるのはやっぱ野球部のキャプテンやって、ほんと最後までやれてよかったかなと思います。
・部長をしたこと。できるようになるのが嬉しかった　最後までやった達成感。
・行事や練習は精一杯やりましたし、人間関係や社会に貢献したことも頑張りました。
・全道は行った。オホーツク管内で優勝した。全道は勝てるわけがない。(パートナーが)怪我してるのもあったし。でも楽しかった。
・辞めたいときもあったが、最後から2番目の演奏会でまだ続けたいと思った。
・運動会の組体操をがんばった。修学旅行が楽しかった。部活で一年生の時大変過ぎてやめたくなったけどやりきった。部活やってて普通だったらできないような体験ができて良かった。
・そろばんずっとやってた、やりきった。もうやめると思うけど、部活見て、いいのなかったらまだ続けたいって思うかもしれない。
・そろばん。支部の大会ですが、去年中学生の部で優勝できたので。他の子が部活動やりながらで私だけ成績残せなかったらと思うと不安だったんですけど、ちゃんと自分が満足できる成績を残せたので。

[やり残したこと]なしとN.A.は省略した。

・同学年の人と、まだ女子とかだったら少し壁あるような感じするんで、そこもうちょい打ち解けられたらなーと。普通に話すとかもまあできるっちゃできるんですけど。○○(人名省略)とかは保育所のころからたぶん一緒にいるんで、話しやすいんじゃないかなと思うんですけど。○○(人名省略)なんかは普通にみんなとめっちゃ話してて。転校をしていたので、ずっと幼馴染じゃないということが感じられる。
・やり残したことは、もうちょっと勉強したほうがよかったって。なんか1年の時、いや2年の時とかもうちょい勉強しておけばよかったなって。なんか、もうちょい勉強してたら頭よくなったのかなって。
・恋愛関係とか。
・そろばん
・もっとまじめに勉強しておけばよかった
・○○(人名省略)くんに女装をさせたかった。
・西興部の子って人数も多いし結束力も強いから、上興部の子が上手くいかなかったりすると「これだから上興部の子は」なんて聞こえてくることもあって。私にはなかったし気にしないからいいけど、そういうの関係ないんだよっていうノリを作っていければ良かったかなと思います。大人がやる分には地域の伝統とかもあるしいいかなって思うんですけど、中学生になってまで本人に引きずってもらうのは嫌だから。
・科学甲子園の全道大会で負けたこと

ただし、これは2015年度の中学３年生のみのものである。学校生活のイメージを深めると共に、先程の2015年度の中学３年生の場合の「なし」等についてもう少し考えてみよう。

まず、「やりきったこと」を検討する。それは部活が多い。そのため、図表には所属部活動も書き入れておいた。野球部、卓球部、吹奏楽部である。そこに加える形で、「行事」、「人間関係」、そして「社会貢献」がある。所属部活動「なし」の場合には、「そろばん教室」と行事が挙げられている。「N.A.」も１人いる。

次に、「やりきったこと」の感想を検討する。全体として、強い達成感があったことがうかがえる。部活での役職体験、試合での勝利等である。学校を統廃合するときの根拠として、人数が少ないために部活等の経験をもつことができないことが指摘されることが多い。しかし、他学年も含めた少人数の部活であっても、少ないからこそ役職経験も不可避となり、それを立派に勤めきることが充実をもたらしていることが分かる。正に「やりきった」と言うのに相応しい経験をもっている。このような充実の体験は生徒数の問題ではなく、先生方の努力の賜物でもあるだろう。そして、それは「そろばん教室」についても同様である。村の「そろばん教室」が全道に名だたる「強豪」であることは知られているが、それに相応しい達成感である。

ところで、「やり残したこと」はどうなっているのだろうか。これは、分散していると言って良い。また、「やりきった」という充実があったとしても、「やり残したこと」はあるということだろう。また、「やりきったこと」と「やり残したこと」の関係は、二つのパターンになっていると考えられる。それは「反転」と「なし」とまとめることができる。たとえば、部活は「やりきった」、しかし勉強は「やり残した」というような関係性で捉えている場合に、「反転」と名付けた。「犠牲となった」とまでは言えないが、それに近いのではないか。この意味付けがない場合は「なし」、判別つかない場合は「微妙」とした。「なし」の方が多い。

「やり残したこと」は、「人間関係」が２人、「勉強」が２人、「なし」が２人、「ソロバン」１人、「科学甲子園」１人、「世評の改善」１人（これは内容を、筆者が要約したもの）、「その他」１人、「N.A.」１人である。分散している。「人間関係」が２人いるが、ここには学年の生徒数が12人（ひとりは調査できていない）であることからくる人間関係の濃密さが、逆に重荷になっているということは見受けられない。逆に、もっと「仲よくなりたかった」的な意味であろう。そして「世評の改善」とまとめたものは、中学３年生が感じた村の中の二つの地域の「伝統」が生徒集団の中にも亀裂を生んでいたことを自分なりに解消することができなかったという意味で、「やり残したこと」に挙げている。

すなわち、2015年度の中学３年生の学校生活類型で不安であると指摘していた男子の「なし」等とは、部活を「やりきった」が、それを別のものに（調査時点が９月であるならば、勉強に）反転できずに学校生活に生じた「空隙」を意味していたものではないかと考えられる。女子の一部が「やりきった」との関係で「反転」して、勉強に打ち込もうとしていたのと対比的である。

（３）中学３年生の「家族以外の村の人との会話」

研究の課題の柱のひとつに中学３年生の地域へのコミットメントがどうなっているのかを明らかにすることがあった。それを「家族以外の村の人との会話」があるかどうか、そしてより具体的に「どのような関係の方」と「どのような話をするのか」を聞いたものをまとめた。図表７は2013年度の中学３年生の結果をまとめたものである。

図表７　2013年度中学３年生の「家族以外の村の人との会話」

	家族以外の村の人との会話	
	度数(人)	内訳(%)
ある	4	40
なし	6	60
計	10	100

※　部活を引退してから村のクラブに入会している生徒が3名いる。そのうち2名が話をすると回答していた。

「ある」4人の具体的な内容
・この村もお年寄りが多いので、お父さんの職業柄農家の人が多いので、自分のこと知ってもらったりだとか人がいるんで、そういう人とは話したりはしますね。
・家の横の人とか、近所の人とか、その友達の親とかと話します。こんにちは一とか。あいさつします。
・友達の親とか先生とか。
・水曜日にいつもミニバレーに行っている。そこで会う人と(話をする)。

「村コミットメント」は、もっと（深いものから浅いものまで）多段階に渡るものであると考えて話を聞いた。しかし、もっとも軽度な関わりと考えられる「家族以外の村の人との会話」においても、部分的なものに止まっていた。図表にあるように、「ある」は４人しかいない。しかもこのうちの１人は学校関係（友達の親や教員）を答えており、実質３人である。さらにこの残りの３人のうち、学校の部活引退後に入会した「クラブ」での村人との関わりを挙げたのが１人（「ある」に直接的な記述はないが、もうひとり同じ「クラブ」に参加していた)、保護者の職業つながりで見知っている人と話をする中学３年生が１人、一般的な意味で「近所の人」が挙がっているが１人である。すなわち、2013年度の中学３年生は村社会への関わりが乏しいことが分かる。これには保護者の職業に夜勤も伴うであろう福祉関係職業が多かったことと関わっている可能性がある。

ところで2015年度の中学３年生の場合はどうなっているのだろうか。それを同様の形でまとめたのが次頁の図表８である。

「家族以外の村の人との会話」で、「ある」が８人となった。2013年度の中学３年生のおよそ２倍である。年度の差は大きいと言って良い。「ある」の内容をみると、「近所の人」を４人挙げている。これも2013年度の中学３年生よりも多い。中学３年生であるから、それほど深い話をするわけではないだろう。たとえば「世間話」と挙げた２人のように、で

ある。しかしながら、さりげない中での関係性はうかがえる。たとえば、「そこらへん（を）歩いて（い）ても話しかけられたり」（括弧内は筆者が補った）、がそれにあたるだろう。

図表８　2015 年度中学３年生の「家族以外の村の人との会話」

	家族以外の村の人との会話	
	度数(人)	内訳(%)
ある	8	73
なし	3	27
計	11	100

※ 村でそろばんクラブや習い事に入会している生徒が4名いる。そのうち4名が話をすると回答していた。

「ある」8人の具体的な内容
・近所の人とか、高齢の人とか。
・そろばんの先生。近所の人とかはしゃべんない。たまにすれちがったら、あいさつするくらい。
・(かなり考えてから)近所の人とか。精々が世間話ですけど。
・近所の人とは話しますが気まずいのも嫌なので世間話程度を簡単に。
・そろばんの先生とか、○○(人名省略)に誘われて遊びに行ってる茶道の先生や習っている小学生とかその親とか。
・スキーの先生とその子ども
・習い事の人たち
・近所の人。そこらへん歩いてても話しかけられたり。

そして、習い事に関わった関係性の拡がりをうかがわせるものを挙げたのが 4 人いる。村での社会関係の拡がりで習い事が重要な位置を占めていることが分かる。「そろばん教室」をはじめとしたものである。

中学３年生の村でのリアルな社会関係の拡がりは、学校と家庭を除くと地域的な関係に限定される。またこの地域的な関係は、中学生であるがゆえに、所属する家族の地域社会との関係性に依存する形となる。2013 年度の中学３年生（1 人）にあったような直接的にそれがうかがえる内容は他にはない。このように考えると、「習い事」がこれを越える社会関係の機会として重要なものとなったことは、必然的でもある。もともと中学生数が少ないわけであるから、学校とその保護者そのものも少ない。さらに保護者のもっている社会関係が、中学３年生の「村コミットメント」に直接影響するわけではない。このような条件の下、「習い事」は村社会を横断的（小学生も含めた学年的にも横断的で、職域を越えた保護者とも多少とも顔なじみとなり、さらに村外での競技会等で同一行動をとる場合もあるという意味で）で、しかも（保護者経由でないという意味で）中学３年生が直接関わる社会関係である。村で「村アイデンティティ」を展開するための重要な回路と言っても良いだろう。2013 年度の中学３年生（2 人）の所属していた村の「クラブ」の加入も同じ意味で考えられる。

（4）小括――中学３年生の「村コミットメント」

これらのことから、年度によって無視できない違いがあることが分かった。この差には、家族（保護者）がもっている社会関係に関わる違いもうかがえた。近所づきあいを行う生活の余裕の有無が関わっているだろう。さらに村の「クラブ」や「習い事」という村社会横断的な関係性をもっているかどうか、に違いがあった。

研究の課題において、これまでの子どもは「学校」と「家庭」を往復する存在、すなわち「振り子型」の生活環境をもっていたことを紹介した。現在は、これに「消費社会」が加わり「トライアングル型」の生活環境となっている（4 頁）。この理解を援用すると、村の中学３年生は、バーチャルな消費社会には日常的にふれている。村は光ファイバーケーブル等のインフラ整備を行い、各家庭がインターネット接続環境にある。しかし、リアルな消費社会には日常的にふれていない（3・4 頁と脚注 6 を参照。また、村には「そろばん教室」以外の塾はない）。言わば、片面だけの「トライアングル型」生活環境をもっている。リアルな生活環境では、これまでの子どもと同様に「振り子型」の生活をする存在である。都市の中学生がするような「街」遊び（塾通い）はできない。この下で、村における自生的な社会関係は、一部の中学３年生を除いて展開していない。しかし、村の「クラブ」や「習い事」という村社会横断的な関係性を育める「第３の場」がある場合は、少し事情が異なった。そこで「村コミットメント」も生じていた。この「第３の場」という生活環境は、消費社会が可能にした「トライアングル型」生活環境に変化をもたらすのではないかと考えられる。

すなわち、「学校」、「家庭」に依存しない日常的な関係性が生まれるような場（村の「クラブ」や「習い事」）が存在すること、そしてそこに参加できることが重要である。この発見を、これからの村づくりの方法として提案すると次のようになる。

これまでの子どもの「振り子型」生活環境は、消費社会と結びつくことで「トライアングル型」生活環境に野放図（なし崩し的）に拡がった。村においては「人為的に」「第３の場」を作ることで、中学３年生の「自然な」「村コミットメント」を育むのである。筆者は子どもの生活環境の拡がり自身は「是」と捉える。いまさら「振り子型」生活環境を完璧に仕上げる方向も目指す時代ではないだろう。しかしそれを都市の子どもの場合のように消費社会にフリーハンドで任せるのではなく、村横断的な社会関係に委ねることが考えられても良い。これから中学生の「村コミットメント」を考える際には、この点への展開が鍵となるだろう。この場合、異年齢であることがもっている意味は大きいように思う。筆者が見学した際も、「そろばん教室」において中学生は、自分の弟妹ではない小学生の面倒もみていた。逆の言い方をすると、小学生は自分の兄姉ではない中学生にも面倒をみてもらっていた。このような自生的な関係の中で、小学生の保護者との話しも始まっていた。観察はしていないが、村の「クラブ」も年長の方が中学生に関わってくださっているのだと思う。特別のことが必要なのではなく、このような日常的な取組の中に中学生を引き込

むことが肝心であろう。

そして、これ以降中学３年生の「村アイデンティティ」の分析を行ってゆく。この片面だけの「トライアングル型」の生活環境の下での「村コミットメント」の差は、「村アイデンティティ」の違いにつながって行く。年度で異なっているその在り方（消極性と積極性）の差と実に良く対応したものであった。

３．中学３年生の「村アイデンティティ」

まずは、中学３年生の村について抱いている感情のおおざっぱな形（「好き」「嫌い」）を三段階（「好き」、「半々」、「嫌い」）で評価してもらった回答がある。これを出発点に考えてみたい。このおおざっぱな三段階評価だけでは、村という多面的な存在の評価基準として相応しいものかという誹りは免れないが、このおおざっぱな評価を出発点に、村のイメージや感情を肉づける形で、中学３年生の「村アイデンティティ」を明らかにしていく。

（１）中学３年生の「村評価」

2013 年度の中学３年生の村への評価（以下、「村評価」）を聞いた。「好き」、「嫌い」の答はそのままであるが、中間的なものは表現が多様であった。たとえば、「好きでも嫌いでもない」、「普通」、「微妙」等である。そのため、ここでは「半々」という言葉に代表させ、三段階にまとめた。その回答が図表９である。

図表９　2013 年度中学校３年生の「村評価」

	「好き」	「半々」	「嫌い」	計
度数(人)	3	4	3	10
内訳(%)	30	40	30	100

2013 年度の中学３年生は、全員で 10 人であった。ごらんのように評価は、「半々」の 4 人が最多で、それを挟む形で、「好き」3 人と「嫌い」3 人にきれいに分かれた。ある意味でバランスがとれた分布、あるいはニュートラルな評価であるとも言えそうだ。しかし、そうだろうか。これを同じ質問への 2015 年度の中学校３年生の回答と比較してみよう。それが図表 10 である。

図表 10　2015 年度中学校３年生の「村評価」

	「好き」	「半々」	「嫌い」	計
度数(人)	8	2	1	11
内訳(%)	73	18	9	100

2015 年度の中学３年生で、調査したのは 11 人であった。評価は、「好き」が８人、「半々」が２人、「嫌い」が１人である。「好き」が７割を占める。評価は非常に高いといってよい。

二つの学年を比較すると、すぐに分かるように、評価が大きく異なっている。2015 年の中学３年生の「好き」は、2013 年の中学３年生の倍を超える。その分「嫌い」が大きく減り、「半々」も減っている。全体に好意的である。

西興部中学校は小規模な学校であり、学年あたりの生徒数が少ない。そのため、生徒ひとりの意見が学年の特徴に大きく影響してしまう。結果も、学年の差として過大に意識されてしまう。数人の意見が、学年の違いを際立たせるのだ。個人の差が学年の差として理解されてしまうという問題である。また、学年差があったとしても、どちらの学年がより村の中学３年生の「平均像」（それが「ある」、と仮定してだが）に近いのかは分からない。

そのため、第３の評価をもってくることで、両者の差の意味を深める形をとりながら、二つの年度の中学３年生の「村アイデンティティ」の違いに迫る方法をとってみたい。そこで利用するのが、この報告書と同じ目的（中学生の「町アイデンティティ」の検討）で筆者が行った 2016 年度の興部中学校における中学３年生のアンケート調査の結果である。これは 2016 年度に興部中学校の中学３年生 24 人に対して行われたものである。対比させるために、同形式の図表の形にしてある。興部中学校の３年生に「町への評価」をたずねたものが図表 11 である。

図表 11　2016 年度興部中学校３年生の町への評価

	「好き」	「半々」	「嫌い」	計
度数(人)	12	11	1	24
内訳(%)	50	46	4	100

興部中学校３年生は 24 人であった。町への評価は、村の二つの学年の間に入る格好になっている。「好き」が最大で 50%、「半々」は 46%とわずかに少ないが拮抗している。そして「嫌い」は 4%と少ない。

敢えてこの３例を比較するなら、2013 年度の村の中学３年生は「嫌い」に偏り、2015 年度の村の中学３年生は「好き」に大きく偏っているのではないか、と推論できる。興部町中学生調査が平均的に見えるということだ。

さらに、かなり異なるものではあるが若者の「居住地域への愛着」を扱った研究での地域評価も比較の一助として紹介しておこう。辻泉はこれまでの若者文化研究が若者文化を都市中心の一枚岩のように扱ってきた点を批判して、地方と大都市の比較を行った[29]。地方として愛媛県松山市が、大都市として東京都杉並区の 20 歳の若者が取り上げられている。そこでは、「今、住んでいるまちが好きだ」の結果を４件法で比較している[30]。

これによると、松山市は「あてはまる」＋「まああてはまる」が 78.7%、「あまりあてはまらない」＋「あてはまらない」が 20.5%である（無回答が 0.8%）。東京都杉並区は「あてはまる」＋「まああてはまる」が 82.3%、「あまりあてはまらない」＋「あてはまらない」が 16.9%である（無回答が 0.8%）。大都市の方の評価が少し高くなっているが、「大差ない」

---

29 辻泉「地元志向の若者文化――地方と大都市の比較調査から」（川崎賢一・浅野智彦編著『＜若者＞の溶解』、勁草書房、2016 年。147～176 頁）を参照。

30 ４件法とは、質問に対する回答を、「あてはまる」、「まああてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の四つの中から最も近いものを選択してもらう回答方法である。

と結論している。本研究で対象とした中学生は 3 件法、辻は 4 件法という差がある。そのため単純な比較はできないが、本研究の「半々」が均等に分かれたと仮に考えて、2015 年度の村の中学３年生と 2016 年度興部中学校３年生の評価を比較してみる。2015 年度の村の中学３年生の評価は、「好き」73%＋「半々」9%（18%の半分）で 81%となる。2016 年度興部中学校３年生の評価は、「好き」50%＋「半々」23%（46%の半分）で 73%となる。これは、松山市の 78.7%、東京都杉並区の 82.3%とそれほど異なってないように思われる。

このような意味で、多くの人にとって住んでいる場所はやはり「都」である。それと比べると 2013 年度の村の中学３年生の評価は、「好き」30%＋「半々」20%（40%の半分）で 50%にすぎない。やはり低いと考えられる。

それでは、なぜこのような評価になったのかという根拠について分析を続けよう。このようなおおざっぱな評価は、根拠の考察を行わないと誤った理解をしてしまうかもしれないからだ。しかしその前に、中学３年生の「村評価」が保護者の就業類型と何らかの関わりがあるのかという点だけは確認しておきたい。

（２）保護者の就業類型は中学３年生の「村評価」にどのように関わっているか

前項で明らかにした中学３年生の「村評価」は、保護者の就業類型と何らかの関わりはあるのだろうか。中学３年生の「村アイデンティティ」を明らかにするという目的からは少し外れている。なぜなら、筆者は中学３年生の独自な考え方を、保護者の就業類型で説明してしまうことは愚であると考えており、それを避けるためである。しかしながら、中学３年生が保護者の就業類型によって異なる家庭生活（その中で考え方が育まれる）影響から、全くとは無縁であるとは言えないことも明白であろう。そのため、どの程度の影響があるのかという点に限って確認しておくことになる。なお、それ以降の分析では、検討の本線に戻って、保護者の就業類型に還元する形で分析するようなことはしない。

保護者の就業類型は図表２（14 頁）で分類した通りである。「酪農家」、「酪農関連職業」、「林業関係職業」、「地場的自営」、「福祉関係職業」、「その他職業」を区別した。また、二つの年度の大きな違いは、2013 年度の中学３年生の保護者に「福祉関係職業」が多い点、2015 年度の中学３年生の保護者に第一次産業関連の職業と「その他職業」（「転勤族」と「見える職業」）が相対的に多い点にあった。

2013 年度の中学３年生の保護者の就業類型と三段階の「村評価」をクロス集計（アンケートの設問項目のうちから、二つの項目に注目して同時に集計する作業）した結果が次頁の図表 12 である。このうち、「林業関係職業」はこの年度では 0 人であったため度数は 0 が計上されている。また、%は総度数も 0 であるため算出できない。そこには「－」を記述してある。また全体の人数に比してそれぞれの度数が小さいため、ここでの内訳（%）はそれほど意味がない。

図表 12　保護者の就業類型別中学３年生の「村評価」(2013 年度)

保護者の就業類型		「好き」	「半々」	「嫌い」	計
酪農家	度数(人)	1	0	0	1
	内訳(%)	100	0	0	100
酪農関連職業	度数(人)	1	0	0	1
	内訳(%)	100	0	0	100
林業関係職業	度数(人)	0	0	0	0
	内訳(%)	-	-	-	-
地場的自営	度数(人)	0	1	0	1
	内訳(%)	0	100	0	100
福祉関係職業	度数(人)	0	3	2	5
	内訳(%)	0	60	40	100
その他職業	度数(人)	1	0	1	2
	内訳(%)	50	0	50	100
計	度数(人)	3	4	3	10
	内訳(%)	30	40	30	100

このようにしてみると、「酪農家」の１人、「酪農関連職業」の１人、そして「その他職業」のうちの１人、の計３人が「好き」である。同様に、「地場的自営」の１人、「福祉関係職業」のうちの３人が「半々」である。そして、「福祉関係職業」のうち２人、「その他職業」のうち１人が「嫌い」である。ざっくりとみて、「第一次産業」に関わる就業類型の保護者をもつ中学３年生の「村評価」は高く、「福祉関係職業」を保護者にもつ中学３年生の「村評価」は余り高くないと言えそうだ。それでは 2015 年度の中学３年生の場合はどうなっているのだろうか。図表 13 をみてみる。

図表 13　保護者の就業類型別中学３年生の「村評価」(2015 年度)

保護者の就業類型		「好き」	「半々」	「嫌い」	計
酪農家	度数(人)	0	0	0	0
	内訳(%)	-	-	-	-
酪農関連職業	度数(人)	1	1	0	2
	内訳(%)	50	50	0	100
林業関係職業	度数(人)	2	0	0	2
	内訳(%)	100	0	0	100
地場的自営	度数(人)	0	0	1	1
	内訳(%)	0	0	100	100
福祉関係職業	度数(人)	0	1	0	1
	内訳(%)	0	100	0	100
その他職業	度数(人)	5	0	0	5
	内訳(%)	100	0	0	100
計	度数(人)	8	2	1	11
	内訳(%)	73	18	9	100

この年度は「酪農家」が０人であった。図表の表記は図表 12 と同様である。「酪農関連職業」のうち１人、「林業関係職業」の２人、「その他職業」の５人、の計８人が「好き」

である。同様に、「酪農関連職業」のうちの１人と「福祉関係職業」の１人が「半々」である。そして、「地場的自営」の 1 人が「嫌い」である。ざっくりとみて、2013 年度の中学３年生の場合と同様に「第一次産業」に関わる就業類型の保護者をもつ中学３年生の「村評価」は高いと言えそうだ。そして、「福祉関係職業」の保護者をもつ中学３年生の「村評価」についてはたった 1 人であるため何も言えない。そして「その他職業」の保護者をもつ中学３年生の「村評価」は高いと言えそうだ。

このようにみておくと、「第一次産業」関係の職業に就く保護者をもつ中学３年生の「村評価」は高いという点では共通していると思われる。また、「福祉関係職業」に就く保護者をもつ中学３年生の「村評価」は高くはないという点も同じである。ここには保護者の就業類型の分析時にも記述しておいたが、労働生活の在り方（勤務の厳しさ等）や将来展望（村に止まり続けるのかどうか）が関わっている可能性がある。たとえ「酪農家」であったとしても、牧場を廃業することを考えている場合であるなら、その子弟は村との関係（距離の取り方）を考えることになり、そのことが「村評価」にも影響を与えるだろうことが推理できるからである。そして、「その他職業」の保護者をもつ中学３年生の動向が、学年の「村評価」に決定的な影響を与えていることも指摘できるだろう。2013 年度の中学３年生の場合は「好き」と「嫌い」分かれ、2015 年度の中学３年生の場合は５人全員が「好き」であった。このことが 2015 年度の中学３年生の全体の雰囲気に影響を与えたであろうことは間違いないと思われる。

（３）中学３年生は村の「良いところ」をどのように考えているか

これ以降は中学生がどのような「村アイデンティティ」をもっているのかということを、中学生の思考に内在的に、すなわち意味の関係のなかから検討してゆく。まず、村の「良いところ」を中学３年生がどのように捉えているのか、から始める。

まず、使用する分析の方法について説明する。中学３年生のできるだけ「生（なま）」の声を分析の対象とするために、村の「良いところ」は自由回答の形式で聞いた。そのため、ひとりの中学３年生の回答には多様な（数的には複数の）内容が混在している。このままでは分析も、それを表現することも難しい。そのための工夫をした。具体的には、以下のような作業で分析を行った。

第１に、それぞれの自由回答を内容の質的な違いに注意して区別する。区別された質的に異なる内容を「要素」と考える。それぞれの「要素」はひとつの質のからなり、別の質のものが混在しないようにする。このようにしてそれぞれの自由回答は、複数の質の内容をもった複合的な回答として整理されたことになる。第２に、自由回答の間で「要素」を比較し、内容が同じ質であると考えられた場合はまとめてゆく。第３に、このような作業から、最も細かく区別した内容（単位とも言える）である「要素」から順に、「ラベル」、「カテゴリ」とまとめられ、共通項であると考えられた内容の抽象度を高くしていった。たと

えば、「要素」の幾つかを見て、共通項となる「ラベル」を考えた。「ラベル」と「カテゴリ」の関係も同様である。それぞれの自由回答は、このような手順を用いて、三段階に抽象化された階層として整理できる。複数の「要素」から「ラベル」を、さらに複数の「ラベル」から「カテゴリ」を演繹する方法を採用したのである。

2013 年度の中学３年生の場合は、回答が単純であった。そのためここで示したような三段階にはならなかった。具体的には「ラベル」に相当する中間の段階を作る必要がなかった。もっとも抽象度の高い段階を「カテゴリ」として考えている。そのため、抽象度の低い段階である「要素」をまとめて、もっとも抽象度の高い段階、すなわち「カテゴリ」の二段階構成となった。

次に、分析の際に行った演繹とは逆の方向から、結果の理解の仕方として説明してみよう。中学３年生の考える「村の良いところ」を最もざっくりと表現した（抽象化した）ものが「カテゴリ」である。この「カテゴリ」を細分化したものが「ラベル」である。さらに「ラベル」を細分化したものが「要素」である。このように表現できる。

以上のような方法をとることで、中学３年生の考える「村の良いところ」の内容・質と量を把握しようと試みたのである。

図表 14 が、2013 年度の村の中学３年生の自由回答による「村の良いところ」をここまで説明した方法で整理したものである。さらに、図表を説明することで、同時に作業の方法についても補足を加える。ところで、煩雑になってしまうが直接的な中学３年生の言葉（記述）とそれを抽象化した「要素」等を区別するために、抽象化したものの後にはそれぞれ「要素」等を付しておくことにする。

図表 14　2013 年度中学３年生の村の「良いところ」（母数 n は 10 人）

西興部村の「良いところ」			
カテゴリ	要素	度数(件)	内訳(%)
自然のめぐみがある	空気がおいしい。みずがおいしい	1	10
	自然が多い	2	20
	小計	3	30
生活しやすい	人との関わり	1	10
	犯罪とか事件事故がない	1	10
	住みやすい	1	10
	小計	3	30
環境が良い	遊びやすいところ	1	10
	人が少ない	1	10
	時間がゆっくり流れる	1	10
	静か	1	10
	インターネットが無料	2	20
	小計	6	60
なし		2	20
	複数回答総計	14	140

ひとつの回答の中に質の違う内容を含む答え方をした中学生は 4 人いた。前述したように、自由回答それぞれの中でも異なる内容を区別するという分析方針に則って「要素」を特定してある。度数はこの「要素」毎に（ひとつの回答の中に複数の回答があるという意味で）複数回答のように計上している。そのため、複数回答総計は 14 件となっている。10 人の中学３年生のうち４人が２件ずつを答えた。それで８件。ひとりで１件を答えた中学３年生が４人。それで４件。これに「ない」２名の２件を加え、「複数回答総計」14 件と数えたわけだ。

まず、ひとつの「カテゴリ」（「自然のめぐみがある」）を例に、実際に演繹していった過程も含めて説明してみよう。ひとりの中学３年生の自由回答は、「空気がおいしい。みずがおいしい。自然が多い」であった。これを事例として取り上げてみる。ここに存在する三つのこと（「空気がおいしい」、「みずがおいしい」、「自然が多い」）の、前二者は同じ趣旨であると判断して区別しなかった。後一者（「自然が多い」）のみを区別した。すなわち、「空気がおいしい。みずがおいしい。自然が多い」を、二つの「要素」（前二者と後一者）の合体物として理解したわけである。

次に、別のひとりの中学３年生の自由回答に「自然が多い」があった。これは内容的に分割できない。そして、先の回答の後一者の「自然が多い」と同じものであると見なした。すなわち、ふたり分の自由回答を「空気がおいしい。みずがおいしい」（度数としては 1）と「自然が多い」（度数としては 2）という二つの度数の異なる「要素」に整理できると考えたのである。

そして、この二つの「要素」は内容的に類似しているので、まとめることができると考えて、「自然のめぐみがある」という名前の「カテゴリ」にまとめた。「要素」として、「空気がおいしい。みずがおいしい」に度数 1、そして「自然が多い」に度数 2 を計上した。結果的には、「自然のめぐみがある」（「カテゴリ」）は、「空気がおいしい。みずがおいしい」、「自然が多い」の二つの「要素」からなり、それぞれに度数 1、度数 2 が計上されているので小計が 3 となる。

先程「要素」と「カテゴリ」の中間にあたるものとして「ラベル」が存在し、全体で三階層となると書いた。しかし、2013 年度の中学３年生の場合、挙げられた内容が単純で少ないため、中間的な存在「ラベル」に当たるものを作る必要がなかった。それで省略されている。また、2013 年度の中学３年生の場合、多くの「要素」がひとりの中学３年生の回答であるが、「自然が多い」以外に複数の中学３年生から支持されたものがもうひとつあった。それは、「インターネットが無料」（「要素」）である。これを回答した中学３年生が 2 人いた。この場合のように、ひとつ「要素」の度数が１とは限らない場合もある。

すなわち、類似性の観点からの抽象化が可能なときは、「ラベル」や「カテゴリ」を作ることができるが、できない場合（単数の場合やまとめることができない場合）は、「要素」の内容に近い形でしか「カテゴリ」を抽象化できない場合もある。人数が少ない場合は、個人的な意見の違いに影響されやすくなってしまう訳だ。こうなってしまうと、中学３年

生が全体としてどのような質の村の「良さ」を見出したのかという点で、適切性に問題が生じる場合もあるだろう。

以上のような作業から図表 14 は作成された。「カテゴリ」としてまとめることができたのは、「自然のめぐみがある」(2 人、20%)、「生活しやすい」(2 人、20%)、「環境が良い」(6 人、60%) であった。そして「良いところがない」が 2 人 (20%) いた。この 2 人を除く、8 人で 12 件の「良いところ」を挙げている。一人平均で 1.5 件の「要素」を回答したことになる。

「環境が良い」(「カテゴリ」) では、「インターネットが無料」(「要素」) を 2 人が挙げている。また、「人が少ない」、「時間がゆっくり流れる」、「静か」の三つは「都市ではないがゆえの」という意味で、否定的な評価になるものの裏面を「反転」することで得られた肯定的な評価ではないかと考えられる。さらに、「インターネットが無料」も「環境が良い」(「カテゴリ」) に分類したのは、中学 3 年生にとってゲームで「遊びやすい」環境として村が評価されていると考えたからである。しかしながら、これを新たに「自治体 (政策) が良い」(「カテゴリ」) を作成し、そこに位置づけた方が良かったかもしれない。また、「都市ではないがゆえの反転」は、「生活しやすい」(「カテゴリ」) の「犯罪とか事件・事故がない」も同趣旨ではないかとも考えられる。

全体としては意外なことに、「自然のめぐみがある」(「カテゴリ」) が少ない。そして「環境が良い」(「カテゴリ」) が多く、その中身は「都会でないからゆえの反転」した肯定的評価と「インターネットが無料」である。総じて、「良いところ」は、中学 3 年生自身が (村の)「良いところ」を満喫したと言えるような積極的なものではなく、「挙げるとすれば」という限定がつくような、消極的な印象をもつ。

それでは 2015 年度の中学 3 年生の場合はどうだろうか。次頁の図表 15 が同じような作業手順によって作成した 2015 年度の中学 3 年生の村の「良いところ」である。

ひとつの回答に質の違う内容が含まれる答え方をした中学 3 年生は 6 人いた。そのため、複数回答総計は 17 件となった。「良いところ」が「ない」の 2 人を除くと、9 人で 15 件となる。一人当たりで「良いところ」として 1.7 件を挙げていることになる。2013 年度の村の中学 3 年生によりも少し多い。

まず「カテゴリ」を検討する。2013 年度の村の中学 3 年生と同様の「カテゴリ」として、「自然のめぐみがある」を確認できる。そして、新たに「生活が穏やか」と名付けた「カテゴリ」を作ることができた。これは 2013 年度の村の中学 3 年生の「生活しやすい」(「カテゴリ」) と「環境が良い」(「カテゴリ」) と一部重なると考えられるが、それに「人が親切」(「ラベル」) や「社会関係が良い」(「ラベル」) が加わったものである。より積極的な要素が付け加わったので、この「カテゴリ」名とした。そして、2013 年度の村の中学 3 年生にあった「インターネットが無料」(「要素」) が無くなった。さらに、「体験可能性がある」と「自治体の取り組み」があるという「カテゴリ」が付け加わった。この「体験可能性がある」は、非常に興味深いものだと考える。村を自分の関わり方によって変わりうる

ものとして捉えるからこそ可能になった評価であると考えられるからである。

図表 15　2015 年度中学３年生の村の「良いところ」（母数 n は 11 人）

西興部村の「良いところ」				
カテゴリ	ラベル	要素	度数(件)	内訳(%)
自然のめぐみがある	豊かな自然	自然(森、野生の動物)が近くにある	1	9
		自然、動物が多い	1	9
	自然産品がある	松茸が採れる	1	9
			小計 3	27
生活が穏やか	人が親切	人が親切	1	9
	社会関係が良い	地域の人と交流できる	1	9
		対人関係がわかりやすい	1	9
	安全	物騒なことがない	1	9
		事件とかが起こらない。村の人はほとんど知っている人ばかり	1	9
	生活しやすい	気候がいい	1	9
		周囲が木々で落ち着く	1	9
		暇なのが良い	1	9
			小計 8	73
体験可能性がある		都会だったら体験できないことができる	1	9
自治体の取り組みがある		お金がある	1	9
		図書館等が充実している	1	9
		村として統一感がある	1	9
			小計 3	27
なし			2	18
			複数回答総計 17	155

件数的に見ると、「生活が穏やか」（「カテゴリ」）が 73%と高い点に特徴がある。これに、2013 年度の村の中学３年生ではなかった「体験可能性がある」（「カテゴリ」）と「自治体の取り組みがある」（「カテゴリ」）も加わり複雑化している。同時に肯定的な内容も増えた。

すなわち、全体として、より村での生活の現実や価値に踏み込んだ積極的評価が「良いところ」として挙げられている。それが前項で行った「村評価」の違い（2013 年よりも 2015 年の評価が高い）の根拠となっていると考えられる。次に比較のために、興部中学校３年生の町の「良いところ」をみておこう。次頁の図表 16 がそれである。

まず、興部中学校３年生の町への評価が全体として高いことが、回答数に現れていることを指摘できる。「ない」が０人であった。一人当たり 1.9 件も挙げていることになる。

カテゴリの構成でみると、「第一次産業が盛ん」がある点を指摘できる。そしてカテゴリの中身に踏み込むと、興部町の中学生には「自然のめぐみ」（カテゴリ）の中に「美味しい食べ物」（ラベル）がある点が指摘できる。それ以外では、2015 年の村の中学３年生の「良いところ」とは大差ないと考えて良い。逆の言い方をすると「美味しい食べ物」（ラベル）、「第一次産業が盛ん」（カテゴリ）が村の中学３年生にないこと、すなわち「地域アイデンティティ」の核の部分からこれが抜けていることが指摘できる。象徴的な言い方をすれば、

興部町は中学生の「胃袋をつかんでいる」。村はそうではない。

このことを強化する中学校の取り組みがある点も見過ごせない。興部中学校においては、札幌市周辺への中学３年時の修学旅行において、「PRO」（ピーアール・オコッペ、興部町の宣伝活動）に取り組んでいる。中学３年生は修学旅行前に、町長から臨時の観光大使に任命され、札幌駅に通じる「アスティ 45」の地下通路において（ビル管理者から許可を得て）、通行人へ興部町の宣伝を行っている。札幌市の通行人に、町の PR を行うことを通じて、翻ってそれが中学３年生に町の良さとして自覚されるこのようなメカニズムが作られている。これはデータからも確認できた。PR するのは町自慢の乳製品と海産物で、それを「良いね」と通行人に受け止められる。そして、自分も「そうだ」と確認するのである。筆者はそれを参与観察したが、中学３年生は積極的に町を PR していた。中学生の食経験も介した評価の高さは、興部町の特産品（乳製品等の畜産品と水産物）PR 活動と固く結びついている。

図表 16　2016 年度興部町中学３年生の興部町の「良いところ」（母数 n は 24 人）

興部町の良いところ				
カテゴリ	ラベル	要素	度数(件)	内訳(%)
自然のめぐみがある	豊かな自然	自然、自然が多い・豊か	5	21
		空気がきれい・良い・おいしい	5	21
	美味しい食べ物	牛乳・アイス・乳製品がおいしい	5	21
		食べ物がおいしい	4	17
	広いスペース	人が少ない	2	8
	自然への好アクセス	自然に近い、海にすぐ行ける	2	8
		小計	23	96
第一次産業が盛ん	盛況な酪農	酪農が盛ん	2	8
	盛況な漁業	漁業が盛ん	2	8
		小計	4	17
生活が穏やか	人が優しい	人・町民が優しい	5	21
		人の良い人が多い	1	4
	社会関係が良い	人のつながりが多い	1	4
		いろんな人に助けてもらえる	1	4
	生活しやすい	平和・犯罪がない	2	8
		自然災害・地震がない	2	8
		穏やかだから	1	4
		落ちつける	1	4
		住みやすい	1	4
		それなりに色々とそろっている	1	4
		小計	16	67
地域の取り組みがある	充実した教育環境	スポーツ施設がすごくある	1	4
		給食がいい	1	4
	地域社会の取り組み	行事も楽しい	1	4
		小計	3	13
		複数回答総計	46	192

ここまで、2013 年度・2015 年度の村の中学３年生、2016 年度の興部町の中学３年生とみてきた。大きく押さえておくなら、地域社会の「良いところ」とは、「自然のめぐみがある」ことと「生活が穏やか」から構成されている。そしてその度合いは、積極的なものから消極的なものへと、グラデーションがついている。村の中学３年生に特徴的なことは、「美味しい食べ物」（「ラベル」）がない点である。残念なことであるが、中学生の「村評価」（「良いところ」）には、第一次産業とそれがもたらす魅力（私の町には「美味しい食べ物」とそれを生みだす「産業」がある）が欠けている。

それでは逆に、中学生は村の良くないところについてどのように考えているのだろうか。次にそれを検討する。

（４）中学３年生は村の「良くないところ」をどのように考えているか

ここも村の「良いところ」と同様に、2013 年度の中学３年生、2015 年度の中学３年生、そして興部町の中学３年生の順でみてゆく。

まず、2013 年度の村の中学３年生である。分析の方法は、「良いところ」の分析と同様で、中学生のインタビューへの答えから「要素」を見つけ出し、それを「ラベル」、「カテゴリ」と抽象化して行く演繹法をとっている。図表 17 がそれをまとめたものである。

図表 17　2013 年度中学３年生の村の「良くないところ」（母数 n は 10 人）

西興部村の「良くないところ」				
カテゴリ	ラベル	要素	度数(件)	内訳(%)
「都市」にあるはずのものがない	物を買う場所に乏しい	コンビニが少ない	1	10
		店が少ない・買い物ができるところがない	2	20
		本屋がない	1	10
		イオンがない	2	20
		デパートがない	1	10
	遅い(速さがない)	コミックスが発売日から遅れる	1	10
	遊ぶ場所に乏しい	遊ぶところがない	3	30
		ゲームセンターがない	2	20
	不便	交通が不便	2	20
		買い物に時間がかかる	2	20
	移動制限	ひとりだとどこにもゆけない	1	10
	人がいない	人が少ない	1	10
		小計	19	190
自然が嫌い		真っ暗	1	10
		静かすぎる	1	10
		蛾が多い	2	20
			4	40
自治体が良くない	建物センス悪い	建物の色がオレンジと緑ばかり	1	10
なし			1	10
		複数回答総計	25	250

特徴的なのは、まず「物を買う場所に乏しい」（「ラベル」）と名付けた部分にある。「要素」では、無いものとして「コンビニ」、「店」、「イオン」、「デパート」とずらりと並んでいる。次に「遊ぶ場所に乏しい」（「ラベル」）も特徴的である。これに「不便」（「ラベル」）が加わる。他の「ラベル」も含めてより抽象化し、「『都市』にあるはずのものがない」（「カテゴリ」）としてみた。2013 年度の中学３年生は 10 人であったが、この「カテゴリ」だけで 19 件が挙げられている。一人当たりおよそ 2 件を挙げていることになる。非常に強い「不満」と言って良い。内容的には「無いものねだり」の感は免れない。中学３年生は村に住んでいる。しかし、（遊ぶことも含めて）消費社会の影響力や浸透力は思ったよりもはるかに強いと考えなければならない。すなわち、言わば「消費の申し子」である中学３年生にとって、「当たり前に存在しても良いはずのもの」（郊外型の消費環境セット）が欠けることは「許せない」のである。ここでの「都市」は東京（北海道にとっての札幌）のような大都会ではなく、地方都市の意味合いであるだろう[31]。さらに、これらに「自然が嫌い」（「カテゴリ」）が加わる。

すなわち、2013 年度の中学３年生にとって村は、「『都市』にあるはずのものがない」場所だから、「良くないところ」と感じられているのである。具体的で特定の問題ではない。「都市ではない」というところに不満が集中しているのである。

数は少ないが、「自治体行政への不満」（「カテゴリ」）が 1 件ある。「なし」は 1 人のみであった。そして、「なし」を除く 9 人で 24 件の「良くないところ」が挙げられていた。ひとり当たり 2.7 件である。

2015 年度の村の中学３年生の場合はどうなっているのだろうか。それをまとめたのが、次頁の図表 18 である。

全体として、偏ったものがない点に特徴があると言えそうだ。まず、11 人から「N.A.」と「なし」の 2 人を除くと 9 人で、複数回答の計が 14 件になった。一人当たり 1.6 件である。2013 年度の中学３年生よりも格段に少ない。そしてこの中で、相対的に多くなったのが、「村の特徴が嫌い」（「カテゴリ」）である。ここを約半数の中学３年生が支持している。内訳は、「人口構成の偏り」、「産業の問題」、「遠距離通学」（それぞれ「ラベル」）と雑多である。「人口の偏り」は、「若い人が少ない」、「老人が多い」（それぞれ要素）を指摘するものであった。そしてこれに続くのが、「不便」、「自然が嫌い」、「村内の対立」、「自治体が良くない」の各「カテゴリ」である。「村の特徴が嫌い」（「カテゴリ」）という雑多なものに少ないとは言えない数が集まっている。

ところで、「不便」（「カテゴリ」）は、2013 年度の中学３年生の「『都市』にあるはずのものがない」（「カテゴリ」）から、「物を買う場所に乏しい」（「ラベル」）と「遊ぶ場所に乏しい」（「ラベル」）を除いたものと考えて大過ないだろう。2015 年度の中学３年生の「不便」（「カテゴリ」）は、この二つが除外されたため、「暮らす場所に必要なもの」という意味に

---

31 三浦展が「ファスト風土」と呼んだ郊外型文化の施設群であろう。三浦展『ファスト風土化する日本―郊外化とその病理』（新書 y 洋泉社、2004 年）を参照。

純化され、機能的な意味で「ない」ことだけを「良くないところ」と挙げたものではないかと考えることができる。この点からみると、2015年度の中学3年生は、「無い物ねだり」をしない学年であるともみえる。しかしながら、それ以外のカテゴリに目を転ずると、2015年度の中学3年生が単純に村に対して批判的ではないから、即好意的であるとは言えない。「村の特徴が嫌い」(「カテゴリ」)がそれにあたるだろう。また中学3年生の位置からという限定は着くが、「村内の対立」(「カテゴリ」)や「自治体が良くない」(「カテゴリ」)も掲げていることにも注意する必要がある。2013年度の中学3年生が類似するものとして挙げたのは「建物のセンスが悪い」(「ラベル」)だった。ある意味で「他愛がない」。これと比較してシビアである。

図表18　2015年度中学3年生の村の「良くないところ」(母数nは11人)

西興部村の「良くないところ」				
カテゴリ	ラベル	要素	度数(件)	内訳(%)
不便		紋別とか名寄とかに行かないと買えないものがある	1	9
		店が近くにない	1	9
		買い物が不便	2	18
		小計	4	36
自然が嫌い		静かすぎる	1	9
		蛾が多い	2	18
		小計	3	27
村の特徴が嫌い	人口構成の偏り	若い人が少ない	1	9
		老人が多い	2	18
	産業の問題	牧場が近くにあるので時々臭い	1	9
	遠距離通学	学校が遠い	1	9
		小計	5	45
村内の対立		地域間の温度差がいや(すれ違い・いざこざ)	1	9
		村の対立関係(権力や村民歴の差による)がいや(すれ違い・いざこざ)	1	9
		小計	2	18
自治体が良くない		(村には)お金があるのに森夢が赤字	1	9
なし			1	9
N.A.			1	9
		複数回答総計	17	155

すなわち、2013年度の村の中学3年生は「都市ではない場所」という意味で抽象的に村の「良くないところ」を考えていたことに対して、2015年度の中学3年生は村のことをよく知っているからこそ、具体的な「良くないところ」を考えていたと推察できる。

さらに、興部町の中学3年生の「良くないところ」を検討することで、村の中学3年生の特徴や二つの学年の違いを明らかにしてみよう。次頁の図表19がそれである。

まず、母数の多さを反映して多様になっている点が指摘できる。母数の24人から「特になし」の3人を除くと、21人である。複数回答の計が31件で、一人当たり1.3件となる。両年度の中学3年生の回答件数より少ない。単純な比較ではあるが「良くないところ」と考えていることは少ないと言えそうだ。

カテゴリでみると、「『都市』にあるはずのものがない」（「カテゴリ」）、「『ワクワク』感がない」（「カテゴリ」）、「停滞する産業」（「カテゴリ」）、「田舎者性」（「カテゴリ」）、「自治体行政問題」（「カテゴリ」）からなっている。

図表 19　2016 年度興部町中学３年生の興部町の「良くないところ」（母数 n は 24 人）

興部町の良くないところ				
カテゴリ	ラベル	要素	度数(件)	内訳(%)
「都市」にあるはずのものがない	物を買う場所に乏しい	コンビニが少ない	2	8
		店が少ない	2	8
		イオンがない	1	4
		紋別に行かないと買えないものがある	1	4
		物が入ってこない	1	4
		食べ物以外あまり売っていない	1	4
	遊ぶ場所に乏しい	遊ぶところが少ない	1	4
		大人数で楽しめる場所がない	1	4
	不便	不便	4	17
		いちいち遠出しなければならない	1	4
	人がいない	人口減少・人がいない	2	8
		小計	17	71
「ワクワク」感がない	「ワクワク」感がない	田舎	2	8
		狭い	2	8
		情報が入ってこない	1	4
		つまらない	1	4
		特徴がない	1	4
		ポケモンがいない	1	4
		小計	8	33
停滞する産業	停滞する観光業	観光業が発展しない	1	4
		小計	1	4
田舎者性	低い環境意識	ゴミのポイ捨て	2	8
	排他性	町民がよそから来た人に冷たい	1	4
		小計	3	13
自治体行政問題	計画性のなさ	風車が動かない	1	4
	少ない予算	金銭面が充実していない	1	4
		小計	2	8
特になし			3	13
		小計	3	13
		複数回答総計	34	142

「『都市』にあるはずのものがない」（カテゴリ）は、2013 年度の村の中学３年生と非常に似通った内容となっている。しかし興部町の中学３年生が感じた「『ワクワク』感がない」（「カテゴリ」）は村の中学３年生にはみられなかったものである。「都市」の意味を「郊外型の消費環境セット」という意味から、より純化して受け取っている可能性がある。また 2015 年度の村の中学３年生のように「不便」と機能的に理解しているわけでもない。このような意味から言えば、「『都市』にあるはずのものがない」（「カテゴリ」）や「『ワクワク』感がない」（「カテゴリ」）は、中西新太郎が言う通り（3 頁の脚注 6 参照）、「郊外型の消費

環境セット」が欠けた郡部の生徒にとって一般的な感情として考えても良いのかもしれない。数は少ないが「田舎者性」(「カテゴリ」)は手厳しい。これらの意味するところは後述する「良いところ」と「良くないところ」の対比から深めてみたい。ところで、村の中学3年生にあって興部町の中学3年生になかったものは、「自然が嫌い」(「カテゴリ」)である。それほどまでに、「自然のめぐみがある」(「カテゴリ」)の影響力が強いと考えられる。

ここまで、2013年度・2015年度の村の中学3年生、2016年度の興部町の中学3年生とみてきた。大きく押さえておくなら、地域社会の「良くないところ」とは、前述したように中学生の生活環境は、「家庭」－「学校」－「消費社会」の「トライアングル型」に構成されていると述べたが、この「トライアングル型」から「消費社会」がリアルでは欠けていること(「郊外型の消費環境セット」がない)である。このことに不満をもっている。インターネット等でバーチャルなものとしては享受しながら、リアルでは欠けている。このギャップが耐えがたい。それ以外は、地域生活の具体性に応じて形作られている。2013年度の村の中学3年生は、この不満が非常に大きく、他の側面を覆いつくした感さえある。

それでは、「良いところ」と「良くないところ」の総体のバランスや、個別の内容の「良いところ」と「良くないところ」を貫く構造的な関連はどうなっているのだろうか。「良いところ」と「良くないところ」の対比し、まとまりをもった構図として理解することを通じて明らかにしたい。

(5)中学3年生の「村評価」の構造――「良いところ」と「良くないところ」をどのような枠組みで対比しているのか

ここまで年度・町村別に、「良いところ」と「良くないところ」のそれぞれの特徴を検討してきた。今度は、村(町)評価を「良いところ」と「良くないところ」を同時に取り上げる。この両者のバランスや個別の内容の「良いところ」と「良くないところ」を貫く構造的な関連(軸)を明らかにするためである。

主に「カテゴリ」と「ラベル」の度数(件)と内訳(%)の比較をすることで特徴をみるが、「ラベル」がない場合は「要素」を掲げる形で補足してみた。また、「良いところ」と「良くないところ」の対比を強調するために、「良いところ」と「良くないところ」と評価は違っても共通する内容に関する評価であると判断できるものを、左右に並べ配置する表記の仕方をした。そのため図表中に空いているところがある、すなわち対応する内容がない場合もある。この場合は、対比的評価となっていないということであるが、これにも軸を設定してみたい。これらの作業を通して評価の軸を明らかにする。

2013年度の村の中学3年生の「村評価」の対比の構造を検討する。それが次頁の図表20である。

まず、「良いところ」の「環境が良い」(「カテゴリ」)と「生活しやすい」(「カテゴリ」)、そして「良くないところ」の「『都市』にあるはずのものがない」(「カテゴリ」)を取り上

げる。この両者は、「村における生活評価」を軸として、対比的に配置されているとみることができる。

図表 20　2013 年度中学３年生の「村評価」の対比（母数 n は 10 人）

西興部村の「良いところ」

カテゴリ	要素	度数(件)	内訳(%)
環境が良い	遊びやすいところ	1	10
	人が少ない	1	10
	時間がゆっくり流れる	1	10
	静か	1	10
	インターネットが無料	2	20
	小計	6	60
生活しやすい	人との関わり	1	10
	犯罪とか事件事故がない	1	10
	住みやすい	1	10
	小計	3	30
自然のめぐみがある	空気がおいしい。みずがおいしい	1	10
	自然が多い	2	20
	小計	3	30
なし		2	20
	複数回答総計	14	140

西興部村の「良くないところ」

カテゴリ	ラベル	度数(件)	内訳(%)
「都市」にあるはずのものがない	物を買う場所に乏しい	7	70
	遅い(速さがない)	1	10
	遊ぶ場所に乏しい	5	50
	不便	4	40
	移動制限	1	10
	人がいない	1	10
	小計	19	190
自然が嫌い		4	40
自治体が良くない	建物センス悪い	1	10
なし		1	10
	複数回答総計	25	250

量的には、後者の方が 2 倍を超えている。そして「良いところ」の内容は、積極的な意味付けが乏しいことも前述した。「環境が良い」（「カテゴリ」）も、地方だからこそという評価というよりは、「『都市』ではないからこそ、○○がある」という形の反転した評価だと考えられる（「都市ではないがゆえの反転」と前述した）。それを脱しているのは、「遊びやすいところ」、「インターネットが無料」、「住みやすい」の各要素であると考えられる。しかし、それほど強く押しているわけではない。それに比べて「良くないところ」の「『都市』にあるはずのものがない」（「カテゴリ」）は内容的に明確である。その意味についても、34・35 頁で指摘しておいた。

すなわち、「村における生活評価」軸では、「都市ではないがゆえの反転」と「『都市』にあるはずのものがない」が対比されている。

次に、「良いところ」の「自然のめぐみがある」（「カテゴリ」）と「良くないところ」の「自然が嫌い」（「カテゴリ」）がある。すなわち「自然評価」を軸として「自然のめぐみがある」と「自然が嫌い」が対比的に配置されている。数量的には後者の方が少し多い。

最後に、「良くないところ」の「自治体が良くない」（「カテゴリ」）は「良いところ」に対比的な評価がない。しかしこれもひとつの軸であると考えることにしたい。すなわち、「自治体評価」はひとつの軸で、ただし評価の片方が欠けたものである。このような理解である。

このような分析から 2013 年度の中学３年生の「村評価」の構造は、「村における生活評価」軸、「自然評価」軸、「自治体評価」軸という 3 軸での対比であると考えられる。前 2 軸では、「良いところ」にあたるものと「良くないところ」にあたるものが対比的に配置され、後 1 軸は「良くないところ」はあっても、それに対比される「良いところ」にあたるものがない。不完全な対比である。

ところで村を「好き」、「半々」、「嫌い」の三つに区別した単純評価において、それぞれは 30%、40%、30%であった。これも合わせて解釈してみよう。

まず、数量的な側面である。「複数回答」から「なし」を除外したものを生徒数で除した単純比で考えてみる。「良いところ」が 1.5[32]に対し、「良くないところ」は 2.8[33]である。後者がおよそ 2 倍ある。これと先の「好き」（30%）、「半々」（40%）、「嫌い」（30%）を比べるなら、中学３年生の「半々」という評価は、「良くないところ」の方を重く思い描いている場合に選択した評価だろうと推察できる。すなわち単純評価は、中学３年生の「村評価」の根拠を正確に反映していない、より正確に言うと評価が高い方に傾いている。

次に、内容的な側面である。単純評価で「好き」を選択しても、「良いところ」をみる限りその根拠は積極的ではない。逆に、「半々」から「嫌い」の根拠の核にあたるものは、「『都市』にあるはずのものがない」（「カテゴリ」）であり、非常に積極的な表現だと言える。この部分は、たとえ村が「好き」な中学３年生であっても共有している。その意味で、全体的な気分とも言える。中学３年生はバーチャルな消費社会に親しみ、「郊外型の消費環境セット」に欠ける村を振り返える。村をその水準、表面的な水準でしか見ていないのである。コミットメントして初めて分かる村の固有な意味や存在性は知らないと考えられる。

2013 年度の村の中学３年生の「村評価」の構造は、「村における生活評価」軸、「自然評価」軸、「自治体評価」軸という 3 軸での対比であった。そして、「良くないところ」が「良いところ」を完全に凌駕している。しかも「良くないところ」の内容は、「『都市』にあるはずのものがない」（「カテゴリ」）を核とした「郊外型の消費環境セット」が欠けていることを理由とするものである。中学３年生は、村に住んでいるが、「郊外型の消費環境セット」がない村に愛着をもてないでいる。

同様に 2015 年度の村の中学３年生の「村評価」の構造を検討する。次頁の図表 21 がそれをまとめたものである。

まず、「良いところ」の「生活が穏やか」（「カテゴリ」）と「良くないところ」の「不便」（「カテゴリ」）、「村の特徴が嫌い」（「カテゴリ」）を取り上げる。これらは「村における生活評価」を軸とした対比であると考えることができる。

「生活が穏やか」（「カテゴリ」）は、2013 年度の中学３年生の「都市ではないがゆえの反転」よりも積極的な評価だと考えることができる。そして「不便」（「カテゴリ」）と「村の

---

32 複数回答 14 件から「ない」の 2 件を除き 12 件。「良いところ」を回答したのは 8 人。12 件を 8 人で除した数。

33 複数回答 26 件から「なし」の 1 件を除き 25 件。「良くないところ」を回答したのは 9 人。25 件を 9 人で除した数。

特徴が嫌い」(「カテゴリ」) は、2013 年度の中学３年生の「『都市』にあるはずのものがない」(「カテゴリ」) の圧倒的な評価に比して、機能的なものに単純化している。また過剰ではない。このような意味で、具体的な生活の実際の姿に踏み込んだもっとなっている。数量的にも拮抗している。

図表 21　2015 年度中学３年生の「村評価」の対比（母数 n は 11 人）

西興部村の「良いところ」

カテゴリ	ラベル	度数(件)	内訳(%)
生活が穏やか	人が親切	1	9
	社会関係が良い	2	18
	安全	2	18
	生活しやすい	3	27
	小計	8	73
自然のめぐみがある	豊かな自然	2	18
	自然産品がある	1	9
	小計	3	27
体験可能性がある		1	9
自治体の取り組みがある		3	27
なし		2	18
	複数回答総計	17	155

西興部村の「良くないところ」

カテゴリ	ラベル	度数(件)	内訳(%)
不便		4	36
村の特徴が嫌い	人口構成の偏り	3	27
	産業の問題	1	9
	遠距離通学	1	9
	小計	5	45
自然が嫌い		3	27
村内の対立		2	18
自治体が良くない		1	9
なし		1	9
N.A.		1	9
	複数回答総計	17	155

次に、「良いところ」の「自然のめぐみがある」(「カテゴリ」) と「良くないところ」の「自然が嫌い」(「カテゴリ」) を取り上げる。これは「自然評価」を軸にした対比であると考えることができる。数量的にも拮抗している。

さらに「良いところ」の「自治体の取り組みがある」(「カテゴリ」) と「良くないところ」の「自治体が良くない」(「カテゴリ」) を取り上げる。これは「自治体評価」を軸にした対比であると考えることができる。数量的は前者が上回る（度数では 3 対 1)。

そして「良いところ」の「体験可能性がある」(「カテゴリ」) と「良くないところ」の「村内の対立」(「カテゴリ」) は、それぞれ対比となるべき評価をもっていない。しかし、これも軸と考え命名する。前者には、「コミットメント受容評価」軸と、後者には「コミュニティ民主主義評価」軸と名前をつけておく。対比的な項目抜きで命名したため、また思い入れ過剰なものに思えるかもしれないが、それぞれの発言内容の意味を根拠に命名したものとご了解いただきたい（31・36 頁参照)。また、それぞれが「良いところ」と「良くないところ」の内容であるため中立的な意味で設定する軸にその影響が及ばないような名称にした。

このようなことから 2015 年度の中学３年生の「村評価」の構造は、「良いところ」と「良くないところ」が対比的に配置された「村における生活評価」軸、「自然評価」軸、「自治

体評価」軸の 3 軸と、対比の一方が欠けている「コミットメント受容評価」軸と「コミュニティ民主主義評価」軸の 2 軸で構成されていると考えられる。

ところで、2015 年度の中学 3 年生の「村評価」は、「好き」が 64%、「半々」が 27%、「嫌い」が 9%と評価していた。これも合わせて解釈してみよう。

まず、数量的な側面である。単純評価は、高評価に傾いていた。「複数回答」から「なし」を除外したものを生徒数で除した単純比で考えてみる。「良いところ」が 1.7[34]に対し、「良くないところ」も 1.7[35]である。全く拮抗している。すなわち、その根拠でみると相半ばしている。単純評価は根拠でみると少し差し引く必要がありそうだ。この点は 2013 年度の中学 3 年生の場合と同様である。

次に、内容的な側面である。対比的評価が配置された 3 軸ではバランスが取れており、突出したものはない。対比的評価が配置されていない 2 軸はそれぞれ度数 1 である。これも、質の点を置くと突出してはいない。

全体としては、「良いところ」と「良くないところ」が拮抗しているのだが、それは 2013 年度の村の中学 3 年生のような不満（「『都市』にあるはずのものがない」）が多くないからである。内容的に見た場合、「『都市』にあるはずのものがない」（「カテゴリ」）が「不便」（「カテゴリ」）に変換されている。この点は重要である。そしてその程度が減っている。すなわち、現実的である点が違っている。クール、あるいは「夢を見ない」（2013 年度の中学 3 年生のように過剰ではない）と言っても良いかもしれない。その代わり「村の特徴が嫌い」（「カテゴリ」）が挙がる。しかし、それほど多くはない。

さらに「村評価」の構造という点では若干の違いがある。2015 年度の中学 3 年生の「村評価」は、対比的評価が配置されている 3 軸では、2013 年度の中学 3 年生と共通する。3 軸とは、「村における生活評価」軸、「自然評価」軸、「自治体評価」軸であった。ただし、「良いところ」と「良くないところ」のバランスが違った。そして、2013 年度の中学 3 年生にはない 2 軸が加わった。2 軸とは「コミットメント受容評価」軸と「コミュニティ民主主義評価」軸である。

参考のために 2016 年度興部町中学 3 年生の対比もみておこう。それが次頁の図表 22 である。

村の中学 3 年生の「村評価」は、主に「村における生活評価」軸、「自然評価」軸、「自治体評価」軸という 3 軸の対比構造であった。興部中学校の 3 年生の場合は対比の軸が異なる。二つの解釈ができる。

まず、「良いところ」の「自然のめぐみがある」（「カテゴリ」）と「生活が穏やか」（「カテゴリ」）が、「良くないところ」の「『都市』にあるはずのものがない」（「カテゴリ」）と「『ワクワク』感がない」（「カテゴリ」）、そして「田舎者性」（「カテゴリ」）と対応してい

---

[34] 複数回答 17 件から「ない」の 2 件を除き 15 件。「良いところ」を回答したのは 9 人。15 件を 9 人で除した数。

[35] 複数回答 17 件から「なし」と「N.A.」の 2 件を除き 15 件。「良くないところ」を回答したのは 9 人。15 件を 9 人で除した数。

ると考えることができる。このような解釈をしてみる。

図表 22　2016 年度興部町中学３年生の興部町評価の対比（母数 n は 24 人）

良いところ

カテゴリ	ラベル	度数(件)	内訳(%)
自然のめぐみがある	豊かな自然	10	42
	美味しい食べ物	9	38
	広いスペース	2	8
	自然への好アクセス	2	8
	小計	23	96
生活が穏やか	人が優しい	6	25
	社会関係が良い	2	8
	生活しやすい	8	33
	小計	16	67
第一次産業が盛ん	盛況な酪農	2	8
	盛況な漁業	2	8
	小計	4	17
地域の取り組みがある	充実した教育環境	2	8
	地域社会の取り組み	1	4
	小計	3	13
	複数回答総計	46	192

良くないところ

カテゴリ	ラベル	度数(件)	内訳(%)
「都市」にあるはずのものがない	物を買う場所に乏しい	8	33
	遊ぶ場所に乏しい	2	8
	不便	5	21
	人が少ない	2	8
	小計	17	71
「ワクワク」感がない	田舎	2	8
	狭い	2	8
	情報に乏しい	1	4
	つまらない	1	4
	特徴がない	1	4
	ポケモンがいない	1	4
	小計	8	33
田舎者性	低い環境意識	2	8
	排他性	1	4
	小計	3	13
停滞する観光業		1	4
自治体行政問題	計画性のなさ	1	4
	少ない予算	1	4
	小計	2	8
	特になし	3	13
	複数回答総計	34	142

一方で、「自然のめぐみがある」と「生活が穏やか」が不可分に結びついたものを考えるなら「鄙びた場所」とでも名付けることができるものであろう。ここではプラス価値として理解していただきたい。以降ではこのプラス価値も込めて、「田舎」と呼称することにしよう。他方で、「『都市』にあるはずのものがない」と「『ワクワク』感がない」と「田舎者性」は、「良くないところ」として「田舎」が否定的な（マイナスの）意味でも用いられている。この意味での「田舎」を反転（プラス）したものは「都市」となる。すなわち、「田舎」は二重の意味をもつ。「都市」との対比でプラスの意味づけがなされ、同時に「都市」ではないという意味でマイナスの意味づけがなされていると考えられる。

村の中学３年生の場合は「村における生活評価」軸と「自然評価」軸として別々に対比されていた。これらが合体し、興部町（＝「田舎」）は「鄙びた場所」という意味でのプラスの価値と「『都市』ではない場所」という意味での対比（二重化）されている。他地域と比較した、興部町に関する表裏の評価と言っても良いかもしれない。軸として命名するなら、「地域比較」軸とでも言うべきものである。ここまでの度数を比較すると、39 対 28 で

前者が後者を凌駕している。その意味で、「地域比較」軸の点から興部町を肯定的に評価している（プラスがマイナスを上回る）と言える。

さらに「良いところ」の「自然のめぐみがある」（「カテゴリ」）と「良くないところ」の「『都市』にあるはずのものがない」（「カテゴリ」）と「『ワクワク』感がない」（「カテゴリ」）が対応すると考えてみることもできる。上述より対応関係を狭く考えたわけである。軸を命名するなら、「地域魅力」軸とでも呼びうるものだ。これだと度数の比較は、23 対 25 でほぼ拮抗しているとの理解も可能である。同様に、「良いところ」の「生活が穏やか」（「カテゴリ」）と「良くないところ」の「田舎者性」（「カテゴリ」）が対応すると考えてみる。「地域社会の質」を軸として考え、その対比と理解したわけである。これだと度数の比較は 16 対 3 で前者が圧倒する。このような理解も可能であろう。

前者の軸理解を採用すると、興部町の中学３年生にとっても「田舎」と「都市」を対比する構図はくっきりと際立っている。「田舎」には「自然のめぐみ」がある。しかし、「『都市』にあるはずのもの」や「『ワクワク』感」はない。しかしながら全体としてみた場合、興部町の中学３年生にとって「自然のめぐみがある」は非常に強い肯定的な評価として、「『都市』にあるはずのもの」や「『ワクワク』感』がないことの不満感（評価）を上回るのである。単純評価では「好き」が 50%、「半々」が 46%、「嫌い」が 4%であった。これには、「良いところ」と「良くないところ」という具体的な根拠がある。

さらに「良いところ」の「第一次産業が盛ん」（「カテゴリ」）と「良くないところ」の「停滞する産業」（「カテゴリ」）が対比的に配置されていると考えることができる。これは「産業」軸と考えることができる。これも前者が数量的には上回る。

そして「良いところ」の「地域の取り組みがある」（「カテゴリ」）と「良くないところ」の「自治体行政問題」（「カテゴリ」）は対比的に配置されていると考えることができる。これは「自治体評価」軸と見なすことができる。これも、数量的には前者が少し上回る。

「村評価」は、対比的評価が配置されている 3 軸（「村における生活評価」軸、「自然評価」軸、「自治体評価」軸）があった。さらに対比的評価が配置されない 2 軸（「コミットメント受容評価」軸と「コミュニティ民主主義評価」軸）があった。

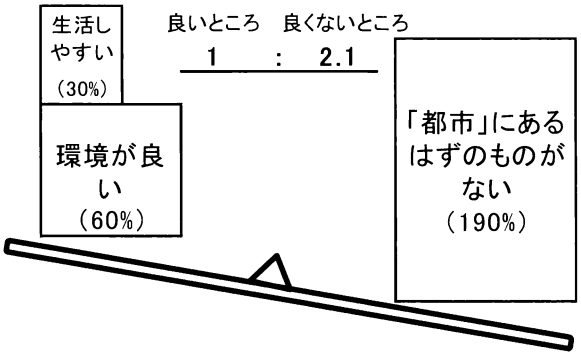
興部中学校の３年生の場合は、対比的評価が配置されているのは、「地域比較」軸、「産業」軸、「自治体評価」軸の 3 軸である。繰り返しになるが、「地域比較」軸にも「田舎」と「都市」を対比する構図は厳しく存在している。村の 2013 年度の中学３年生と同様である。その上で、「田舎」の良いところを、「豊かな自然」、「美味しい食べ物」、「人が優しい」、「生活しやすい」として実感しているのである。

（６）小活――中学生の「村アイデンティティ」

ここまで中学生の村・町の評価を構造の観点から検討してきた。本報告書では、軸をもった対比の構造全体を「村アイデンティティ」と呼ぶことにする。そしてさらに、評価の

対比を構成する量的な観点からざっくりとした構図を検討したい。そのために、「良いところ」と「良くないところ」で対比されていたカテゴリの内、割合の大きなものを取り上げる。それを左側と右側で構成されるシーソーに見立ててみる。シーソーの左側に「良いところ」を右側に「良くないところ」を配置し、「重さ」のバランスが直感的に把握できるようにするためである。以降では、評価内容の後に記述する「カテゴリ」等の添え書きを省略する。図表 23 は、2013 年度の中学３年生の「村評価」の対比の構図である。

図表 23　2013 年度中学３年生の「村評価」の対比の構図

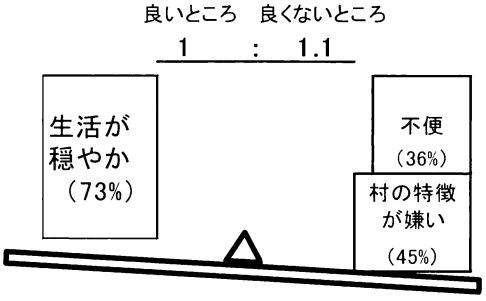


左側に「良いところ」で大きな位置を占めた「カテゴリ」が、右側に「良くないところ」で大きな位置を占めた「カテゴリ」が置かれている。また、「カテゴリ」の内容とその内訳（%）を書き入れている。厳密とは言えないが、それぞれの内訳（%）の大きさがイメージできるような大きさの四角形としてみた。さらにシーソーの傾きは、左側と右側の釣り合いで大きい（「重い」）方が下がるように表現してみた。

シーソーの中央部に「1 : 2.1」と書いたのは、左側の 90%と右側の 190%を比較して、90%を 1 とした場合の 190%の比率 2.1 を記述したものである。そして、「1＜2.1」で 2.1 の方がかなり大きい（「重い」）ので、シーソーの左側が上がり、右側が下がる表現にしている。

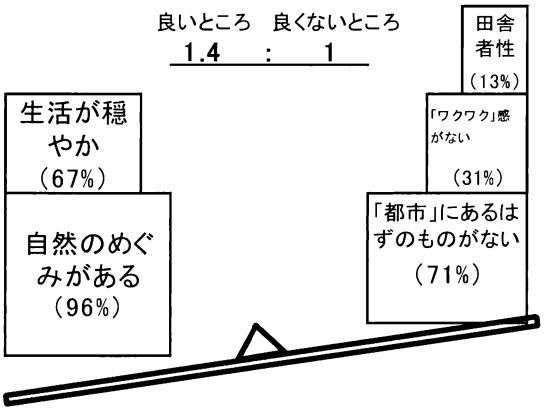
一目見て分かるように、右側の「カテゴリ」が大きい（「重い」）。すなわち、「『都市』にあるはずのものがない」があまりにも大きいのだ。

図表 24　2015 年度中学３年生の「村評価」の対比の構図



前頁の図表 24 は、2015 年度の中学３年生の「村評価」の対比の構図である。「1＜1.1」でそれほど左右の差がないため傾きは小さい。釣り合っている。2013 年度の中学３年生の「生活がしやすい」と「環境が良い」が合体して「生活が穏やか」となり、逆に「『都市』にあるはずのものがない」が「不便」と「村の特徴が嫌い」に分解している。

図表 25　2016 年度興部町の中学３年生の町評価の対比の構図



図表 25 は興部町の中学３年生の町評価の対比の構図である。「1.4＞1」であるためシーソーの左側が下がり、右側が上がる図表となっている。すなわち、村の 2015 年度の中学３年生のシーソーの左側には、興部中学校の３年生の場合は「自然のめぐみがある」が加算された形となっている。ただし右側の内訳は異なる。

これまでの検討から分かったことを二つに区別して説明しよう。

まず、「良いところ」と「良くないところ」の釣り合いが三つの事例で大きく異なっていたことの示唆、である。村の中学３年生の場合、2013 年度の中学３年生の場合は著しく右側が下がる（「良くないところ」が勝る）。2015 年度の中学３年生場合でも右側が少し下がる（「良くないところ」が勝る）。2016 年度興部町の中学３年生の場合は、逆に左側が下がる（「良いところ」が勝る）。村の中学３年生でも 2013 年度と 2015 年度では大きく異なり、両者のバランスは違っている。後者は水平に近くなっている。

2013 年度の中学３年生の多くにとって「村アイデンティティ」をもつことは難しいものとなっている。あるいは否定的な「村アイデンティティ」をもっているとも言える。それに比して、2015 年度の中学３年生は、「生活が穏やか」という生活上の価値に引きつけて、「村アイデンティティ」をもつことが可能になっていると考えられる。他方で、2016 年度興部町の中学３年生の場合は、興部町の魅力（「自然のめぐみがある」）と「『都市』にあるはずのものがない」という疎外感が一体のものとなった「町アイデンティティ」が形成されていると考えられる。すなわち、地方では即「良くないところ」が勝る訳ではない。どのように「良いところ」を中学３年生が発見できているかが重要となっている。

次に、これからの中学生が「村アイデンティティ」を発展させる（深める）ためには何

が必要であるのかという点での示唆を考える。そのために「良いところ」と「良くないところ」の内容に再度注目し深めてみる。

まず、「良いところ」には生活に関わる評価があることを確認できる。2013年度の村の中学3年生場合は、「生活しやすい」、「環境が良い」として名付けられるものである。2015年度の村の中学3年生の場合はより肯定的な意味を含んだ「生活が穏やか」になっている。それぞれの割合（件数を母数で除した%）は前者が90（30＋60）%、後者が73%である。大差がないものと考えて良いと思う。2016年度興部町の中学3年生の「生活が穏やか」も63%である。一定数の中学3年生は「住めば都」として、「都である部分」を発見していると思われる。村と興部町の差は、おおざっぱに言うとこの「良いところ」に「自然のめぐみがある」が加わるかどうかにある。

詳細に検討しよう。村と興部町の違いは二つある。

まず「自然のめぐみがある」と「自然が嫌い」が相殺されたかどうかである。興部町の中学3年生には「自然が嫌い」がない。次に興部町において相殺されない理由は、この「自然のめぐみがある」の核には「美味しい食べ物」があったことである。その結果、「自然のめぐみがある」として96%分が加算される。

次に、右側には「『都市』にあるはずのものがない」に象徴的な、中学3年生が感じる消費社会の格差構造を念頭においての自町村への否定的な評価がある。ただし、ここには多様性もある。2013年度の村の中学3年生、2016年度興部町の中学3年生の場合は共に、「『都市』にあるはずのものがない」という抽象度の高いイメージが形成されていた。しかし、2015年度の村の中学3年生の場合は直接的な問題点（「村の特徴が嫌い」）と機能的な評価（「不便」）内容に分解されていた。他方で2016年度興部町の中学3年生の場合は、文化的な地域格差のより核心的な表現として「『ワクワク』感がない」と名付けることができるものもあった。文化的な閉鎖性への指摘（「田舎者性」）も量は少ないが見逃せないと考える。

一方で、左側には町村での生活実感の豊富さ・深さの多寡が置かれる。「生活が穏やか」に象徴的なコミュニティ生活の実感と、自然体験と町村固有の魅力（興部町の場合は、「胃袋をつかんでいる」かどうか）である。直接的で経験的なものである。

他方で、右側には時々の直接的な消費体験やマスコミ・インターネットによって、あるいは身近なコミュニケーションなかで見聞きする「郊外型の消費環境セット」が欠けていることへの不満が置かれる。この不満はイメージだから肥大化する、あるいは経験が乏しい（都市の否定的な部分を想像する力がない）からこそ不満は募るという理屈も働いているだろう。そして敢えて言うなら、現代において子ども・青年が成長する（社会化される）環境として消費社会が重要な位置を占め、それが地域格差をもっているなら、「良くないところ」に自動的に積み上がって行くものとして考えられる。そのため、負の「地域アイデンティティ」を形成してしまう（形成させられる）。この解消は困難であると結論づけるしかない[36]。だとするなら、「良いところ」に何を置くか、そしてどのように「重く」するの

[36] 中学3年生の「村コミットメント」を分析した際に、「第3の場」の指摘をした（22頁）。ここに「郊

かが重要となっている。そして、この事例を見る限り、「良いところ」にくるのは生活実感の豊富さ・深さである。そしてその実感が、「『都市』にあるはずのものがない」というイメージに、どのように抗しうるのか、量と共に質が問わなければならない[37]。

興部町の事例で紹介したような、「胃袋をつかむ」ことはひとつの回答であろう。第一次産業が主産業であり、それが地域特産物をもっている場合の「地域アイデンティティ」確立の方法論である。しかし、どの地域でも可能か、またどのような意味で回答となっているかを考えなければならないだろう。たとえば、来年度に向けて隣接する下川町で同様の研究をしたいと考えているが、この場合に「森の魅力」への支持が「良いところ」に積み上がるのかどうかは、未知数だと思う。そう考える理由は、「『都市』にあるはずのものがない」が消費社会の魅力の否定的投影であるとするなら、「胃袋をつむ」ことを可能にする「美味しい食べ物」が消費社会における価値（市場価値、市場からの評価）の投影である可能性も否定できないからである。興部町の乳製品や水産物を中学３年生が評価しているのは、市場的な評価の高さゆえではないかとも思われるからだ。だから、下川町の中学生にとって「森の魅力」の商品価値が低いとみなされた場合、「良いところ」とみなされないのではないかという危惧がぬぐいきれない。このことは、西興部村のもうひとつの主要な産業である福祉を生かして、「福祉の村」として「村アイデンティティ」を確立したとしても中学生にとっての「村アイデンティティ」になるのかどうかは未知数であると推理する根拠ともなる。市場価値や市場からの評価に依らない「地域アイデンティティ」は、どのように可能であるのだろうか。さらに研究を進める必要があるだろう。

しかし、別の考え方の可能性もある。たとえば、市場価値と区別される地域の魅力があるかもれない。村の中学３年生では年度の差が著しく生徒数が少なかったために、左側と右側のカテゴリに注目したクロス表を作成して分析することはできなかったが、2016 年度興部町の中学３年生の分析からは、以下のことが分かっている。

前述したように興部町の「良いところ」を抽象化した「カテゴリ」は、「自然のめぐみがある」と「生活が穏やか」の二つであった。これらが「良くないところ」を抽象化した「カテゴリ」である「『都市』にあるはずのものがない」とどのような関係にあるのかを検討した。興部町の「良いところ」で「自然のめぐみがある」を挙げた中学３年生は、「良くないところ」で「都市にあるものがない」を挙げる傾向があった。すなわち、この二つは「一対」（いっつい。ことの両面）の関係にあった。

興部中学校への報告書では、この「一対」の関係を「ステレオタイプ（紋切り型）」と表現した。都市と「田舎」（「鄙びた場所」）を対比させる枠組み（「地域比較」軸）を基に、「『都

外型の消費環境セット」が欠けていることへの不満を、現実的な社会横断的な関係性によって弱める、あるいは左側へ村ならではの生活の価値を積み貸される可能性があると考えている。

[37] 2015 年度の中学３年生のなかに村には都市とは違う「体験可能性」があると答えた者が１人だけであるがいた。この点は大変示唆的であると考える。村固有の、「小さな村」だからできる体験の固有性を考えなければならないということだと考える。それは何も特有な取組をすることを意味しない。「トライアングル型」の生活環境の、都市ではありきたりな「消費社会」を別の日常的な取組に置き換えるだけでも可能性があるという点については、「村コミットメント」で「第３の場」として分析した。

市』にあるものがない」と「自然のめぐみがある」は対比的ではあるが、同時に「一対」のものとして構造化されていると考えたのである。「田舎」に位置付けられた興部町の「町アイデンティティ」は、「自然のめぐみがある」（表）と「『都市』にあるはずのものがない」（裏）である。このような意味で、「『都市』にあるものがない」と「自然のめぐみがある」は、「表裏」一体であることがデータ的に裏づけられた。ところが、「生活が穏やか」に替えて、同じように検討したところ違う結果が得られた。「生活が穏やか」という印象をもつ中学３年生は、そうでない中学３年生に比べて「『都市』にあるものがない」という印象をあまりもたない。すなわち、中学３年生自身の体験評価である「生活が穏やか」は、都市への憧れとは独自の価値があると考えることができた。

以上の分析結果から、同じ興部町の「良いところ」と言っても「良くないところ」との対比からは、「自然のめぐみ」と「生活が穏やか」は全く違う地域的な価値（の意識）であることが分かった。すなわち、この二つの「カテゴリ」は緊張関係にあって、中学３年生の生活が地域社会に深入りしているのかどうか、そのような生活を送っているか、すなわちコミットメントの違いが関わっている可能性があった。さらにこの二つのカテゴリは、中学３年生にとっての町評価を高めるという点からみた意義が異なることも分かった。「自然のめぐみ」は都市への憧れに見事に重なり（両立する）、「生活が穏やか」はそうではない。このことは、これからの「地域アイデンティティ」の創造を考える上で大きなヒントとなると思われる。

消費社会の地域的格差という与件のもとで、中学３年生がむやみに都市に憧れないようにするためには、「生活が穏やか」に注目してもらう必要がある。すなわち、住んでいる地域での生活に深入り（コミットメント）してもらうことが不可欠であることを示唆する。もしかすると、村の 2015 年度の中学３年生の場合に、右側に「『都市』にあるはずのものがない」という「カテゴリ」が形成されず、「不便」という機能的な否定的評価に変換されていたことは、このことを表していた可能性もある。

だとするなら、「生活が穏やか」と「福祉の村」が結びついた形で、また「村コミットメント」を深めることで、市場価値や市場からの評価とは別の軸を形成する可能性を追求することも、「良いところ」を積み上げる別の方法として考えられて良い。

2015 年度の中学３年生で存在した 2 軸（「コミットメント受容評価」軸と「コミュニティ民主主義評価」軸）がそれである。この点については、全体のまとめの際に OBOG インタビュー調査の一部も交えながらもう少し議論を深めてみたい。

そして、「生活が穏やか」という「カテゴリ」も、中学３年生の個別の意見を抽象化し集約したものである。「人口減少」時代の「地域アイデンティティ」の創造のためには、この価値をより発展させるためには何が必要であるのか。そのための研究も積み重ねなければならない。

４．中学３年生の進路志向と「将来イメージ」

ここまで検討してきた中学３年生の「村アイデンティティ」は、中学校卒業後の進路や進路志向、そして幾つかの側面から構成される「将来イメージ」とどのように関わっているのだろうか。それを検討する。

（１）村の中学生の進路の特徴――制約のある進路決定

お話しを聞いた中学３年生の進路について考察する前に、西興部中学校の卒業生の近年の進路動向を確認しておきたい。しかし、オホーツク圏の高校がない小規模自治体で生活する中学生の進路がどのようなものであるかを確認するには、手順を踏んだ説明をする必要がある。前置きが長くなるがご容赦願いたい。

村は、村に居住する保護者に対して、その子弟（高校生等）の通学・下宿費用を助成している。分析の元になった資料は、その際作成されたものである。2009 年度以降、2016 年度までの高校等進学者の進路について集約してみた（53 頁の図表 26）。ここまで分析の対象としてきた 2013 年度、2015 年度の中学３年生は、この図表では次年度 2014 年度、2016 年度の進学者に計上されている。また、調査時の生徒数と次年度の進学者数は若干異なっている。2014 年度の場合は、１人が進学と同時に保護者共々離村した。そのため進学者では１人減である。2015 年度の中学３年生の場合は、調査の段階で１人から話が聞けていない。そのため調査時の生徒数は１人減である（進学者数は１人増として表れている）。さらに、地域の通学可能性という点からデータを整理したため、学科の区別はしていない。この点については記述で補足する。

ところで掲げた図表では高校名を記入すると煩雑になってしまうので、進学先を「旧学区」で一括りにして、すなわち「旧学区」単位に進学者を計上した。また「学区」は略称で、正しくは「通学区域」である。「学区」について二つの説明を付け加えておく。

第１に、通学という点で学区による制限があるのは、道立高校の全日制課程普通科だけで、全日制課程専門学科には制限がない。第２に、現在の「学区」ではなく「旧学区」を分析単位とした。それは、北海道教育委員会が高校の再編計画を進めるために大括り化した現在の「学区」は、「通学」を冠してはいるが自宅からの通学の圏域という意味では広すぎ、意味がないからである。

たとえば、村の所属する現在の「オホーツク西学区」は、「旧網走第４学区」と「旧網走第３学区」を合同したものである。「オホーツク西学区」には６校の高校がある。そのうち「旧網走第４学区」には４校の高校があるが、そのうち２校は通学困難である。ましてや「旧網走第３学区」の遠軽高校や湧別高校は、通学の考慮対象外である。これは村に隣接する現在の「上川北学区」でも同様である。「旧上川第５学区」でも広い。「上川北学区」ならなおさらである。「旧上川第４学区」に所属していた士別翔雲高校はもちろん、「旧上

川第５学区」であっても美深高校も通学の考慮対象外である。ここでは詳しくふれないが「学区」の大括り化は、高校の統廃合とも関わっている。

このような事情で、「旧学区」でさえも通学が可能ではない高校がある。そのため「旧網走第４学区」を、通学圏か、通学圏外かで区別してある。そして、実際に生徒が進学した高校の名称は、それぞれの「旧学区」毎に図表の注に記入した。

結果的に、「旧網走第４学区」（紋別市・興部町・滝上町・雄武町・西興部村）の二つの高校（興部高校と紋別高校）と「旧上川第５学区」（名寄市・下川町）の三つの高校（名寄高校と名寄産業高校、下川商業高校）は、基本的に通学圏であるとみなすことができる。しかし実際の通学を考えれば、都市部の高校であれば驚くような通学条件である。

通学圏に分類した紋別高校であっても、通学に使用できるバス便は行き（朝）に 1 本、帰り（夕、夜）に 2 本しかない。行きの出発（西興部バス停を基準にした。以下同様）は 6 時 55 分である。通学には 1 時間 21 分かかる。帰りの遅い便で村に帰り着くのは、20 時 2 分である。そのため、部活動の関係で下宿を選択しなければならない場合もある。

逆に通学圏外に分類した雄武高校も、無理をすれば通えないわけではない。しかし通学可能なバス便は行き（朝）に 1 本、帰り（夕、夜）に 2 本しかない。また乗り換えが非常に悪い。行きの出発は 6 時 55 分である。通学には 1 時間 27 分かかる。同様に通学圏外に分類した滝上高校（滝上町）は、バスでは通学できない。それを前提としたバス便がそもそも組まれていない。路線の関係で大きく迂回することが強いられる。乗り継ぎに時間を浪費しないとしても、バスに乗っている時間だけでおよそ 2 時間かかる。もし自家用車で送迎してもらうことができれば、迂回部分を大きくショートカットすることで、走行距離は 25 km（約 30 分）となり、通学は可能となる。しかし滝上高校は廃校の対象となっているため、生徒も保護者も進学を躊躇する可能性があった。

このような事情で「旧網走第４学区」の可能な通学圏は、興部高校と紋別高校の 2 校となる。そして最も近い興部高校であっても、乗車時間は短くなるが、バス便がすくない点は同じである。

「旧上川第５学区」の場合でも、通学可能なバス便は行き（朝）に 1 本、帰り（夕、夜）に 3 本しかない。帰りの 1 本は名寄駅発が 14 時 47 分なので、高校の終わる時間を考慮すると限定的な使用となると思われる[38]。行きの出発は 6 時 37 分である。通学には 1 時間 3 分かかる。帰りの遅い便で村に帰り着くのは 22 時 15 分である。そして最も近い下川商業高校であっても、乗車時間は短くなるが、バス便は名寄高校と同様の本数である。時間とバス便の本数の二面で通学は制約される。

村から提供された資料で通学かそれとも下宿等かを知ることができるが、それによると紋別高校と名寄産業高校が通学か下宿等かの判断の分かれる高校となっている。

さらに通学圏以外の「学区外」通学の特徴を説明する。

---

[38] 名寄高校最寄りのバス停は「徳田 17 線」であるが、参照可能な時刻表にはその時間が記載されていない。そのため、三駅隣の名寄駅発着の時間を記述する。

まず、学校種として高等専門学校（「高専」）が選択肢に入っていることである。そして、旭川市や札幌市の名だたる進学校にも進学していることである。このような意味で、西興部中学校は「へき地 2 級」の中学校であるが、学力的に遜色があるとは言えないことも付け加えておきたい。高校以降の進路への視野は、中学生時代の勉強の動機付け（モチベーション）を介し、学力形成という点で影響を与えており、それが閉じられている場合とそうではない場合で大きな違いを与えると考えられる。そしてこの視野（の広さ）は同じ学年の中学生同士で影響を与え合うため、学年毎の差として出てくると考えられる。

さらに専門学科についても確認しておく。「旧網走第 4 学区」に含まれる 4 校では、紋別高校に工業系の学科（電子機械科）と商業系の学科（総合ビジネス科）が付設されている。「旧上川第 5 学区」では下川商業高校と名寄産業高校が専門高校である。下川商業高校は商業科で、名寄産業高校は工業系の学科（電子機械科、建築システム科）と農業系の学科（酪農科学科）と家庭系の学科（生活文化科）で構成されている。図表に記された実際の進路から言えば、これ以外に看護科のある高校、水産学科のある高校に進学した場合があった。

前置きはここまでとして、次頁の図表 26 について説明しよう。

8 年度の累計からは、村の含まれる「旧網走第 4 学区」の高校に 5 割弱の中学 3 年生が進学したことが分かる。このうち通学圏である興部高校と紋別高校へは 4 割弱が、通学圏外の雄武高校・滝上高校には約 1 割が進学した。また村は隣の支庁となる「旧上川第 5 学区」に隣接している。そのため「旧上川第 5 学区」は「学区外」であるが、通学圏には含まれる[39]。ここに約 2 割が進学する。通学圏ということで、「旧網走第 4 学区」の一部と「旧上川第 5 学区」を合わせて考えてみる。ここに 60%が進学した。そして通学圏外に 40%が進学した。ただし、これは平均的な意味で、である。

注目しなければならないのは、この「学区内」と「学区外」そして通学圏と通学圏外の割合が、年度によって大きく変動することである。「学区内」進学は最大の年度で 67%、最少の年度で 33%となる。差が 34%ある。通学圏進学でみると最大の年度で 100%、最少の年度で 36%である。差は 64%にもなる。たかだか 8 年度をみても非常に大きな変動であることが分かる。年度で変動が大きい（3 人から 13 人の幅）ということもこれに関わっている。事例数が少ないため、%では大きな変化になってしまう。

そしてこれらのことから、中学校における進路指導の難しさ（生徒の状況からだいたいこの進路に、という目算が立ちにくい）や、保護者はどの高校等に子弟を進学させるのか（生徒にとっては進路選択）に頭を悩ませる状況が常態化しているだろうことは、想像に難くない。特に、自宅から通えない進学先を選択する場合には、保護者の経済的な裏付けの有無や親戚等の子どもを託せる先の有無が問題となるだろう。たとえ経済的な裏づけがあったとしても、下宿も心配である。ここに、居住する自治体に高校がないということが中学生の進路に与える影響の大きさが表れている。

---

[39] 通学可能ではあるが「学区外」通学となるため、「隣接学区等就学承認申込書」の提出が求められる。

ちなみに興部町で言えば、地元の興部高校に4～6割の生徒が進学する。そして通学圏である「旧網走第4学区」の紋別高校、雄武高校、滝上高校を含めると、そこに約 8 割の生徒が進学する。2割が「学区外」である。小さいとは言えない変動があるが、変動幅は村に比べるとはるかに小さい。地元に高校があるかどうかは、進路に大きな影響を与える。

図表 26　西興部中学校卒業生の年度別の進路

		高校						高専	計
		旧上川第五学区	旧網走第四学区 興部高校・紋別高校	旧網走第四学区 雄武高校・滝上高校	旧網走第三学区	旧網走第一学区	左以外の学区		
		通学圏		通学圏外					
2009年度進学者	度数(人)	2	1	0	0	0	0	0	3
	内訳(%)	67	33	0	0	0	0	0	100
2010年度進学者	度数(人)	5	5	2	1	0	0	0	13
	内訳(%)	38	38	15	8	0	0	0	100
2011年度進学者	度数(人)	2	1	2	0	1	0	0	6
	内訳(%)	33	17	33	0	17	0	0	100
2012年度進学者	度数(人)	1	3	2	2	0	3	0	11
	内訳(%)	9	27	18	18	0	27	0	100
2013年度進学者	度数(人)	0	4	0	0	2	2	0	8
	内訳(%)	0	50	0	0	25	25	0	100
2014年度進学者	度数(人)	1	6	0	1	1	0	0	9
	内訳(%)	11	67	0	11	11	0	0	100
2015年度進学者	度数(人)	1	2	1	0	0	1	0	5
	内訳(%)	20	40	20	0	0	20	0	100
2016年度進学者	度数(人)	2	4	0	1	0	2	3	12
	内訳(%)	17	33	0	8	0	17	25	100
8年分累計	度数(人)	14	26	7	5	4	8	3	67
	内訳(%)	21	39	10	7	6	12	4	100

※ 高校生の通学交通費・寮下宿等への村からの補助に関する資料から作成。平成21・22年度についてはそれぞれ平成23年度3年生・平成24年度2年生をもって進学者と考えた。また、特別支援学校高等部に進学した生徒については割愛した。
※ 通学圏ではあっても、現実には部活等や家庭の状況等により寮・下宿の場合や親戚宅へ寄宿する場合がある。
※ 旧上川第五学区に所属する高校は名寄高校、名寄産業高校、下川商業高校である。専門高校は後2者である。同様に旧網走第四学区は興部高校、紋別高校、雄武高校、滝上高校である。紋別高校には専門学科が付設されている。このうち前二者は通学区域と考えた。旧網走第三学区は遠軽高校、旧網走第一学区は北見柏陽高校。旧上川第五学区・現オホーツク学区外区外は旭川西高校、稚内高校、札幌南高校、室蘭栄高校、苫小牧中央高校、美唄聖華高校、小樽水産高校。ここまでで専門高校は美唄聖華高校、小樽水産高校である。高専は旭川高専、釧路高専である。

さらに検討しなければならない問題はこの先にある。中学生にとって身近な将来である高校進学においてさえ、地元（実家）との距離、あるいは距離の取り方を考えなければならないことである。そしてこの地元との距離の取り方は、「村アイデンティティ」に小さくない影響を与える。

ところで「村アイデンティティ」は、前章で村の「良いところ」と「良くないところ」

の対比構造として検討した。この両者のバランスは、年度で程度に違いはあったが、後者に傾いていた。村を離れる中学３年生と残る中学生では、「村アイデンティティ」に違いがあるのだろうか。違いがあるとしてその関係は、「村を離れる」中学３年生の「村アイデンティティ」が低く（村に対する評価が低く）、「村に残る」中学３年生のそれは高いのだろうか。すなわち、順接に接合するのだろうか。

ところで、平均的には通学圏（「旧網走第４学区」の一部と「旧上川第５学区」の一部）に約 6 割が進学し、通学圏外に約 4 割が進学したと説明した。本報告書で分析の対象としている 2013 年度の中学３年生は（2014 年度進学）は 77.8%が通学圏に進学し、2015 年度（2016 年度進学）の中学３年生は 50.0%が通学圏に進学した。平均を挟んで、2013 年度（2014 年度進学）は通学圏進学者の割合が高く、2015 年度（2016 年度進学）は通学圏進学者の割合が低い。このことは、「村アイデンティティ」とはどのような関係にあるのだろうか。

（２）卒業後の進路と「村評価」の関係

「村評価」（三段階区分）と中学校卒業後の進路の関係をみておきたい。そのために調査が可能であった中学３年生に限定して分析を行う。両年度共に１人違う。2013 年度の場合は、調査時点で北海道を離れる見通しを語っていたため図表に入れ、通学圏外に数字を計上してある。2015 年度の場合は、１人が調査できなかったので進学者から１人減で図表に計上している。また、通学圏進学の場合は高校の具体的な名称を掲げて図表を作成した。通学圏で実際に進学した高校は、最も近い興部高校、紋別高校（この二つは「旧網走第４学区」）と名寄高校（「旧上川第５学区」）である。それ以外は通学圏外としてひとまとめとした。まず、2013 年度の村の中学３年生を分析する。それが図表 27 である。

図表 27　2013 年度中学３年生の「村評価」別の卒業後の進路

		興部高校	紋別高校	名寄高校	通学圏外	計
「好き」(n=3)	度数(人)	1	1	0	1	3
	内訳(%)	33	33	0	33	100
「半々」(n=4)	度数(人)	1	0	1	2	4
	内訳(%)	25	0	25	50	100
「嫌い」(n=3)	度数(人)	3	0	0	0	3
	内訳(%)	100	0	0	0	100
計	度数(人)	5	1	1	3	10
	内訳(%)	50	10	10	30	100

※　通学圏外に進学した1人の学科は不明である。残り9人は全員普通科進学である。

「好き」と答えた３人のうち、興部高校へ１人、紋別高校へ１人、通学圏外へ１人が進

学した。「半々」と答えた４人のうち、興部高校へ１人、名寄高校へ１人、通学圏外へ２人が進学した。そして「嫌い」と答えた 3 人全員が興部高校へ進学した。そして進学と同時に離村した 1 名を除くと全ての中学３年生は普通科への進学であった。このことは、何を意味しているのだろうか。

高校への進学は、将来という長期間の視野の一部であることを考慮すると、この図表の解釈はそれほど意味をもたないのかもしれない（「高校は高校。その後は別」）。しかし、「嫌い」と答えた 3 人全員が興部高校に進学したこと、その比率が「好き」、「半々」に比べて高いことは一考の余地があるだろう。それに比べると、「好き」と答えた３人のうち２人が興部高校と紋別高校に進学したことは論理的に思えるし、「半々」と答えた４人が通学圏と通学圏外で 50%、50%となったのも論理的に思える。それとの比較で考えると、「嫌い」であるのに地元の高校に進学するということを「矛盾」として理解しても良いかもしれない。しかし、ここでは別の解釈の可能性を示唆したい。それは、2013 年度の中学３年生の場合の「嫌い」の核にあった「『都市』にあるはずのものがない」というある種の疎外感は、進路が地元であるからこそ、離れることができないからこそ、募っているという可能性である。この 3 人は、「『都市』にあるはずのものがない」を構成する「要素」を、村の「良くないところ」で答えていた。しかし、まだこの推理が正しいかどうかはわからない。2015 年度の中学３年生ではどうだろうか。図表 28 がそれをまとめたものである。

図表 28　2015 年度中学３年生の「村評価」別の卒業後の進路

		興部高校	紋別高校	名寄高校	通学圏外(高専含)	計
「好き」(n＝8)	度数(人)	1	0	1	6	8
	内訳(%)	13	0	13	75	100
「半々」(n＝2)	度数(人)	1	1	0	0	2
	内訳(%)	50	50	0	0	100
「嫌い」(n＝1)	度数(人)	0	0	1	0	1
	内訳(%)	0	0	100	0	100
計	度数(人)	2	1	2	6	11
	内訳(%)	18	9	18	55	100

※ この11人の中で普通科が6名、専門学科が紋別高校総合ビジネス科、通学圏外の高校に1人、高専の3人の計5人である。

「好き」と答えた８人のうち、興部高校へ１人、名寄高校へ１人、通学圏外の高校等へ６人が進学した。この６人のうち専門学科・高専が４人であった。この点は注目に値するだろう。普通科進学は高校後も見越した進路決定という意味では「モラトリアム」的な意味合いが強い。紋別高校には専門学科（「総合ビジネス科」と「電子機械科」）も付設されているが、普通科主体である。興部高校、名寄高校は普通科のみの高校であり、いわゆる「進路多様校」である。４年制大学に進学することを決意して入学するわけではない。このよ

うな意味で、専門学科・高専進学が 4 人いたということは、進路意識が明確であった中学３年生が「好き」と答えたとも考えられるのである。「半々」と答えた２人のうち、興部高校へ１人、紋別高校（専門学科）へ１人が進学した。「嫌い」と答えた１人は名寄高校へ進学した。2015 年度は、2013 年度とは逆に、「好き」と答えた中学３年生の多くが通学圏外、しかも専門学科・専門学校へ進学した。2013 年度の中学３年生と同じく「矛盾」として理解することもできる。しかし、同様に別の解釈の可能性を示唆できる。それは、通学圏外へ進学する（村を離れる）からこそ、「『都市』にあるはずのものがない」というある種の疎外感から自由であり、「好き」だと思えるのではないか、というものだ。また、進路意識が明確であった中学３年生が「好き」と答えていた。このような意味では、専門を選び取り、村を離れる予定の中学３年生にとって、村は「『未来』の思い出の場所」である。言わば「思い出」の「先取り」をしているという解釈である。

このように解釈できるなら、2013 年度と 2015 年度の中学３年生のうち多くが、「好き」と「嫌い」で分かれるが、進学後の高校生活の先取りする形で、通学圏外に進学する中学３年生は村を「未来の思い出の場所」）として「懐かしみ」、通学圏に進学する中学３年生（特に最寄りの高校）は村を「ずっと続く現在」として「嫌悪」していると理解できる。

ひとまず以上のような統合的な解釈が可能である。さらに、この解釈を進めると、「村評価」と進路の関係が変わる可能性について二つの推論（関連する問）を提出できる。

第１に、村が「好き」であれ、「嫌い」であれ（もちろん「半々」も含めて）、消費社会の格差構造から生まれる疎外感は強く貫いているが、この疎外感は村から「離れる」（時期や期間、そしてどのような形で、という問題はあるが）ことが可能であれば軽減するような性質のものであるのかどうかを検討しなければならない[40]。「離れる」ことができるなら、疎外感は軽減するのだろうか。すなわち、「可愛い子には旅をさせよ」という諺を借りるなら、「旅をした子」は「故郷をふり返るように変わる」のだろうか、ということである。さらに、この軽減の「歩留り」はどれぐらいだろうか。近年の都市生活の質の変化（悪化、特に子育て環境のそれ）は、「歩留り」とどのように関連していくのだろうか。

第２に、「思い出の先取り」が「村評価」に大きな影響を与えるのであれば、村固有の「良さ」（評価）そのものの度合いは大きくない、あるいは差し引く必要があるかもしれないという可能性を検討する必要がある。「先取り」効果が 2015 年度の中学３年生の「村評価」を高めていたという可能性の検討である。

さらに、もっと長期間に渡る視野で村との関係をどのように考えているのかを、「村評価」の観点から検討してみたい。

（３）「将来の居住地志向」と「村評価」の関係

中学３年生に、「将来、村に残るのかどうか」を質問した。回答はその内容から、「戻っ

40 報告書第２部の「働く『若き担い手』」における分析の焦点になる。

てきたい」、「その時次第」、「戻ってこない」に整理できた。これを将来の居住地への志向（以下、「将来の居住地志向」とする）として考えることにする。これを利用して、「村評価」と「将来の居住地志向」の関係を検討する。図表 29 は、2013 年度の中学３年生の両者の関係をまとめたものである。

図表 29　2013 年度中学３年生の「村評価」別の「将来の居住地志向」

		「戻ってきたい」	「その時次第」	「戻ってこない」	合計
「好き」(n=3)	度数(人)	1	1	1	3
	内訳(%)	33	33	33	100
「半々」(n=4)	度数(人)	1	0	3	4
	内訳(%)	25	0	75	100
「嫌い」(n=3)	度数(人)	0	0	3	3
	内訳(%)	0	0	100	100
計	度数(人)	2	1	7	10
	内訳(%)	20	10	70	100

〔「戻ってきたい」の理由〕
・(村は)落ち着いている。
・(実)家がある。

〔「その時次第」の理由〕
・未来にできる家族と相談して行って良いになれば戻りたい。

〔戻ってこない」の理由〕
・遊ぶ場所が無い。
・働く場所が無い。
・福祉や介護しか働く場所が無い。
・近代化すれば。ショッピングモールがあればもどろうと思う。
・都会が便利。田舎は不便。
・不便。

「村評価」（「好き」、「半々」、「嫌い」）別に、「将来の居住地志向」（「村に戻ってきたい」、「その時次第」、「戻ってこない」）をまとめた。図表の下部には、それぞれの「将来の居住地志向」を選択した理由のなかで、核心的な部分を抜き出して掲げた。

まず、全体を確認する。「戻ってきたい」が２人（20%）、「その時次第」が１人（10%）、「戻ってこない」が７人（70%）である。大半が「戻ってこない」である。

ところで同じオホーツク圏の北見市が市内の中高生約 2,000 人を対象に行った「まちづくりアンケート」で同じ趣旨の質問をしている。その結果が 2017 年９月２日の北海道新聞に掲載されていた。それを紹介しておく。北見市内の中高生は、「市外へ出たい」が 42.1%、「市内に住み続けたい」が 18.7%、「一度市外へ出て、いずれ帰ってきたい」18.1%、「分からない」が 20.6%、そして「無回答」が 0.4%であった。これを比較のひとつの素材としてみたい。北見市の調査では高校生も混じっており、また分類のカテゴリが違うため正確な評価ではないが、考察の一助とはなるだろう。

2013 年度の中学３年生では「残りたい」はなかった。北見市の調査では「市内に住み続けたい」が 18.7%である。同様に続ける。「戻ってきたい」は、「一度市外へ出て、いずれ帰ってきたい」が該当すると思われるが、2013 年度の中学３年生では 20%、北見市では 18.1%である。「その時次第」は対応するものがない。「分からない」でも良いかと思うが比

較は止めておく。そして「戻ってこない」は、「市外へ出たい」が該当すると思われるが、2013 年度の中学３年生では 70%、北見市では 42.1%である。おおざっぱにいって、「住み続けたい」が低く（マイナス 18.7%）、「戻ってこない」が高い（プラス 27.9%）。

次に、「村評価」別に「将来の居住地志向」を確認する。「好き」では、「戻ってきたい」が１人、「その時次第」が１人、「戻ってこない」が１人である。選択の幅が広くなっている。「半々」では、「戻ってきたい」が１人、「戻ってこない」が３人で、判断は分かれるが、後者が優勢である。「嫌い」では、全員（3 人）「戻ってこない」と答えている。

すなわち、「将来の居住地志向」は「村評価」を反映している。しかし、「好き」でさえ「残りたい」は０人である。「戻ってきたい」から「戻ってこない」で分散する形で影響している。すなわち、全体の基調は「戻ってこない」で、「村評価」が「好き」や「半々」の場合にそれが緩められている、と言える。

さらにその判断になった理由として述べたことも、村の「良いところ」と「良くないところ」にだいたい重なっている。「戻ってきたい」の場合は、「(村は）落ち着いている」が挙げられている。これに実家への配慮が加わる。それに対して「戻ってこない」の場合は、「遊ぶ場所が無い」、「ショッピングモールがあれば」、「都会が便利」となり、村を「不便」とみている。これに「働く場所がない」と働こうと思った場合に職種が限定されること（「福祉や介護しか働く場所が無い」）が挙げられている。

すなわち、「戻ってきたい」と「戻らない」の基底には、それぞれ「実家への配慮」と「仕事がない」がある。それに村の「良いところ」と「良くないところ」で挙げられたような評価が重なっている。「将来の居住地志向」は、このような二層構造となっていると考えられる。

確認の意味で、進路別に「将来の居住地志向」を分類した図表 30 もみておきたい。

図表 30　2013 年度中学３年生の進路別の「将来の居住地志向」

		「戻ってきたい」	「その時次第」	「戻ってこない」	合計
興部高校（n＝5）	度数(人)	1	0	4	5
	内訳(%)	20	0	80	100
紋別高校（n＝1）	度数(人)	1	0	0	1
	内訳(%)	100	0	0	100
名寄高校（n＝1）	度数(人)	0	0	1	1
	内訳(%)	0	0	100	100
通学圏外進学(n＝3)	度数(人)	0	1	2	3
	内訳(%)	0	33	67	100
計	度数(人)	2	1	7	10
	内訳(%)	20	10	70	100

一目瞭然の結果となった。通学圏の高校に進学するのかどうかは、「将来の居住地志向」には重ならない。たとえ興部高校に進学したとしても、「村評価」を機軸に、将来の居住地

の選択はなされる。そして「戻ってきたい」と考えることができたのは、「村評価」が「好き」で通学圏の高校（興部高校と紋別高校）に進学する希望を持った中学３年生（２人）だけである。二つ条件がある。その両方をクリアした場合に「戻ってきたい」と考えることができる。

図表 31 は、2015 年度の中学３年生に「村評価」別に、「将来の居住地志向」について質問した結果である。その理由の表記についても同様である。

図表 31　2015 年度中学３年生の進路別の「将来の居住地志向」

		「戻ってきたい」	「その時次第」	「戻ってこない」	合計
「好き」(n=8)	度数(人)	5	0	3	8
	内訳(%)	63	0	38	100
「半々」(n=2)	度数(人)	0	0	2	2
	内訳(%)	0	0	100	100
「嫌い」(n=1)	度数(人)	0	0	1	1
	内訳(%)	0	0	100	100
計	度数(人)	5	0	6	11
	内訳(%)	45	0	55	100

〔「戻ってきたい」の理由〕
・村に恩返ししたい。
・1回は大きな都市に行きたい。(村は)落ち着く。
・(村には)仕事がない。
・村は住み心地がいい。
・一度は都会に出たい。

〔「戻ってこない」の理由〕
・ずっと出たいと思っている。
・(村には)仕事がない。
・(村には)仕事がない。
・(村には)仕事が無い。
・戻らなくても(家族は)大丈夫。
・(家族のことで)戻る必要がない。

まず、全体を確認する。「戻ってきたい」が５人、「その時次第」が０人、「戻ってこない」が６人である。判断が二つに分かれる結果となった。やはりここでも学年の違いは大きい。

次に、「村評価」別に「将来の居住地志向」を確認する。「好き」では、「戻ってきたい」が５人、「戻ってこない」が３人である。二つに判断が分かれ、「戻ってきたい」が多い。「半々」では、「戻ってこない」が２人である。「嫌い」では、「戻ってこない」が１人である。すなわち、「好き」の場合は分かれるが、「半々」や「嫌い」は「戻ってこない」と考えている。すっきりとしている。

「村評価」によって「将来の居住地志向」が分化するという傾向は、2013 年度の中学３年生と同様である。「将来の居住地志向」は、「村評価」が反映している。しかし、「好き」でも「残りたい」は０人である。「戻ってきたい」と「戻ってこない」に分化する形で影響している点も同様だ。2013 年度と 2015 年度で異なるのは、全体の基調が 2013 年度のように「戻ってこない」に傾かず、「戻ってきたい」で厚いことにある。理由も合わせて検討しよう。

「戻ってきたい」理由に村の「良いところ」は重なっている。「(村は) 落ち着く」や「村は住み心地がいい」がそれである。「一回は大きな都市に行きたい」や「一度は都会に出た

い」は、「残りたい」という判断にはならない理由を答えたものと考えられる。「(村には)仕事がない」は、「戻ってきたい」気持ちはあるのだが、ということで答えてくれた理由であろう。そして「村に恩返ししたい」が挙げられている。この理由は非常に興味深い。他の中学3年生が、自分が将来生きる上での条件の良し悪し、あるいは適切性から評価しているのに対して、逆に自分が村から負ったもの(「恩」)を前提に、何ができることを「返す」という観点で考えていることである。自分の村へ関わってゆく(コミットする)というスタンスがここに表明されている。

ところで「戻ってこない」理由には、「良くないところ」で挙げた理由は重ならない。「良くないところ」で最多の理由となった「不便」(4 人)や、次に多い「自然が嫌い」(3 人)もない。「戻ってこない」理由は、「仕事がない」である。そして実家への配慮は、逆の使い方(「戻ってこない」ことが可能になる条件として)がされている。「ずっと出たいと思っている」は長年の決意の表明とでもいう理由である。

すなわち、「戻ってきたい」と「戻らない」の基底には、それぞれ「実家への配慮」と「仕事がない」がある。それは 2013 年度の中学3年生と同様である。しかし、「実家への配慮」は「戻ってきたい」の理由とはならず、「戻らない」でも良い理由として語られている。全体を強く貫いているのは「仕事がない」だけとなる。この問題がクリアされれば、「村評価」が「将来の居住地志向」に重なる可能性が高くなることも考えられる。また、「戻ってきたい」の理由として挙げられた「一度(一回)は都会に出たい」(2 人のみ)も、全体を貫く基調的な態度と考えられる。

2013 年度の中学3年生が「村評価」を直接的に「将来の居住地志向」に重ねていたのと比較するなら、2015 年度はそれを免れているがゆえに、より本質的な問題を提起していると言えるだろう。すなわち、村にとっては「仕事をどう生みだすか」という課題と中学3年生にとっての「経験の幅を拡げたいという希望」をどのように受け止め、どのように「かなえるか」という課題である。これに対する答は、「即、無理」と回答できた昔はともかく、現在ではそれほど確定的なものではない。違う答を出そうとしている小規模自治体も多い[41]。

確認の意味で、進路別に「将来の居住地志向」を分類した次頁の図表 32 をみておく。

一目瞭然の結果となった。通学圏に進学するのかどうかは、「将来の居住地志向」には重ならない。興部高校に進学したとしても、「村評価」を機軸に、将来の居住地の選択はなされる。そして興味深いところは、通学圏外進学だとしても、「戻ってきたい」と考える中学

---

41 自治体問題研究所編(全国小さくても輝く自治体フォーラムの会)『小さい自治体輝く自治体』(自治体研究社、2014 年)を参照。西興部村の紹介も載ったこの書籍では、「人口減少社会」に従来的な仕事作り政策(企業誘致)ではない「地域資源を活かした産業振興」や「地域に根ざした経済活動」を作り出し、「地方で生活できる基盤を構築し、自然豊かな地域社会を次世代に引き継ぐこと」が主張されている(3 頁)。後者の問題(経験の幅を拡げたいという希望)については後述するが、都市(経験が豊か)ー地方(経験が乏しい)という考え方はそもそも平板であり、古い。また、経験の質が問われていない点も指摘できる。現在の中学生にとって家庭と学校における経験以外は、消費社会・文化の経験が主となっている。しかし、社会的な経験が消費社会・文化経験に限定されている現状を批判的に考えるなら、村でも経験の幅や質を豊富化できる可能性はいくらでもあるはずである。このことを構想することで、2015 年度の中学3年生の提起している二つの問題に応えることができる可能性は、大いにとは言い難いが、ある。

３年生が半数いたことである。

図表 32　2015 年度中学３年生の進路別の「将来の居住地志向」

		「戻ってきたい」	「その時次第」	「戻ってこない」	合計
興部高校（n＝2）	度数(人)	1	0	1	2
	内訳(%)	50	0	50	100
紋別高校（n＝1）	度数(人)	0	0	1	1
	内訳(%)	0	0	100	100
名寄高校（n＝1）	度数(人)	1	0	1	2
	内訳(%)	50	0	50	100
通学圏外進学(n＝3)	度数(人)	3	0	3	6
	内訳(%)	50	0	50	100
計	度数(人)	5	0	6	11
	内訳(%)	45	0	55	100

ここに前述した「戻ってきたい」理由の考察を思い出していただきたい。「一度は都会に出たい」という気持ちはあるが、「(村は）落ち着く」や「村は住み心地がいい」のであった。「村に恩返ししたい」も挙げられていた。すなわち、村の「良いところ」の検討で示唆したように、生活実感としての「生活の穏やかさ」はそのような言葉として語られることは多くはなかった（興部町の中学３年生は言語化できていた）が、十分に手応えのある価値として中学３年生の「将来の居住地志向」に影響を与えることができているのである。

このように考えると、2013 年度の中学３年生が「生活の穏やかさ」を感じることがなく、2015 年度の中学３年生が感じることができたのはなぜか、ということが疑問となる。続けて、この「将来の居住地志向」が、職業志向とどのような関係にあるのかについて検討してみたい。

（４）「将来の居住地志向」と職業志向の関係

ここでは「村評価」の強い影響にあった「将来の居住地志向」を基準にして、職業志向との関係みる。将来的な展望という点で、「将来の居住地志向」と職業志向が同じ時間の層に属していると考えるからである。

まず、前提として「村評価」と「将来の居住地志向」について概略を確認しておく。2013 年度の中学３年生は、大半が「戻ってこない」であった。そして、「好き」と「半々」では、「戻ってきたい」が 2 人いた。また「半々」で、「その時次第」が 1 人いた。それ以外（7 人）は「戻ってこない」と答えていた。

次頁の図表 33 が「将来の居住地志向」と職業志向の関係をまとめたものである。職業志向に書かれた内容は、インタビューへの答をほぼそのまま記載している。

職業志向が明確なものは、「戻ってきたい」の「警察官」、「その時次第」の「ミュージシ

ャン」「ラーメン屋」、そして「戻ってこない」の「自衛隊」である。それ以外では、進学という意味でははっきりしているが職業志向という点ではモラトリアム（決断保留）の意味をもつと思われる、「進学」や「大学に行きたい」、そして「就職」である。そして、「うーん」と黙って答えなかった中学３年生が２人いた。

図表 33　2013 年度中学３年生の「将来の居住地志向」と職業志向

将来の居住地志向	職業志向
戻ってきたい	警察官。
戻ってきたい	実家を継ぐのは無理。成績もよくないから、就職。
その時次第	ミュージシャンになりたい。あとは全然違って、ラーメン屋さん。
戻ってこない	自衛隊。
戻ってこない	(一応)進学希望。
戻ってこない	大学には行きたい。
戻ってこない	大学には入ろうと思うけど、なりない職業は何も考えてない。
戻ってこない	大学には入りたい。教育大とか。(先生希望)
戻ってこない	N.A.
戻ってこない	N.A.

このような職業志向は、必然的にどこに住むのかと関係をもっているはずだ。「将来の居住地志向」毎にみると、「戻ってきたい」では多少関連づけられているように思える。「その時次第」ではそれがぼんやりし、「戻ってこない」では例外的に「自衛隊」が挙げられるが、「進学」や「大学に行きたい」とは思っているものの、そこまでが将来展望の限界であるように思える。すなわち、「戻ってこない」ということははっきりしているものの、それ以外のことは実はあまりはっきりしていないのではないか、と推測できる。将来という不確かなもの全体のなかで、居住地志向のみが選択的に決定され、それ以外は不確かなまま「保留」されていると考えられる。この将来志向におけるアンバランスな決定は、非常に興味深い。ところで、2015 年度の中学３年生の場合はどうなっているのだろうか。

次頁の図表 34 は 2015 年度の中学３年生の「将来の居住地志向」と職業志向の関係をまとめたものである。

記述の仕方で一点変更がある。職業志向が明確だったので内容を区別した点である。そのため「職業志望の内容」欄を加え、「職業志望の内容」別に並べた。

まず、その前に「村評価」と「将来の居住地志向」について概略を確認しておく。「戻ってきたい」が５人、「戻ってこない」が６人である。「戻ってきたい」の５人は「村評価」で「好き」と答えた場合のみであった。

ほとんどの中学３年生の職業志向が明確である。職業に絞り込むという意味で曖昧なのは、「仕事はどうでもよい」と「安定した職であれば」の２人に、職業重視ではあるがどのような職業であるかは絞り込まれていない１人（「好きな職につけたらよい。職業を一番に考えたい」）を合わせた３人であろう。中学３年生時点での職業選択が難しいことを前提に、別の原理（安定した収入と安定した職、具体的な職業が未決）を考慮した上での発言であ

る。同時に「なりたいものはかなわない」から、収入に関心が移っている中学３年生もいる。これらから全員が将来働くところまでの視野をもっていると言いうる。より内容に則して検討してみよう。

図表 34　2015 年度中学３年生の職業志向別と「将来の居住地志向」

職業志望の内容	職業志向	将来の居住地志向
現業的職業志望	自衛隊。人を守ったり助けたりするのを目標にしている。	戻ってきたい
	保育士。	戻ってきたい
専門的職業志望	医療関係の仕事に就きたい。	戻ってきたい
	機械、エネルギー関係の仕事。	戻ってこない
	理数系が好きだからそれ関係の仕事をしてみたいです。	戻ってこない
	技術を生かせる警察内の部署とかに就きたいなと思っています。	戻ってこない
	アニメの声優。	戻ってこない
	開発などの理科関係の仕事。	戻ってこない
職業未定	好きな職につけたらよい。職業を一番に考えたい。	戻ってきたい
こだわりなし	ある程度安定した収入を得られれば仕事はどうでもいい。なりたいものはかなわない。	戻ってきたい
	いやあ特に、安定した職であれば。	戻ってこない

「やってみたいこと」（「好き」も重なる）が選択の中心原理であると考えられる。そして、具体的な仕事をピンポイントで指摘しているのは、「自衛隊」、「保育士」、「警察内の部署」、「アニメの声優」の 4 人である。前三者が現実的であるとすれば、後一者は多少「夢想的」である。しかし答えたのが中学３年生であることを考えれば、そのように非難するのはあたらないだろう。また「アニメの声優」は迷うところであるが、専門職に近いところの職業を発想しているとも言えそうだ。さらに、自分の興味・志向性に得意な教科を考慮して職業を領域として答えたのが、「医療関係の仕事」、「機械、エネルギー関係の仕事」、「理数系が好きだからそれ関係の仕事をしてみたい」、「技術を活かせる警察内の部署」（これはピンポイントの職業選択と重複する）、「開発などの理科関係の仕事」の 5 人であると思われる。中学３年生の考えうる限界に近い進路の絞り込みをしていると評価できる。これが、具体的な高校（その先の大学）・高専の選択に結びついていることは言うまでもない。また専門職のニュアンスを持っていることも指摘できる。最後に、自分の興味や「好き」を越えて、生き方と重ねられた「人を守ったり助けたりする」から職業を考えた事例（「自衛隊」）が目を引く。

「将来の居住地志向」と職業志向の関連は、以下の通りである。「現業的職業志望」は全員（とは言っても２人）が「戻ってきたい」となっている。「専門的職業志望」は１人が「戻ってきたい」で、残る 5 人が「戻ってこない」である。やはり、大学進学からそれ以降の専門を意識した職業移行を考えるなら、戻ってくることはない（難しい）だろうと予想し、それに応じた「将来の居住地志向」を形成しているわけである。その意味で、「医療関係の仕事」を志望しつつ、「戻ってきたい」と答えた中学３年生がいることはすばらしいことであると考える。そして「職業未定」の 1 人も職業志向との矛盾をはらみつつも「戻ってき

たい」と考えている。他方で、「こだわりなし」の2人は判断が分かれた。

逆方向から説明しよう。「戻ってきたい」は村でも就職可能な職業を念頭において答えており、「戻ってこない」は現状の村では就職不可能な職業を念頭において答えていると言えるだろう[42]。「こだわりなし」で「戻ってこない」という判断をする1人は将来を決めかねており、2013年度の中学3年に近い在り方となっていると思われる。

職業志向は、それが現実的なものであれば「将来の居住地志向」とひとつながりのものとして考えられているはずである。だが、2013年度の中学3年生の場合はそうではなかった。しかし、2015年度の中学3年生の場合、その通りであると考えられる。将来という不確かなもの全体のなかで、「将来の居住地志向」と職業志向は「保留」されることない。職業志向と連動したものとして形作られている。

将来について中学3年生がどのように考えているのかの最後に、将来の生活志向について検討してみよう。

（5）「将来生活志向」の構造と特徴

将来の生活に対して中学3年生がどのようなイメージをもっているのかを聞いた（以下、「将来生活志向」）。答は、様々なことを含むものであった。そのため、「村評価」の自由回答分析で使用した方法をここでも採用する。ひとりの話の内容が複合的な要素から出来上がっていることに注目し、それを区別する形で（複数回答的に）数え上げ、さらに類似性の観点から、「要素」、「ラベル」、「カテゴリ」の順で抽象度を上げる形でまとめる。「要素」は、ほぼ「ナマ」の発言に近い。それが類似しているものを「ラベル」としてまとめ、さらに「ラベル」が類似している場合を「カテゴリ」とした。「ラベル」が作れなかった場合もある。そのため、「要素」⇒「ラベル」⇒「カテゴリ」と三段階で抽象化されたものと、「要素」⇒「カテゴリ」の二段階で抽象化されたものが混在している。2013年度の中学3年生の「将来生活志向」を整理したのが、次頁の図表35である。

驚くことに最多の回答は、「普通の生活がしたい」であった。とにかく「普通」という言葉が頻発した。「ラベル」では「普通志向」と命名した（70%）。これと近い意味であると考えられたのが、「何事もない生活」や「危なげのない生活」である。同様に、「安全・安心

---

42 筆者のこのような判断は、今後の日本のエネルギー政策次第では村（地方）の雇用構造に変化があると予想しているからである。具体的には、「エネルギー自立」による「地域づくり」の振興は、自然を活かした小規模のエネルギー事業体を生みだすことになるだろう。たとえば、隣町の下川町は既に手をつけている。村においても「バイオマス発電」の取り組みは緒についた。これがより確かなものになるためには、現在の日本のエネルギー需給構造が、「地産地消型」に再編成されることが重要になる。国家レベルでは、いずれエネルギー資源の大量購入の限界が自給を課題化するだろう。それは、地方自治体レベルの「エネルギー自立」とエネルギー購入を通じて域外への資金の流出を抑え、域内再投資・循環を目指す取り組みと結びつく（下川町『エネルギー自立と地域創造（づくり）』2014年を参照）。村については、「西興部村バイオマス産業構想」（URLは以下）と「乳牛のふん尿処理、西興部で村営プラント着工　バイオガスで発電、売電」（2017年9月28日北海道新聞記事）を参照。
http://www.maff.go.jp/j/shokusan/biomass/attach/pdf/b_kousou_all-36.pdf

志向」（「ラベル」）とした（20%）。「普通」の例のように「結婚したい」や「仕事がある」が掲げられているものは、「標準的ライフコース志向」（「ラベル」）とした（20%）。「家族と幸福」や「生活を大事にする」は「私生活中心志向」（「ラベル」）とした（20%）。そしてこれらをまとめた「カテゴリ」として、「『人並み』生活志向」と命名した（130%）。2013 年度の中学３年生がなんとなく抱いている将来のぼんやりとしたイメージが表現されていると考えることができるだろう。ここまでで 13 件となっている。2013 年度の中学３年の将来生活のイメージの核はここにある。

図表 35　2013 年度中学３年生の「将来生活志向」

将来生活志向				
カテゴリ	ラベル	要素	度数(件)	内訳(%)
「人並み」生活志向	普通志向	普通の生活がしたい	7	70
	安全・安心志向	何事もない生活	1	10
		危なげのない生活	1	10
	標準的ライフコース志向	結婚がしたい	1	10
		仕事がある	1	10
	私生活中心志向	家族と幸福に	1	10
		生活を大事にする	1	10
		小計	13	130
都市居住志向		都市で暮らす	1	10
		東京近辺に暮らす	1	10
		札幌に住みたい	1	10
		小計	3	30
分相応志向		欲がない	1	10
		野心がない	1	10
		小計	2	20
趣味的生活志向		本だけをおいた自分の部屋が欲しい	1	10
		小計	1	10
		複数回答総計	19	190

これ以外の「カテゴリ」を挙げると、「都市居住志向」と「分相応志向」、そして「趣味的生活志向」となる。「都市居住志向」（「カテゴリ」）の「要素」は、「都市で暮らす」、「東京近辺に暮らす」、「札幌に住みたい」であった（30%）。「分相応志向」（「カテゴリ」）の「要素」は、「欲がない」、「野心がない」であった（20%）。これは「『人並み』生活志向」（「カテゴリ」）に近い内容であると考えられる。「本だけを置いた自分の部屋が欲しい」をどのように考えれば良いのかは判断に苦しんだが、自分の生活趣味を将来の生活において実現したいと考えていると受け取って、「趣味的生活志向」（「カテゴリ」）とした（10%）。しかし、この趣味は通常言うような趣味、たとえば「釣り」のようなものではない。「趣味的」な生活の意味で名付けている。

前述したように、「将来生活志向」全体を強く貫いているのは「『人並み』生活志向」（「カテゴリ」）である。「夢をみない」ことと言い換えることもできるが、禁欲的な意味ではな

く、ぼんやりとした消極的な生活のイメージである。それを「普通」という言葉で言い表していると考えることができるだろう。そしてこの「夢をみない」というスタンスのなかでの数少ない「夢」が、「都市居住志向」(「カテゴリ」)と「趣味的生活志向」(「カテゴリ」)と考えられる。その意味で、手が届くものはこれしかないと思い定めている可能性もあるだろう。

職業志向の分析において、2013年度の中学3年は将来という不確かなもの全体のなかで、居住地志向のみが決定され、それ以外は不確かなまま「保留」されていると指摘した。「将来生活志向」においても、これと同趣旨のことが指摘できる。「将来生活志向」も、不確かなまま「保留」されている。そのため、「夢をみない」、「人並み」に集約できるような具体性に欠けたものとなったのだろう。

2015年度の中学3年の場合はどうであろうか。図表36が2015年度の中学3年の「将来生活志向」をまとめたものである。「要素」、「ラベル」、「カテゴリ」の作成方法は、図表35と同様である。

図表36　2015年度中学3年生の「将来生活志向」

将来生活志向				
カテゴリ	ラベル	要素	度数(件)	内訳(%)
安全・安心・安定生活志向		安定した生活	1	9
		お金に困らない、苦しくない生活	1	9
		平和にくらしたい	1	9
		小計	3	27
家族重視志向	(結婚)家族創出志向	結婚して家族を作る	3	27
	(出生)家族責任志向	家族の近くで暮らす	1	9
		親の介護がしたい	1	9
		小計	5	45
自立生活志向	独身生活志向	独身が良い	1	9
		結婚は無駄。お金がかかる	1	9
	老後自立志向	自分の貯めたお金で老後も満喫したい	1	9
		小計	3	27
マイペース生活志向	のんびり生活志向	のんびりくらしたい	2	18
	バランスある生活	仕事人間にはなりたくない	1	9
		趣味も仕事も大切にしたい	1	9
		小計	4	36
都市居住志向		旭川行って、札幌行って、それで道外出たい	1	9
個人的希望追求志向	趣味的生活志向	ある程度生活できて、服につぎ込めればよい	1	9
	夢追求志向	自分がやりたいことをして何かを得る	1	9
		好きなことをやって好きなように	1	9
		小計	3	27
社会参加志向		人助けがしたい	1	9
		できるだけたくさんの人と関わって過ごす	1	9
		小計	2	18
N.A.			1	9
		複数回答総計	22	200

「カテゴリ」でみても、多岐にわたった豊富な内容をもっていると考えることができる。すなわち、個人毎に個性的な「将来生活志向」への分化が生じている。そして、特定の内容に集約されることなく、分散したものとなっている。

「カテゴリ」で多いものから順に挙げると、「家族重視志向」(45%)、「マイペース生活志向」(36%)、「安全・安心・安定生活志向」(27%)、「個人的希望追求志向」(27%)、「社会参加志向」(18%)、「都市居住志向」(9%) である。2013 年度の中学 3 年生と比べて「都市居住志向」が少ない (9%)。より詳細な比較は次項で行いたい。

ここでの回答は「将来生活志向」に絞られているわけだが、それぞれに具体的なものとなっている。内容に関しては、まず対位的な関係にあると考えられる「カテゴリ」を指摘することが可能であろう。それは、「家族重視志向」(「カテゴリ」) と「自立生活志向」(「カテゴリ」) である。これらは職業志向とカップリングしているのではないかと推理することができる。それを確かめるために図表 37 を作成した。

図表 37　2015 年度中学 3 年の職業志向と「将来生活志向」

職業志望の内容	将来の居住地志向	安全・安心・安定生活生活	家族重視志向		自立生活志向		マイペース生活志向		都市居住志向	個人的希望追求志向		社会参加志向	N.A.
			(結婚)家族創出志向	(出生)家族責任志向	独身生活志向	老後自立志向	のんびり生活志向	バランスある生活志向		趣味的生活志向志向	夢追求志向		
現業的職業志望	戻ってきたい			●				●				●	
	戻ってきたい		●										
専門的職業志望	戻ってきたい										●	●	
	戻ってこない						○						
	戻ってこない												○
	戻ってこない				○	○							
	戻ってこない	○									○		
	戻ってこない		○				○						
職業未定	戻ってきたい	●											
こだわりなし	戻ってきたい				●			●	●	●			
	戻ってこない	○	○	○									

※ 図表中の●と○は回答した中学3年生の該当する将来生活志向の場所に記した。●は「戻ってきたい」、○は「戻ってこない」である。

表側に「職業志望の内容」を配置し、表頭には「将来生活志向」の「カテゴリ」を、「ラベル」がある場合はそれも記述した。また「将来生活志向」は、複数回答のように集計したので、一対一対応とはなっていない。

確かに、職業志望において「現業的職業志望」と「こだわりなし」の場合は「家族重視志向」(「カテゴリ」) を、「専門的職業志望」の場合は「自立生活志向」(「カテゴリ」) を選択しがちであると言えないこともない。しかし、ケース数が少ないため明らかな関係とは言い難い。そして何よりも、「将来の居住地志向」において「戻ってきたい」を選択した 5 人のうち 3 人が「家族重視志向」(「カテゴリ」) であることを考慮しなければならない。つ

まり、「戻ってきたい」と「家族重視志向」(「カテゴリ」)、そして「現業的職業志望」と「こだわりなし」が緩やかなつながりとして選択されているわけである。明らかな関連というよりは、緩やかな関連である。それ以外では、「専門的職業志望」において「夢追求志向」(「カテゴリ」)があることを指摘できる。「安全・安心・安定生活志向」(「カテゴリ」)や「マイペース生活志向」(「カテゴリ」)は職業志望の内容によって決定されないようだ。また、「社会参加志向」(「カテゴリ」)も特定の職業志望に限定されていない。そして「将来の居住地志向」で「戻ってきたい」の5人のうち2人が選択している。この点も注目すべきである。

言い換えると、職業志望の内容は、「将来の居住地志向」の「戻ってきたい」とも関係をもちながら「将来生活志向」の一部と関わりをもっている。しかし、一義的に決定しているわけではない。「専門的職業志望」の中学3年生で「夢追求志向」(「カテゴリ」)が2人いるが、「将来の居住地志向」は「戻ってきたい」と「戻ってこない」に判断は分かれている。また「専門的職業志望」であっても「のんびり生活志向」(「カテゴリ」)の中学3年生が2人おり、仕事人間となることを目指しているわけでもなさそうだ。

さらに二つの年度の「将来生活志向」比較したい。それが図表38である。

図表38　中学3年生の「将来生活志向」の比較

2013年度の中学3年生の将来生活志向			
カテゴリ	ラベル	度数(件)	内訳(%)
「人並み」生活志向	普通志向	7	70
	安全・安心志向	2	20
	標準的ライフコース志向	2	20
	私生活中心志向	2	20
	小計	13	130
都市居住志向		3	30
趣味的生活志向		1	10
分相応志向		2	20
複数回答総計		19	190

2015年度の中学3年生の将来生活志向			
カテゴリ	ラベル	度数(件)	内訳(%)
安全・安心・安定生活志向		3	27
家族重視志向	(結婚)家族創出志向	3	27
	(出生)家族責任志向	2	18
	小計	5	45
自立生活志向	独身生活志向	2	18
	老後自立生活	1	9
	小計	3	27
マイペース生活志向	のんびり生活志向	2	18
	バランスある生活志向	2	18
	小計	4	36
都市居住志向		1	9
趣味的生活志向		1	9
夢追求志向		2	18
社会参加志向		2	18
N.A.		1	9
複数回答総計		22	200

「カテゴリ」の配置は、両年度の類似性を考慮した。また、類似性の観点からは2015年度の中学3年生の「将来生活志向」の一部の「カテゴリ」(「個人的希望追求志向」)を「ラ

ベル」（「趣味的生活志向」と「夢追求志向」）に分化して対比させた方が意味的な関連を取りやすくなるため、図表 36 とは少し変えてある。

内容的には以下の対応関係があると考えられる。

第１に、「広く生活のイメージに関わるもの」である。2013 年度の中学３年生の場合は「『人並み』生活志向」（「カテゴリ」）にまとめることができた。2015 年度の中学３年生の場合は「安全・安心・安定生活志向」（「カテゴリ」）、「家族重視志向」（「カテゴリ」）、「自立生活志向」（「カテゴリ」）、「マイペース生活志向」（「カテゴリ」）に分化している。2013 年度の中学３年生がぼんやりと消極的なものであるのに比べて、2015 年度の中学３年生の「将来生活志向」は個性に応じて分化している。この点が大きく異なる。

第２に、「居住地に関わるもの」で、両年度とも「都市居住志向」である。2013 年度の中学３年生の場合は「カテゴリ」で 2015 年度のそれは「ラベル」である。

第３に、「個人的な生き方に関わると思われるもの」の一部である。両年度の「趣味的生活志向」がそれに相当するだろう。2013 年度の中学３年生の場合は「カテゴリ」、2015 年度の場合は「個人的希望追求志向」（「カテゴリ）の一部を再整理した「ラベル」である。

第４に、両年度で重なるところのない、残りのものである。2013 年度の「分相応志向（「カテゴリ」）、2015 年度の「夢追求志向」（「ラベル」）と「社会参加志向」（「カテゴリ」）である。この部分は大きく異なっているだけでなく、対極的な位置にあると考えられる。

ここまで比較してきたように、「第１」と「第４」は顕著に違う。

まず「第１」の内容に注目したい。2013 年度の中学３年生の「将来生活志向」が「普通」をキーワードとした「『人並み』生活志向」（「カテゴリ」）に総括できるようなものであるとしたなら、2015 年度のそれはより性格のはっきりしたものに分化していたことが指摘できる。何よりも 2015 年度のそれには、「普通」というキーワードが一度も登場しない。このような意味で 2013 年度に頻出する「普通」とは、「将来生活志向」が未分化（「ぼんやり」、あるいは「モラトリアム」）であることの別名ではないだろうか。そしてこの「将来生活志向」の未分化は、ここまで何度も指摘してきたように、不確かな将来全体のなかで自分がどのように生きるかという諸志向におけるアンバランス（村に「戻ってこない」という点だけが鮮明）と関係している。

さらに両年度で全く違う「第４」にも注目したい。2013 年度の中学３年生の「分相応志向」（「カテゴリ」）と 2015 年度の「夢追求志向」（「ラベル」）の対比は、非常に示唆的である。あたかも、「夢追求志向」を諦めたからこそ、「分相応志向」となったのではないかとさえ考えられるからだ。そのように考えるならば、前述した「普通」も自分なりの志向性の「挫折の産物」なのかもしれない。やはり、「将来の居住地志向」において「戻ってこない」でのみはっきりする将来の生き方は、そこでしか主体性を発揮できないことの表現になっているのではないだろうか。そして 2015 年度の中学３年生の「社会参加志向」は、この「夢の追求」が、個人の趣味に完結しない社会的な関わりのなかでこそ育まれることを示唆している。最後に、中学３年生の「夢」について検討しよう。

（6）将来の「夢」の構造と特徴

まず、お詫びをしておかなければならないが、中学３年生への質問は両年度で同じ質問で行われていない。そのために、正確な比較になっていない。2013 年度の中学３年生には「大人になったらしたいこと」を聞いた。他方で 2015 年度の中学３年生には「将来の夢」を聞いた。このニュアンスの差は大きい。しかし将来の自分のトータルなイメージを、「実現しなくても良い」という形で聞いた質問への回答が示唆に富む内容であったため、ここで取り上げたい。図表 39 は、2013 年度の中学３年生の「大人になったらしたいこと」である。表側は「将来の居住地志向」とした。ひとりの発言でも内容は区別して分析したい。

図表 39　2013 年度中学３年生の「将来の居住地志向」と「大人になったらしたいこと」

将来の居住地志向	大人になったらしたいこと
戻ってきたい	車とか。免許をとって車だとか。あと自分の好きなものが買えたりだとか。
戻ってきたい	ないですね。なってみないと分からない。体験してみないと分からないので
その時次第	ミュージシャンになりたいと思っています。聞いてた好きなアーティストのライブに行きたいです。ここだと札幌まで行かないんとないんです。
戻ってこない	自分が稼いだお金で野球を見に行く。
戻ってこない	車運転してみたいとかはあります。車乗ってたらすぐ眠くなっちゃうんですけど、運転してたら眠くならないのかなぁと思うから。あと両親も父と母だけだったら居酒屋行くと片方飲めないので、はやく運転免許取って連れて行ってくれって言ってます。
戻ってこない	友だちとどこか遠くに旅行。道外。ディズニーランドとか行きたい。
戻ってこない	あー。なんか特に考えたことなかったです。
戻ってこない	別に。
戻ってこない	N.A.
戻ってこない	N.A.

「戻ってきたい」の 2 人は、「車」、「自分の好きなものが買える」、「ない」からなる。男子にありがちな回答と「ない」である。「その時次第」の１人は将来の職業希望（「ミュージシャン」）と「ライブにゆきたい」と回答した。「戻ってこない」の 7 人は、「自分が稼いだお金で野球を見に行く」、「車」に関わること、「旅行」で、「特になし」等は 2 人、残る 2 人は回答が無かった。「戻ってきたい」と考えていても、村で「大人になったらしたいこと」が何かあるわけではないのである。「戻ってこない」と固く誓っていても同様である。

「大人になったらしたいこと」という質問は、2013 年度の中学３年生には答えにくいものであったかもしれない。その理由は二つ考えられるだろう。

第１に、2013 年度の中学３年生は、将来全体のなかでの自分のイメージが一部を除いて上手く描けないという説明をした。この線で理解できる。「大人」というイメージもぼんやりしている、という理解である。「車」、「ライブにゆく」、「野球を見に行く」、「旅行」である。将来の職業希望を答えた中学３年生以外は、「お金が自由になる」ことを前提にした消費行動を、現在の自分の延長線上に考えている。「大人」になればできるし、

それを「したい」こととして考えているのである。

第２に、「大人」と「子ども」の働くことも含めた生活や責任・役割が異なるという少なくとも年輩の大人にとって当たり前のことが、現代の中学生・高校生では前提にできない。この線で理解できる。すなわち消費社会における特有の育ちの難しさ（「大人になれない」）があるという研究の結果が当てはまるという理解である。NHK が行った「中学生・高校生の生活と意識調査・2012」において、「早く大人になりたいと思うか」という問に、「そうは思わない」と答えた中学生は 51.9%であった（高校生になると 53.1%に増加する）。そしてその筆頭に挙げられた理由は、「子どもでいる方が楽だから」である（33.8%）。すなわち、大人と違って働かなくて良い、それでも十分に満足できる（消費）生活は行えるのである。日本社会には、子どもを大人にする動機付けが不足しているのである[43]。

この「第２」の理解は、ここまでの 2013 年度の中学３年生について考えてきたことと良く符合する。すなわち、意識面では、中高生の平均像に近い姿なのだと考えられる。次に 2015 年度の中学３年生について検討しよう。それが図表 40 である。図表 39 と同様に表側は「将来の居住地志向」とした。

図表 40　2015 年度の中学３年生の「将来の居住地志向」と「将来の夢」

将来の居住地志向	将来の夢
戻ってきたい	将来なりたい職業、医者とかになって、病気とかそういうもので苦しんでいる人をできるだけたくさん助けたいかなーと思ってます。
戻ってきたい	二次元と服にまみれた生活をしたい。仕事、なんか服屋の店員さんとか楽しそう。夢、何だろうね。小学校のころはね、何にでもなれると思うんですけどね、この年になるともう現実を知るんですよ。ネイリストとか。とりあえず楽しんで、楽しんで死にましょう。そんなに苦労して苦労していい成績とってね、楽しいことないよりはね、好きなことやってた方がいいんだよ。
戻ってきたい	人や自分の家族を守っていきたい、と言うのが夢です。
戻ってきたい	近い夢：自由のきく身分の内にやりたいことをする　遠い夢：いろいろな場所に行き、いろいろな話を聞いて、共感できるところ、できないところを見つける。
戻ってきたい	保育士もなりたいけど、親が言ってるなんか事務とかそういう系もやってみたい。北海道以外の所に行きたい。沖縄行きたい。旅行したい。
戻ってこない	ないでーす。よくきかれる。夢ないんですかって、先生に。あるわけがなーい。
戻ってこない	からくり屋敷をつくる。バイクで好きなところへ行く。
戻ってこない	特にありません。
戻ってこない	とりあえずやりたいことを全部やって、面白くないことも自分にとって面白くできるぐらいの満足感というか、の人生を送れたらいいかなって思っています。
戻ってこない	自分も周りも楽しければそれでいい。
戻ってこない	理科関係の仕事に就く。

「戻ってきたい」と答えた５人を多い順にみてゆく。職業希望（順に「医者」、なれないと思っているがという限定付きで「ネイリスト」、そして「保育士」か「事務」）を語った中学３年生が３人いた。そして趣味的なニュアンスをもったもの（「二次元と服」、

[43] NHK 放送文化研究所『NHK　中学生・高校生の生活と意識調査２０１２　失われた 20 年が生んだ”幸せ”な十代』（NHK 出版、2013 年。188・9 頁）を参照。ただし該当個所では少数派の「大人になりたい」中高生のみに限定し分析を深めている。「大人になりたくない」多数の中高生の分析は、深められていない。データは付録 27 頁を参照。要約版はインターネットで見ることができる。アドレスは以下。
www.nhk.or.jp/bunken/summary/yoron/social/pdf/121228.pdf

「旅行」）を語った中学３年生が２人いた。同様に「苦しんでいる人を助けたい」、「人や自分の家族を守っていきたい」という「人助け」を夢であると語った中学３年生が２人いた。そして最後に、「やりたいことをする」、「いろいろな場所」や「いろいろな」（人の）話を聞くなかで（「聞いて」）自分の考え方を育てる（「共感できるところ、できないところを見つける」）と抽象的に自分を育てるという意味で「夢」を語った中学３年生が１人いた。将来の夢が、職業や「人助け」という直接的な形で、また人のなかで「自分の考え方を育てる」という間接的な形で、社会のなかであるいは社会に関わる形で進むであるだろう自己の実現という「夢」を語ったと理解できるだろう。「夢」と社会がセットになっている点を指摘できる。「戻ってこない」と答えた６人はどうだろうか。

順にみてゆく。まず「ない」が多い点が指摘できる。「自分も周りも楽しければそれでいい」が実質的に「ない」に含まれると考えると、3 人である。そして、職業希望（「理科関係の仕事に就く」）が 1 人、趣味的なニュアンスをもったもの(「からくり屋敷をつくる。バイクで好きなところへ行く」)が１人いた。そして、「やりたいことを全部やる」「満足な人生を送る」と語った中学３年生が 1 人いた。そしてこの「やりたいこと」や「満足」が主観的な色彩を帯びたものであることは言うまでもないだろう。

このように、2015 年度の中学３年生においては、「夢」の性格が「将来の居住地志向」と対応した形でかなり異なっていると推察できる。「戻ってきたい」と考える中学３年生は、直接的に社会的な「夢」や社会あっての「夢」という形で発想し、「戻ってこない」と考える中学３年生は「ない」、あるいは主観的な、厳しい言い方をすれば自己満足的なものとして「夢」語ることになっている。その意味で 2013 年度の中学３年生の全体の性格と類似していると考えられる。すなわち、「戻ってくる」と考える中学３年生にとって、村は「夢」を考える上での「社会的な参照点」のような意味をもっていると考えられる。「戻ってこない」と考える中学３年生は、職業ぐらいしかそれがない。そのため個人的・趣味的で「夢想」的なものとなる。

このような考察から、「村アイデンティティ」をもつことがどのようなものであるのか、あるいは将来を考えるときに「村」がどのような意味をもっているのか、についての重要な示唆を得ることができたと思われる。それは端的に言えば、「大人」や「夢」を主観的なものととらえるのか社会的な関係の視野の下にとらえるのかの違いである。そして後者の中学３年生にとっての社会としては、「『都市』にあるはずのものがない」というようなイメージとして抽象化された村ではなく、現実的な村であろう。

（７）小括――中学３年生の進路志向と「将来イメージ」

本章では、中学３年生の進路志向（中学校卒業後の進路等）ともう少し先の「将来イメージ」ついて検討を行った。前章では二つの学年の違いを相対化するために、興部中学校の３年生の「町アイデンティティ」研究を利用した。この方法は、本章で使うことができ

なかった。そのため、二つの学年の違いが際立つ形で強調されることになっている。極力強調されすぎないように注意したつもりであるが、どこまで上手く行っているのかは現時点では明らかではない。村の別の年度の中学３年生に同種の調査を重ねることによって平均的な姿が明らかになる可能性もあるが、学年で大きく異なることを前提にすると平均という考え方はそもそも成り立たない可能性もある。

ところで「将来イメージ」の検討は、「将来の居住地志向」、職業志向、「将来生活志向」、そして将来の「夢」についてと多岐にわたっている。また進路志向と「将来イメージ」の検討は分散して記述されていた。まず簡単にそれぞれの内容を概説し、次にそれらを総合して全体として「将来イメージ」がどうなっていたのかをまとめよう。

第１に、卒業後の進路と「村評価」（三段階区分、以下では省略）の関係を検討した。

2013 年度の中学３年生と 2015 年度の中学３年生の上記の関係は、おおざっぱに言えば反対の関係にあった。そして両者共に「矛盾」と考えられる進路選択をした中学３年生がいた。2013 年度の中学３年生では、「村評価」で「嫌い」であった中学３年生が最寄りの高校（興部高校・普通科）に進学した。2015 年度の中学３年生では、「村評価」で「好き」であった中学３年生が通学圏外（専門学科・高専が６人中４人）に進学した。

この矛盾について、前者については、「村評価」の「嫌い」の核にあった「『都市』にあるはずのものがない」というある種の疎外感は、進路が通学圏である（村を離れることができない）からこそ、募っているという可能性を示唆した。後者については、通学圏外へ進学する（村を離れる）からこそ、2013 年度の中学３年生の多くが抱いた「『都市』にあるはずのものがない」というある種の疎外感から自由であり、「好き」だと思えるのではないかという可能性を指摘した。村を離れる予定の中学３年生にとって、村は「『未来』の思い出の場所」である。言わば「思い出」の「先取り」をしているという解釈である。このように解釈するなら、2013 年度と 2015 年度の中学３年生のうち多くが、「好き」と「嫌い」で分かれるが、進学後の高校生活の先取りする形で、通学圏外に進学する中学３年生は「未来の思い出の場所」を「懐かしみ」、通学圏に進学する中学３年生（特に最寄りの高校）は「ずっと続く現在」として「嫌悪」していることになる。すなわち、進路志向が「村アイデンティティ」に影響している。

第２に、「村評価」と「将来の居住地志向」の関係を検討した。

2013 年度の中学３年生の場合は、「村評価」を反映し、大半は「戻ってこない」で「村評価」が「好き」や「半々」の場合に「戻ってこない」以外の選択もあった。その判断の理由は「村評価」に重なっていた。2015 年度の中学３年生の場合も、「村評価」によって「将来の居住地志向」が分化するという傾向は変わらない。しかし、「村評価」で「好き」が多かったことに対応して、「戻ってきたい」が約半数となった。ここでは「村アイデンティティ」が「将来の居住地志向」に影響している。

2013 年度の中学３年生の「村評価」が直接的に「将来の居住地志向」と重なっていたことと比較するなら、2015 年度はそれを免れているがゆえに、より本質的な課題を提起して

いるのではないかと指摘した。村にとっては「仕事をどう生みだすか」という課題と中学生にとっての「経験の幅を拡げたいという希望」をどのように受け止め、どのように「かなえるか」という課題である。

さらに両年度共に、通学圏の高校に進学するのかどうかは、「将来の居住地志向」に順接的には重ならない。興部高校に進学したとしても、「村評価」を機軸に、将来の居住地の選択をすると考えている。そのため 2015 年度の中学３年生の場合では通学圏外の高校に進学しても「戻ってきたい」と考える中学３年生がある程度存在した。

この「戻ってきたい」理由には、村の「良いところ」の検討でも示唆した生活実感としての「生活の穏やかさ」が重なる。これが十分に手応えのある価値として中学３年生の「将来の居住地志向」に影響を与えていると考えられる。

第３に、「将来の居住地志向」と職業志向の関係について検討した。

2013 年度と 2015 年度の中学３年生の場合では、全く異なっていた。2013 年度の中学３年生の場合、「戻ってこない」という「将来の居住地志向」はっきりしているものの、職業志向ははっきりしていなかった。職業志向は「モラトリアム」されていると考えることができる。2015 年度の中学３年生の場合、職業志向ははっきりし分化し、進路選択と連動した自分の「キャリア」に対する考え方の一部となっていた。

職業志向は、それが現実的なものであれば「将来の居住地志向」とひとつながりのものとして考えられているはずであるが、2013 年度の中学３年生の場合はそうではなかった。しかし、2015 年度の中学３年生の場合、その通りであった。

第４に、「将来生活志向」の構造について検討した。2013 年度の中学３年の場合は、「夢をみない」、「人並み」に集約できるような具体性に欠けるものとなっていた。2015 年度の中学３年生の場合は、多岐にわたった豊富な内容に分化していた。「将来生活志向」は、「将来の居住地志向」や職業志望にも表れていた「キャリア」に対する考え方と緩やかな関係があった。具体的な「将来イメージ」のセットがあると考えられる。

「将来生活志向」はさらに年度間の詳細な比較も行った。その結果、2013 年度の中学３年生の「将来生活志向」において多用される「普通」とは、「将来生活志向」の未分化（「ぼんやり」、あるいは「モラトリアム」）であることの別名ではないかと指摘した。そしてこの「将来生活志向」の未分化は、ここまで何度も指摘してきたように、不確定な将来全体のなかで自分がどのように生きるかという諸志向におけるアンバランス（村に「戻ってこない」という点のみで鮮明）と関係している。さらに、2013 年度の中学３年生の「分相応志向」と 2015 年度の「夢追求志向」の対比に注目し、あたかも、「夢追求志向」を諦めたからこそ、「分相応志向」となったのではないかとさえ考えられると指摘した。「将来の居住地志向」において「戻ってこない」でのみはっきりする未来の生き方は、そこでしか主体性を発揮できないこと（「諦めた」）の表現になっている。そして 2015 年度の中学３年生の「社会参加志向」の検討から、「将来イメージ」は個人の趣味に還元されない社会的な関わりのなかでこそ育まれるのではないかと指摘した。

第５に、将来の「夢」の構造について検討した。これについても年度による差が大きかった。2013 年度の中学３年生は、「大人」というイメージもぼんやりしていた。2015 年度の中学３年生においては、「夢」の性格が「将来の居住地志向」と対応した形でかなり異なっていた。「戻ってくる」と考える中学３年生は、直接的に社会的な「夢」や社会あっての「夢」という形で発想し、「戻ってきたい」と考える中学３年生は「ない」、あるいは主観的で自己満足的な「夢」を語ることになっていた。その意味では 2013 年度の中学３年生の全体の性格と類似していると考えられる。これらのことから、「戻ってくる」と考える中学３年生にとって、村は「夢」を考える上での社会的な「参照点」のような意味をもっていると考えられる。

これらの検討から、村の中学３年生の「将来イメージ」は、以下のように考えられる。

なんと言っても年度の差が大きい。2013 年度の中学３年生の「将来イメージ」は、「将来の居住地志向」のみが鮮明で、「戻ってこない」を基調としていた。そして、職業志向はあいまいで、「将来生活志向」は「普通」の言葉が頻発し、「大人」になったら何がしたいかもぼんやりしていた。すなわち、「村評価」（「『都市』にあるはずのものがない」）と強く関係した「将来の居住地志向」（「戻ってこない」）以外は、具体的に考えられていない。中学３年生時の進路選択（将来のことを考える契機）も、自分の生き方の探索を促進するものとして意味をもっていない。いわゆる「進路多様校」普通科へ進学したことも、それと強く関わっている可能性がある。「モラトリアム」している。だからこそ、そのなかで否定的な「村アイデンティティ」が直接影響する「将来の居住地志向」のみが鮮明になっている。他方で、2015 年度の中学３年生の「将来イメージ」は、「将来の居住地志向」、職業志向、「将来生活志向」、将来の「夢」のそれぞれにおいて、中学３年生の時点のものとしては十分に、自分の生き方として考えられている。だからこそ、専門学科・高専の進学をする中学３年生も多かったのだと考えられるだろう。そして「村アイデンティティ」は進路志向や「将来イメージ」が「モラトリアム」されている場合とは別の、前述したような異なる影響力を発揮したと考えられる。

この年度による差が生じた理由について決定的な説明は不可能である。全体が有機的に関連し、因果関係には整理できないからである。しかし、卒業後の進路の選択が迫ってきた中学３年生（調査は９月に行われている）にとって「通学圏か通学圏外か」や「普通科か専門学科・高専か」を判断することは、「将来イメージ」の個性的な分化に影響する。その際、通学圏の普通科の進路をとる中学３年生は「モラトリアム」（高校が複数ある都市でも、名だたる「進学校」へ進学する以外では通例である）しがちである。他方で通学圏外の「専門学科・高専」に進学する中学３年生は、職業志向を考えざるを得ない。さらには「将来の居住地志向」や「将来生活志向」もその影響を受ける。すなわち、二つの学年での進学先の差は、中学３年生の進路志向の分化（未分化）に影響する。前者（通学圏の普通科）と後者（通学圏外の「専門学科・高専」）の数的情勢が重要となる。そして相対的に大きな集団の考え方が他の中学３年生に影響する。その結果が学年の特徴として記述され

ていると考えられる。

この解釈を単純に受け取れば、通学圏外の「専門学科・高専」に進学することは、「村アイデンティティ」に肯定的な影響を与えると主張しているのではないかと受け取られる可能性もある。しかしそうではない、進路志向や「将来イメージ」の「モラトリアム」が「村アイデンティティ」とこの事例において関わっていた在り方として、そのようであったという確認である。この点については、まとめでもう少し検討したい。

5．まとめ――「冬囲い」の時代の「村アイデンティティ」のゆくえ

第１章で中学生分析の焦点を記述したが、それに従って第２章から第４章において、西興部村の中学３年生の「村コミットメント」、「村アイデンティティ」、進路志向と「将来イメージ」について明らかにしてきた。それぞれの内容については小括に委ねたい。

本章では、まず中学生（中等教育における「若き担い手」）の「村アイデンティティ」にのしかかる現代的な三つの前提条件について確認する。そこから、「冬囲い」の時代の西興部村（小規模自治体）において、これらの前提条件の転換可能性を、本事例の示唆を基に考えてみたい。

第１の前提条件。たとえ西興部村のような小規模自治体であっても、家庭・地域社会（コミュニティ）は中学生をその成員（メンバー）として、無意識の内に社会化する力はないこと。

家庭はそのひとつの重要な場である。しかし現在の就労状況や生活のゆとりのなさは、「自立」が要求されている以外で、中学生が理解できるような形での人格期待（人としての生き方）はなかなか伝らない。また地域社会という点では、そもそも「家族以外の村の人との会話」も少ない。「隣近所」関係の存在も、一部を除いて窺い知ることはできない。中学生の生活環境が、全体的には「振り子型」（家庭－学校）から「トライアングル型」（家庭－学校－消費社会）に移行したという点については研究の課題においてふれた（3・4 頁と脚注６を参照）。片面だけの「トライアングル型」生活環境（22 頁参照。バーチャルな消費社会にはふれながら、リアルなそれには日常的にふれていない）中学３年生にとって、「クラブ」や「習い事」は家庭・地域社会（コミュニティ）や学校以外の「第３の場」として重要である、と指摘した（22・23 頁を参照）。

第２の前提条件。中学３年生にとって、消費社会の格差構造によって育まれた「疎外感」とその結果としてもたされる否定的な「村アイデンティティ」はぬぐいがたいこと（43-48 頁の小括を参照）。

その結果、「村評価」の「良くないところ」に、「郊外型の消費環境セット」が欠けていることへの不満が自動的に積み上がる。これは対比のために検討した興部中学校の３年生でも同様であった。そしてこれと、「経験の幅を拡げたいという希望」（59 頁を参照）は別問題として考えた方が良い。

第３の前提条件。中学３年生の進路志向や「将来イメージ」は未分化で曖昧であり、それに否定的な「村アイデンティティ」が結びついてしまうこと。

地方の中学校において受験競争という契機の与える影響力は乏しい。学校は「キャリア」教育（将来の職業志向の明瞭化を図ることで学習モチベーションを喚起する）実践を通して、生徒の進路志向の発達や明瞭化に尽力していると考える。しかし、なかなか難しい。

なぜなら、日本の教育と雇用構造に規定された問題であるからだ[44]。さらに一般的な意味で、日本の中学生・高校生は、「トライアングル型」の生活環境の下、大人になるモチベーションも欠いている（71 頁と脚注 43 を参照）。本報告書では二つの年度の学年の比較を行ったが、村の中学生の平均像は 2013 年度の中学３年生に近いと筆者は推理している。そして、2013 年度の中学３年生の進路志向や「将来イメージ」の未分化・曖昧化は、否定的な「村アイデンティティ」の参照と深く関係していた。逆に 2015 年度の中学３年生のように進路志向や「将来イメージ」が分化している場合には、「村アイデンティティ」を多面的に参照しながら、自分の将来の生き方を考えていた（72～76 頁の小括を参照）。

この三つの前提条件にどのように抗するのか（転換可能性の模索）は、「冬囲い」の時代の教育と大人の課題である。事例からの示唆について２点掲げ、結びとする。

（1）「村コミットメント」のフロンティア

まず、異なる進路や夢をもった生徒が混在して一緒に活動・交流する中学校時代には、独自の重要性があることを力説したい。2015 年度の中学３年生が、学校生活で様々なことを「やりきり」、充実させ、互いに影響を与え合い進路志向や「将来イメージ」を育んだことに例証されていると考える。「村アイデンティティ」や「将来イメージ」を形作る生徒の「無意識」は、生徒同士の活動のなかで育まれる。

次に、「第３の場」（村横断的で異年齢の関わりの場）へ中学生が参加することの重要性については既にふれたので繰り返さない。小さな地方自治体だから、やりやすいこともあると考える。さらに、中学校の教育課程と自治体の関係に関わって少し述べる。

中学校が（村）「社会に開かれた」ものとなる方向性は、コミュニティ・スクールや新しい学習指導要領の「社会に開かれた教育課程」とする方針においても打ち出されている。しかし、学校にこれ以上の負担をかけないことは絶対条件であろう。学校が様々な問題を丸抱えさせられる形で進められたこれまでの教育改革が教員のオーバーワークを招いたのは、良く知られたところである[45]。そのため学校が抱えすぎている課題を、社会に返還する方向で考えられなければならない。

ところで小規模自治体の運営においては、自治体自治と住民自治の両輪がより緊密に支え会うことが重要である[46]。ここに引きつけて考えると、学校も含めた住民側で新たな取り組みを作るのではなく、普段の「コミュニティ・ワーク」に中学生を参加させることを目指してはどうかと考える。「地域づくり」において自治体活動への参加が中学生にも求められるようになってきた。たとえば、ボランティアへの参加である。しかしながら、住民自

---

44 拙稿、「北海道におけるキャリア教育の現状と課題（年報フォーラム 北海道における格差・貧困と子ども・教育）」（『教育学の研究と実践』（北海道教育学会）、5、2010 年、29-38 頁）参照。

45 北海道教育委員会の調査でも、中学教諭の 47%が「過労死ライン」にあるというショッキングな報告がなされた（北海道新聞 2017 年 9 月 9 日朝刊を参照）。

46 今井照、『地方自治体講義』（ちくま新書、2017 年）の特に「第４講　地域社会と市民参加」を参照。

治の根幹は行政への参加・参画ではなく、代表制民主主義にある。その意味で、中学生も村の構成員のひとりとして議会への参加（傍聴）や意見表明がこれからの目指すべき方向ではないだろうか。小玉重夫の問題提起は現代的なものである（2・3 頁と脚注 4 を参照）。特に「冬囲い」の時代の地方自治体が目指すべき方向であろう。

北海道でも、「18 歳選挙権」に関わって中高生を議会に参画させる取り組みが既に始められている。「子ども議会」や「中学生議会」である[47]。学校側に新たな仕事を発生させないためには、中学生版の模擬議会を新たに考えるのではなく、日常的な村議会と中学生を結びつける取り組みとして考える方が近道である。村議会の活性化方策ともつながる話であろう。

コミュニティへの心情的同化を図る回路のつなぎ直し（「トライアングル型」の生活環境を前提にすると不可能だと判断するしかない）ではなく、未来の村民として遇し、現在の村政について（可能であれば）もの申すことが、「村コミットメント」のもうひとつの回路なのではないだろうか[48]。

中学生には「早い」のではないか、という主張もあると考える。その点について、「村アイデンティティ」と関連づけて補足する。

（2）「村アイデンティティ」のフロンティア

中学３年生の将来志向と「将来イメージ」と「村アイデンティティ」は相互参照していた。

直接的な形では、卒業後の高校等の生活を先取りする形で、「村評価」が強化されるというものであった（56 頁を参照）。通学圏に進学する場合は現在の「村評価」が「ずっと続く現在」として「嫌い」が強化され、通学圏外に進学する場合は「未来の思い出の場所」として「懐かしみ」「好き」が強化されると解釈していた。

次頁の図表 41 は「村アイデンティティ」の構造を軸に注目して、「村評価」の対比を確認したものである。これを利用して検討を進める。

まず、「村アイデンティティ」は、「村評価」の対比として構造化されていた。対比の軸は、「村における生活評価」軸、「自然評価」軸、「自治体評価」軸、「コミットメント受容評価」軸、「コミュニティ民主主義評価」軸と名付けた五つを考えた。後者の三つは「良いところ」や「良くないところ」に対応するものがない軸である。さらに、そのうちの二つ

---

47 最近の北海道新聞では、知内町（2017 年 12 月 2 日。以下は年を省略する）、木古内町（11 月 29 日）、中標津町（11 月 2 日）の「中学生議会」や新得町（12 月 6 日）、壮瞥町（11 月 25 日）の「子ども議会」の取り組みが報道されていた。括弧内は記事の日付である。これ以外では「中学生と市長が語る会」が歌志内市で行われたという記事もあった（11 月 25 日）。記事になっていないものでも様々な取り組みがあるかもしれない。

48 小玉重夫は、「子ども・青年像」の「再政治化」について問題としていた（3 頁参照）。筆者はそれと「トライアングル型」の生活環境を結びつけて、中学生を「若き担い手」と考えるという本報告書の課題を主張した（4 頁参照）。

は2015年度の中学３年生にのみに存在した軸である。比較のため興部中学校の３年生の「町アイデンティティ」も掲げておく。対比の軸は、「地域比較」軸、「産業評価」軸、「自治体評価」軸と名付けた三つを考えた。それぞれの内容は、第３章の（５）と小括を参照いただきたい（38～49 頁）。

図表 41　村・町「アイデンティティ」――「評価」の対比軸

		2013年度西興部中学校3年生		2015年度西興部中学校3年生	
		「良いところ」	「良くないところ」	「良いところ」	「良くないところ」
「村アイデンティティ」の軸	「村における生活評価」軸	「環境がよい」・「生活しやすい」	「『都市』にあるはずのものがない」	「生活が穏やか」	「不便」・「村の特徴が嫌い」
	「自然評価」軸	「自然のめぐみがある」	「自然が嫌い」	「自然のめぐみがある」	「自然が嫌い」
	「自治体評価」軸		「自治体が良くない」	「自治体の取組がある」	「自治体が良くない」
	「コミットメント受容評価」軸	－	－	「体験可能性がある」	－
	「コミュニティ民主主義評価」軸	－	－	－	「村内の対立」
量的な対比		1	2.1	1	1.1

		2016年度興部中学校3年生	
		「良いところ」	「良くないところ」
「町アイデンティティ」の軸	「地域比較」軸	「自然のめぐみがある」・「生活が穏やか」	「『都市』にあるはずのものがない」・「『ワクワク』感がない」
	「産業評価」軸	「第一次産業が盛ん」	「停滞する産業」
	「自治体評価」軸	「地域の取組がある」	「自治体行政問題」
量的な対比		1.4	1

ここで考えたいのは、第２の前提条件となった「トライアングル型」生活環境による悪影響（否定的な「村アイデンティティ」を自動的に積み上げること）をどのように転換するのかということである。考える素材として興部中学校の３年生の「町アイデンティティ」の検討を行った（47・48 頁）。同時に、問題性についても指摘した。興部町の「良いところ」の中核的部分に、市場価値や市場からの評価が影響している可能性の指摘である。西興部村においても、中学生の誇りを高める形で「胃袋をつむ」という路線を追求することは重要である。しかし、考察の結果としてもうひとつの路線、「生活が穏やか」と「福祉の村」が結びついた形での「村アイデンティティ」の構築可能性や「村コミットメント」を深めるスタイルでの「村アイデンティティ」の構築可能性について示唆した（49 頁）。

「村コミットメント」の方向性については前述した。その根拠となるインタビューでの中学３年生の発言を紹介しておく。共に、2015 年度の中学３年生の「村評価」ででてきた「コミットメント受容評価」軸と「コミュニティ民主主義評価」軸を補足する意味をもつ内容となっている。共に、調査時の中学３年生が卒業し、OB・OG となった方（仮に A さんと B さんとしておく）を追跡調査した時のインタビューが元になっている。このインタビューは研究室所属の大学院生が行った。

まず、「コミットメント受容評価」軸に関わるものである。大学院生は、「学区外」に進学した方に、現在居住する都市と村を対比させ、評価の変化を聞き出そうと質問した。それに答えたものである。インタビューでの発言はほぼそのままである。ただし、固有名詞等で人物が特定できるような情報（都市名等）は匿名にした。筆者が補足した部分は丸カッコでくくった。下線は筆者が付けた。

○○（都市名）は西興部に比べたら、物足りないってか、楽しくない。こっちきてから遊ぶ、息抜きみたいなことが全然なくなったんで。西興部にいたとしたら、土日とかとりあえずトレセンとかでバスケしてたりとか、今よりは充実した土日の過ごし方っていうのができてると思うんすけど。今だったらなんか全然、うすっぺらーい、ってか中身のない感じの土日。似たようなものばっかだと思えちゃった。西興部のほうがいろんなものっていうか、いろんなことができるような気がして。今自分が○○（都市名）にいてできることと、西興部にいてできること考えたら、西興部にいてできることのほうが多いのかなって。そこでかかわってくるのは友達とかかな。○○（都市名）とかなんかすぐに呼ぶっていうか、集まるとかできないけど。キャッチボールとかバスケとかやろうっていったら集まってくれるんで、そういう点ですかね。自分にとってって感じなんすけど、自分がやるようなことがいろんな店あっても、似たようなことばっかっていうか。店とか行っても、まあひとりで行くんで、見るとか、服見るとか、典型的な感じのことしかどんなとこ行ってもできなくて。結局はどんなとこ行っても、買うとかじゃなくても、見てとかそういうのばっかで。それも全部一人なんで、意見とかそういう話とかもそれにかかわって話すこととかもできないんで。全部結局同じようなものなんじゃないかなって。

A さんが西興部村を出て、新しく住むことになったのが北海道でも五本の指に入る大都市であることを補足しておく。筆者が「郊外型の消費環境セット」と名付けたものは、当然全て揃っている場所である。

ここでの A さんの主張は多岐に渡っているが、「『都市』にあるはずのものがない」と考える中学３年生にとって垂涎の的となる環境下での発言であることに注意してほしい。その生活を「物足りない」、「うすっぺらい」、「中身のない」、「似たようなものばかり」と表現しているのである。それと対比して、「西興部にいてできることのほうが多い」と評価する。そこには、友人の存在も関わっている。「可能性のある場としての村」把握が語られていると考えた。

さらに、インタビューした大学院生は A さんの「可能性のある場としての村」把握が理解できず、質問を続けた。それに A さんは答えてゆく。インタビューでの大学院生の質問は丸カッコの中に鍵カッコで入れておく。

夢は、なんだ、西興部で安定した暮らしをするっていうものかもしれません。あとは親孝行するとか。西興部に対する気持ちと、あと親に対しての感謝ですか。それが（村を出て）より一層大きくなった気がします。(「人間関係と？」)安心感。それはすごいあったんだなあって。(「○○（都市名）が薄っぺらくて、

西興部が濃い。普通逆だと思わないか？」）多分普通だったらそう。何て言うんだろうなあ。○○（都市名）だったら毎日がもう似たようなものばっかで。だいたい同じように毎日暮らしてたんすけど、西興部だったら毎日毎日が色んなことあって。ばかやったりとか、そういうこととか。何かが違うんすよ。○○（都市名）の暮らしも楽しいっちゃ楽しいって感じなんすけど、めっちゃ楽しいってことではないっってことなんすかね。たぶんそれで物足りないとか似たようなって感じなのかもしれないっす。

自分の言葉を探しあぐねながら教えてくださっているのだが、言いたいことは伝わってくる。やはり、「可能性のある場としての村」という評価である。もっと正確にするなら、自分の活動の「可能性を拡げることができる場所としての村」である。提供されるだけものを受け取る（消費する）○○（都市名）と比較して、自分で何かを起こすことができ、それが可能なのは村という（家族も含めた）場だからなのである。そこに村や親に対する感謝の気持ちがつながっている。

この発言に込められているのは、筆者が「コミットメント受容評価」軸と呼んだものに重なっている。都市では数多くの中でのひとりであるが、村では大切な構成メンバーのひとりである。この示唆は、実は「人口減少社会」において生じている「田園回帰」現象の核にある考え方に実に近い[49]。そして、このAさんの考え方は、「村コミットメント」の事実によって育まれたものである。このようなことを考えるとき、肯定的な「村アイデンティティ」を積み上げるための別の路線として、中学生の「村コミットメント」を拡げることが重要であることが分かる。「生活が穏やか」という価値に、中学生が村人として関わって（肩入れする）回路を創ることで生まれる「コミットメント受容評価」という価値を積み上げるという考え方である。このように考えるからと言って、直ぐに「将来の居住地志向」が改善するわけではないだろう。しかし、村人として関わって手応えは、村を離れてからも「将来イメージ」を考える上での「参照点」として残り続けるだろう。その他大勢のひとりとしてではなく、名前をもったひとりの村民として生きた経験は、生き続けると考えられる。

次に、「コミュニティ民主主義評価」軸に関わるものである。それは先の「村コミットメント」に関わる筆者の考え方は中学生には早いという考え方に、そうでもないという反論をする意味もある。中学3年生も中学生なりの村政治への評価を行っていた。これも研究室所属の大学院生が行った。Bさんも「学区外」に進学した方である。村は「好き」である。

---

49 「田園回帰」現象が進む農山村を分析した結果、「移住者を受け入れながら『地域磨き（づくり）』の相互規程関係の存在が明らかにされた」ことが報告されている（小田切徳美・筒井一紳編著『シリーズ　田園回帰③　田園回帰の過去・現在・未来　移住者と創る新しい農山村』（農文協、2016年）、217頁）。「人口減少」を続けていた農山村は、「ヨソモノ」の活動を生かすことで「地域づくり」を進めているのである。Aさんは、村人のひとりとしての「コミットメント受容」（活躍の場があるし、受け入れてくれる可能性）の意味について語っている。他方で「田園回帰」においてはさらに、農山村が「ヨソモノ」の「コミットメント」も受け入れながら、言わば「開かれる」ことによって「地域づくり」を進めて行っているのである。コミットメントを受け入れる場が創られることが重要なのである。さらに若者と地域のこれからの関係について、「田園回帰」の立場から考察したものとしては佐藤一子の『シリーズ　田園回帰⑦　地域文化が若者を育てる 民俗・芸能・食文化のまちづくり』（農文協、2016年）が詳しい。

だからこそ、批判もある。それが村から離れることで、両者共に弱まったという発言であった。

自分が実際に中学校から出てみて、自分が中学校にいた時だと、けっこうその裏の方で中学校の修学旅行は合同にすべき、２年に１度にすべきみたいなそういう議論が自分たちと関係ない雲の上でされていたらしいんですよ。ちょっと知り合いつてにそういうのを知って。何も中学生の気を知らないでとか思ってたんですけど。いざ自分が（村を）出てみちゃうと、ああでも自分もそのうち効率重視でそういう考え方しちゃうんだろうなっていう気がして、もういいやって思うときがある。(「きっかけとかはあるの？」)そう思ったのは、小学校でてからですね。いまちょっと小学校は人数少ない、今ちょっと増えたんですけど。やっぱり未だに（上興部小学校）と西興部小学校を一緒にしよう、一緒にしないみたいな話がちょいちょい出たり、出なかったりするらしいんですけど。正直、自分が（村を）出てみてると、どっちでも良いねって思っちゃう自分がいます。割と無頓着になりつつありますかね。何か変わるなら変わるも良し。変わらぬなら変わらぬもそれも良しみたいな。関係ないし、自分が○○（都市名）で騒いでも変わらんしと思っちゃう。やっぱり外でてみたら、こんなに軽いの当たり前で良いの、へーみたいな、そんな感じがします。(「でもいつかまた背負いたくなるのかも？」) なるんですかね。その時は別のモノを背負っていて、もう背負いきれないから、ハイ、みたいになる気がしますけどね。

まとめるまでもないだろう。確かに主張のテーマは身近だった修学旅行や小学校の統合問題である。しかし、当事者の主張を聞かないで「雲の上」で決めることは、理不尽だと考えていたのである。そのことを、B さんに主張する場面があれば（たとえば「中学生議会」[50]があれば）、堂々と主張したに違いない。しかし、その熱い気持ちも、「村を出てみると、どっちでも良い」ものになってしまう自分を見つけてしまうのである。旧来の「保護される存在としての『子ども・青年』像」が通用した時代から、もはや四半世紀が過ぎた。「18歳選挙権」も実施されている。中学生に相応しい配慮は当然であるが、関係することに当事者が発言すること、それを大人が聞くことは追求されるべき課題である。さらに、「冬囲い」の時代においては、中学生という未来の村民を積極的に遇しても良い。B さんが、「こんなに軽いの当たり前で良いの、へー」というのは、背負っていた責任を肩から下ろすことへの、予感はあったものの、予想外の「当惑」とでも呼ぶべきものであろう。強い責任感があったことの証左である。

この B さんの主張と A さんの主張と呼応する。すなわち、「コミットメント受容評価」軸と「コミュニティ民主主義評価」軸は補完的な関係にある。「活動可能性を受け止めることができる場所としての村」像の拡張と「コミュニティ民主主義」の「若き担い手」として遇してほしいという要求は、一体のものとして村の魅力を拓く可能性を示唆している。これは、「生活が穏やか」という価値に付け加えられることで、「『都市』にあるはずのものがない」という負の「地域アイデンティティ」を転換する可能性を拓くものと考える。

---

[50] 77 頁と補注 46 を参照。

（３）「冬囲い」の時代に「夢」を拓くこと

最後になるが、「村アイデンティティ」にのしかかる現代的な三つの前提条件と、それにどう関わってゆくかという意味での教育と大人の課題への筆者なりの回答は、この調査を検討した限りでは以下のようになる。

中学生の「トライアングル型」の生活環境に、新しい生活環境を加えることを目指す。中学生が「村コミットメント」を拡げ、深めることができる「第３の場」や村の「コミュニティ・ワーク」に関わることができる環境を創出する。この環境においては、「若き担い手」と遇する。このことで、消費社会の格差構造から生まれる否定的な「村アイデンティティ」に対抗できる豊かさをもった「村アイデンティティ」を形成可能にする。そのことで、進路志向や「将来イメージ」への「参照点」の多様化を可能にする。

このように考えたとしても、直ぐにＵターン希望者が増えるとは限らないだろう。しかし、自分が関わる手応えのある（あった）場所、肩入れできる（できた）場所で生きていたという記憶は、中学生の確かな財産となると考える。村は、自分のいる場所や未来を考える参照点となる。それは、少ない中学生からではあるが、語られていた。

補論　OB・OGの「村評価」と「将来の居住地志向」の変化

この補論では、OB・OG 調査の結果を利用し、「村評価」（三段階区分）が中学校を卒業してからどのように変化をしたのか、その概略を明らかにしたい[51]。

ところで、この図表の見方であるが、まず左表側に元々の調査（2013 年度、2015 年度）の区別が書かれている。参考は、中学３年生は行っていないが高校生の時にデータを補足するつもりで調査をお願いした方のものである。その次の欄が追跡時点の学年である。１年しかできなかった調査や２年間できた調査が混じっている。さらに調査時点での自宅通学か自宅外通学の区別が記述されている。以降が、村評価と「将来の居住地志向」と二つの項目の中学校時代からの変化について記述したものである。そして右表側が調査方法である。

図表 42　OBOG になってからの「村評価」と U ターン希望の変化

	追跡調査時点の高校・高専の学年	自宅・自宅外通学の区別	村の評価の変化			Uターン希望の変化			備考:調査方法
			中学3年時の村の評価	高校1年時の変化	高校2年時の変化	中学3年時のUターン希望	高校1年時Uターン希望の変化	高校2年時のUターン希望の変化	
2013年度分OBOG追跡調査	1年	自宅	嫌い	**無**(嫌い)	未調査	戻ってこない	**無**(戻ってこない)	未調査	インタビュー調査
	1年		嫌い	**無**(嫌い)	未調査	戻ってこない	**無**(戻ってこない)	未調査	
	1年		好き	**無**(好き)	未調査	戻ってきたい	**無**(戻ってきたい)	未調査	
	1・2年		半々	N.A.	**無**(半々)	戻ってこない	**有**(微妙)	**無**(微妙)	
	1・2年		嫌い	**有**強化(嫌い)	**無**(嫌い)	戻ってこない	**無**(戻ってこない)	**無**(戻ってこない)	
	2年		好き	未調査	**無**(好き)	戻ってきたい	未調査	無(戻ってきたい)	
	1年		半々	**無**(半々)	未調査	戻ってこない	項目なし	未調査	アンケート調査
	1年	自宅外	好き	**有**強化(好き)	未調査	戻ってこない	項目なし	未調査	
	1年		半々	**無**(半々)	未調査	戻ってこない	項目なし	未調査	
2015年度分OBOG追跡調査	1年	自宅外	好き	**無**(好き)	未調査	戻ってきたい	**無**(戻ってきたい)	未調査	インタビュー調査
	1年		好き	**有**(嫌い)	未調査	戻ってこない	**無**(戻ってこない)	未調査	
	1年		好き	**有**(半々)	未調査	戻ってきたい	**有**(戻ってこない)	未調査	
	1年		好き	**無**(好き)	未調査	戻ってこない	**無**(戻ってこない)	未調査	
(参考)	2年	自宅	未調査	未調査	半々	未調査	未調査	戻ってこない	インタビュー調査
	2年	自宅外	未調査	未調査	好き	未調査	未調査	戻ってこない	

※1　括弧内に評価の変化とUターン希望の変化を記した。太字は変化があったところ。
※2　追跡調査は、高校・高専1年時に可能になったもの、2年時のみ可能になったもの、1・2年時の両方で可能になったものからなっている。
※3　(参考)は高校2年生時の調査のみのもの。

2013 年度の自宅通学組の変化は、「村評価」の「嫌い」が強化された高校生が１人だけである。「好き」、「半々」、あるいは「嫌い」でも基本的に変化はない。「将来の居住地志向」では１人が「戻らない」が微妙になったと答えていた。学年が進むと家族との関係が浮上

[51] OB・OG 調査の一部しか報告できない理由については、謝辞に書きました。お詫び申し上げます。

しこの点での変化はあるものと考える。しかし、「村評価」の出発点がどこかは未検討であるが、中学校で決まった評価は高校では覆らないものと考えられる。自宅外の高校生では「好き」が強化された高校生が１人である。「将来の居住地志向」はアンケートに項目を設けていなかったため分からない。このようにみると、「強化」を除き変化があったのは、「将来の居住地志向」の「戻らない」が「微妙」に変化した１人だけである。すなわち、変化はほとんどない。

2015 年度の追跡調査は、全員自宅外通学組となった（4 人）。「村評価」では「好き」が「嫌い」になった 1 人と「半々」になった 1 人である。半分で変化があった。この点は興味深い。村を離れることによって、肯定的だった「村評価」は下がる方向へ変化する傾向があるのかもしれない。「将来の居住地志向」での中学３年生時点で「戻りたい」であった 2 人のうち１人に変化があった。「戻らない」への変化である。これも、「村評価」の方向と同じである。2015 年度の中学３年生の「村評価」の高さは、自宅外通学の高校・高専への進路の中学３年生に支えられているが、進学と新しい場所での生活は、それを過去のものにしつつあると評価できるのかもしれない。

謝辞

私（浅川）が所属する北海道大学大学院教育学研究院が西興部村と連携協定を 2014 年度に結ぶことを控えた 2013 年に、木村純先生（北海道大学名誉教授）のお誘いで西興部村を初めて訪問してから５年が経ちました。

私は「西興部の未来と若き担い手に関する総合調査」として、中学生と第一次産業（酪農、林業）、福祉施設等の若い働き手を対象とした調査の実施と西興部中学校への学習支援事業（「夏の学習会」）で村に関わらせていただきました。調査については、学校に対する報告会（1 回）と村に対する報告会（2 回）を行わせていただきました。また、大学院生と学生の参加する「夏の学習会」については４年を数えるにいたりました。

「ヨソモノ」である私ども大学人（教員と大学院生・学生）にこのような関わり方が可能になったのは、前鎌谷俊夫教育長（故人）と現吉田且志教育長を始めとした教育委員会と役場の皆様の全面的なサポートのおかげです。この場を借りて、感謝申し上げます。

ところでこの報告書は、中学生にお話しをうかがったもののうち、2013 年度と 2015 年度の二つの年度の中学３年生を対象とした調査を比較分析したものです。いささか遅い報告書の作成となったのは、比較する素材として別の調査が不可欠となったからです（詳しい理由は報告書に譲ります）。この成果から、「村アイデンティティ」を分析するためのいくつかの考え方と尺度を見つけることができました。

ところで両学年の生徒の追跡（OB・OG）調査も行っていたのですが、現実的な難しさ（高校生となった OB・OG は多忙で調査の機会を得られなかったこと）から、またこの研究を担っていた大学院生の進路変更により完遂にいたらず、この報告書への反映も不完全なものとなりました。前竹内校長を始め、先生方に OB・OG 調査で尽力していただいたにも関わらず、まとめることができませんでした。心からお詫び申し上げます。しかしながら、一部の OB・OG の村についての真摯な発言は大変重要な示唆を含み、この報告書の分析のなかでも特段の貢献をしています。

さらに、若い働き手を対象とした調査の結果についても鋭意作業を進め、報告書という形で村に還元したいと思っております。

最後になりましたが、貴重な勉強の機会をくださいました西興部中学校の前任の竹内剛校長と片原俊光校長、現任の竹内昭二校長、前任の田口雅和教頭、現任の吉村雅彦教頭、そして教職員の皆様、調査にご協力いただき中学３年生の皆様に、心から感謝いたします。

拙い報告書ですが、これからも精進し、より良いものとすることで、西興部村を始めとした小規模自治体と、北海道の中等教育の発展に貢献したいと考えています。

北海道大学大学院教育学研究院教授
浅川　和幸

平成28～30年度日本学術振興会科学研究費補助金
基盤研究（C）（研究課題番号　16K04521）「人口減少時代におけるノンエリート青年の社会的自立と中等教育の改善に関する研究」研究報告書２
「西興部村調査報告書１　西興部村の未来と「若き担い手」
――中学３年生は何を考えていたか」

研究代表者　浅川和幸

連絡先　〒060-0811　　札幌北区北11条西７丁目
北海道大学大学院教育学研究院
TEL・fax　011-706-2604

平成２９年１２月１８日発行
印刷　北海道印刷企画株式会社
TEL　011-562-0075